上大屋・樋越地区遺跡群

主要地方道、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書

生産址遺構（北西方向より）

生産址遺構群（西側傾斜面より）

製鉄址 A 号炉

製鉄址隅丸方形半地下式竪型炉

序　　文

群馬県勢多郡大胡町は、源頼朝の御家人として赤城南麓に勢力をもっていた大胡氏の居住地であり、天正18年に大胡藩二万石の城主として牧野康成・忠成の二代にわたり居城した城下町であります。

近年、交通機関の著しい発達に伴い、城下の曲折した中央街を通過する車量の増大は、いつ不測の事態が発生しないとも限らない状況にあり、大胡バイパスの早期実現が望まれるところであった。昭和57年茂木地区内一部開通により、朝夕の交通渋滞が一部緩和されたが、全面開通が完了してこそ大胡バイパスの機能が発揮されるものであった。

さて、茂木地内の天神風呂遺跡に引き続き、荒砥川の左岸に発達した開折台地上にある上大屋・樋越地区遺跡群の発掘調査を昭和58年11月より60年３月の１年５ヶ月にわたる長期間、担当職員と発掘作業に携わった方々の献身的努力で予想以上の成果をあげることができました。

今回は、縄文時代から近世に至る時代の遺物・遺構が確認され、とくに縄文時代の交流の明かしとなる利根川下流域の土器の検出、奈良・平安時代の生産址遺構群として、須恵器窯、製鉄址遺構、炭窯と一連の検出が特出すべきものであった。

この成果を広く公刊し、上野国における歴史を探る資料として多くの方々に活用され、研究活動に広く利用されることを願います。

刊行する運びになりましたのも、関係者等多くの方々の御指導、御協力をいただき、総力が結集された結果であり、厚く感謝の意を表します。

昭和61年１月

大胡町教育委員会

教育長　山　口　勝　雄

上大屋・樋越地区遺跡群

主要地方道、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書

例　　言

1．本書は㈱、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設に伴い事前調査された大胡町に所在する上大屋、樋越地区遺跡群の発掘調査報告書である。

2．調査は群馬県知事（群馬県道路維持課）の委託を受け、大胡町教育委員会が主体となり実施したものである。

3．調査は昭和58年度から昭和60年度の３ヶ年にわたって実施した。その事業の年度配分は昭和58～60年度が各遺跡の本調査で昭和60年度に整理作業を実施した。

4．調査、執筆は、大胡町教育委員会文化財担当、山下歳信が担当した。

5．遺物整理及び石器・土器の作図、トレース、拓図等の整理作業は、山下、阿久津美佐子、小川夏子、金田和代、栗原百合子、後藤菊美、見持恵美子、諏訪浩子、千葉俊江、萩原弘子、藤原鈴子、茂木悦子が担当した。

6．本書を作成するについて、下記の機関、諸氏に御指導、御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

県教育委員会文化財保護課、県道路課、前橋土木事務所、スナガ環境測設㈱、井上忠雄、西田健彦、阿久津久、穴沢義功、中束耕志、谷藤保彦、関根慎二、相京建史、下城　正、須田　茂、中村富夫、前原　豊、鬼形芳夫、依田治雄、飛田野正佳、時枝　務、仲野泰裕、増田　修、坂爪久純、水野順敏、浅野晴樹、安田厚子

7．発掘調査作業員は次の通りである。（敬称略）

青木廸代、荒井愛子、新井秀子、石井よね、石坂よし子、井田智江子、五十嵐かつ代、伊藤俊子、井上喜美子、岩丸陽子、江原サダノ、蛯子とみ子、大崎光子、大沢金子、大原きよ枝、大原真由美、大原三重子、岡田真佐子、小川夏子、奥野富子、奥野美津子、小倉いちの、小沢チヅエ、小沢幸代、狩野高子、喜楽輝子、久保田令子、栗原百合子、桑原陽子、小暮　宏、後藤菊美、小林千鶴子、駒田きく江、小沼洋子、近藤ヨネ、坂部米子、新保松及、須田照江、住谷あさ子、諏訪浩子、高橋充子、立川くに、千葉俊江、角田もと江、勅使川原道江、戸塚絹江、登丸たけ、中島幸重郎、中島つる、奈良恵子、南部きよの、荻原はる、林　ふさ、深沢つたえ、星野うめ、星野ふじ子、星野禮子、本間なみい、前田　豊、前原田美子、町田綾子、町田蘭子、蓑輪アキ子、三川きよ子、宮沢たまえ、森野千恵子、森下綾子、吉沢芳枝、吉田　悟、横沢礼子

目　　次

序　言

例　言

目　次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　発掘調査に至る経過と調査の経過…… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 2

Ⅲ　検出した遺構と遺物 …… 9

1　E　区 …… 9

(1)　検出した遺構と遺物 …… 9

(2)　包含層出土遺物分類と出土状況…… 18

2　F・G区 …… 63

(1)　検出した遺構と遺物 …… 63

(2)　包含層出土遺物分類 …… 95

3　H・I区 ……107

(1)　検出した遺構と遺物 ……107

(2)　包含層出土遺物分類 ……122

4　J・K区 ……125

(1)　検出した遺構と遺物 ……125

(2)　包含層出土遺物分類 ……134

5　包含層出土石器分類 ……143

6　L　区 ……160

(1)　検出した遺構と遺物 ……163

(2)　出　土　遺　物 ……167

7　M・N・O区 ……199

八ヶ峰生産址遺構 ……203

1　須恵器窯址 ……205

(1)　検出の概要 ……205

(2)　窯址の構造 ……205

(3)　灰原の状態 ……209

(4) 出土遺物 ……210
1 坏身 ……210
2 坏蓋 ……210
3 高台付埦 ……210
4 短頸壺身 ……211
5 短頸壺蓋 ……211
6 小型短頸壺蓋 ……211
7 広口壺 ……211
8 その他 ……211
(5) 遺物出土状況について ……215
(6) 法量について ……215
(7) 坏等のセット関係 ……216
(8) 個体数 ……217
(9) ヘラ記号について ……217
(10) 焼台について ……222
(11) 須恵器の年代観について ……222
2 炭窯址 ……262
(1) 1号炭窯 ……262
(2) 2号炭窯 ……263
(3) 3号炭窯 ……266
(4) 4号炭窯 ……266
(5) 5号炭窯 ……269
(6) 3号炭窯出土遺物 ……269
(7) 炭窯の推移について ……269
(8) 炭窯の年代観について ……270
(9) 総括 ……270
3 道路址遺構 ……271
4 柱穴址遺構 ……272
5 SD4 ……272
6 谷地部包含層出土古銭 ……272
7 製鉄址遺構 ……273
(1) 後肯部作業場 ……273
(2) 炉主体部 ……276
(3) 竪穴状前庭部作業場 ……278
(4) 出土遺物 ……278
(5) 小結 ……278
8 現代大鍛冶による実験 ……279

挿図目次

第 1 図　周辺の遺跡図…… 3
第 2 図　上大屋・樋越地区遺跡群全体図 ……5～6
第 3 図　E区全体図 ……7・8
第 4 図　SH1平面図…… 9
第 5 図　覆土中出土遺物と住居址外出土遺物接合図…… 10
第 6 図　SH1出土遺物(1)…… 11
第 7 図　SH1出土遺物(2)…… 12
第 8 図　SH1出土遺物(3)…… 13
第 9 図　SH1～9遺物展開図…… 14
第10図　SD1平面図…… 15
第11図　SD1出土遺物…… 16
第12図　SD2平面図…… 17
第13図　SD3平面図…… 17
第14図　SD3出土遺物…… 17
第15図　A群1類土器…… 18
第16図　A群3類土器…… 19
第17図　A群4類土器…… 19
第18図　B群3類A種(1)…… 20
第19図　B群3類A種(2)…… 21
第20図　B群3類B種(1)…… 24
第21図　B群3類B種(2)…… 25
第22図　B群3類B種(3)…… 26
第23図　B群3類B種(4)…… 27
第24図　B群3類B種(5)…… 28
第25図　B群3類B種(6)…… 29
第26図　B群3類C種(1)…… 31
第27図　B群3類C種(2)…… 32
第28図　B群3類C種(3)…… 33
第29図　B群3類C種(4)…… 34
第30図　B群3類C種(5)…… 35
第31図　B群3類D種(1)…… 40
第32図　B群3類D種(2)…… 41
第33図　B群3類D種(3)…… 42
第34図　B群3類D種(4)…… 43
第35図　B群3類D種(5)…… 44
第36図　B群3類D種(6)…… 45
第37図　B群3類E種(1)…… 47
第38図　B群3類E種(2)…… 48
第39図　B群3類F種(1)…… 50
第40図　B群3類F種(2)…… 51
第41図　B群3類F種(3)…… 52
第42図　B群3類F種(4)…… 53
第43図　B群3類G種…… 54
第44図　B群4類(1)…… 55
第45図　B群4類(2)…… 56
第46図　B群3類H種(1)…… 57
第47図　B群3類H種(2)…… 58
第48図　B群3類H種(3)…… 59
第49図　D群…… 59
第50図　各グリット遺物出土数…… 60
第51図　E区B群3類接合図(1)…… 61
第52図　E区B群3類接合図(2)…… 62
第53図　SH2平面図…… 63
第54図　SH2出土遺物(1)…… 64
第55図　F区全体図 ……65・66
第56図　G区全体図 ……65・66
第57図　SH2出土遺物(2)…… 67
第58図　SH3、4平面図…… 68
第59図　SH3、4出土遺物(1)…… 70
第60図　SH3、4出土遺物(2)…… 71
第61図　SH5平面図…… 72
第62図　SH5出土遺物…… 73
第63図　SH6平面図…… 74
第64図　SH6出土遺物…… 74
第65図　SH7平面図…… 76
第66図　SH7出土遺物(1)…… 77
第67図　SH7出土遺物(2)…… 78
第68図　SD5平面図…… 79
第69図　SD5出土遺物…… 79

第 70 図　ＳＤ６平面図…… 80
第 71 図　ＳＤ６出土遺物…… 81
第 72 図　ＳＤ７平面図…… 82
第 73 図　ＳＤ７出土遺物…… 82
第 74 図　ＳＤ８平面図…… 83
第 75 図　ＳＤ８出土遺物…… 83
第 76 図　ＳＤ９平面図…… 83
第 77 図　ＳＤ10平面図…… 84
第 78 図　ＳＤ10出土遺物…… 84
第 79 図　ＳＤ11平面図…… 85
第 80 図　ＳＤ12平面図…… 85
第 81 図　ＳＤ13平面図…… 85
第 82 図　ＳＤ13出土遺物…… 85
第 83 図　ＳＤ14平面図…… 86
第 84 図　ＳＤ14出土遺物…… 87
第 85 図　ＳＤ15平面図…… 88
第 86 図　ＳＤ16平面図…… 88
第 87 図　ＳＤ16出土遺物…… 88
第 88 図　ＳＤ17平面図…… 88
第 89 図　ＳＤ18平面図…… 89
第 90 図　ＳＤ18出土遺物…… 89
第 91 図　ＳＤ19平面図…… 90
第 92 図　ＳＤ20平面図…… 90
第 93 図　ＳＤ20出土遺物…… 90
第 94 図　ＳＤ21平面図…… 91
第 95 図　ＳＤ22平面図…… 91
第 96 図　ＳＤ23平面図…… 91
第 97 図　ＳＤ23出土遺物…… 92
第 98 図　ＳＤ24平面図…… 92
第 99 図　ＳＤ24出土遺物…… 93
第100図　ＳＤ25平面図…… 93
第101図　ＳＤ25出土遺物…… 93
第102図　ＳＤ26平面図…… 94
第103図　ＳＤ27平面図…… 94
第104図　Ｂ群３類Ｂ種(1)…… 96
第105図　Ｂ群３類Ｂ種(2)…… 97
第106図　Ｂ群３類Ｃ種…… 98
第107図　Ｂ群３類Ｄ種…… 99
第108図　Ｂ群３類Ｆ種……101
第109図　Ｂ群３類Ｇ種(1)……102
第110図　Ｂ群３類Ｇ種(2)……103
第111図　Ｂ群３類Ｇ種(3)……104
第112図　Ｂ群４類……105
第113図　Ｂ群Ｃ群、底部……106
第114図　ＳＨ８平面図……107
第115図　ＳＨ８出土遺物……107
第116図　ＳＤ28平面図……108
第117図　ＳＤ29平面図……108
第118図　ＳＤ29出土遺物……108
第119図　Ｈ区全体図……109・110
第120図　Ｉ区全体図……109・110
第121図　ＳＤ30平面図……111
第122図　ＳＤ30出土遺物……111
第123図　ＳＤ31平面図……112
第124図　第１土器群平面図……112
第125図　ＳＤ31出土遺物……113
第126図　第１土器群出土遺物……114
第127図　ＳＤ32平面図……114
第128図　ＳＤ33平面図……114
第129図　ＳＤ34平面図……115
第130図　ＳＤ34出土遺物……115
第131図　ＳＤ35平面図……116
第132図　ＳＤ36平面図……116
第133図　ＳＤ37平面図……116
第134図　ＳＤ37出土遺物……117
第135図　ＳＤ38平面図……117
第136図　ＳＤ38出土遺物……117
第137図　ＳＤ39平面図……118
第138図　ＳＤ40平面図……118
第139図　ＳＤ41平面図……118
第140図　ＳＤ41出土遺物……119
第141図　ＳＤ42平面図……119
第142図　ＳＤ42出土遺物……119
第143図　ＳＤ43平面図……120
第144図　ＳＤ44平面図……120
第145図　ＳＤ45平面図……120

第146図　ＳＤ46平面図……120
第147図　ＳＤ47平面図……121
第148図　ＳＤ48平面図……121
第149図　ＳＤ47・48出土遺物……121
第150図　ＳＤ49平面図……121
第151図　ＳＤ49出土遺物……122
第152図　ＳＤ50平面図……122
第153図　ＳＤ51平面図……122
第154図　Ｂ群２類……123
第155図　Ｂ群３類Ｄ種……123
第156図　Ｂ群３類Ｃ種……124
第157図　Ｂ群３類Ｇ種……124
第158図　Ｂ群４類……124
第159図　ＳＨ９～11平面図……128
第160図　Ｊ・Ｋ区全体図 ……127・128
第161図　ＳＨ９～11出土遺物(1)……129
第162図　ＳＨ９～11出土遺物(2)……130
第163図　ＳＨ12平面図……131
第164図　ＳＨ12出土遺物……131
第165図　ＳＤ52平面図……131
第166図　ＳＤ52出土遺物……131
第167図　ＳＤ53平面図……132
第168図　ＳＤ54平面図……132
第169図　ＳＤ55平面図……132
第170図　ＳＤ56平面図……132
第171図　ＳＤ57平面図……133
第172図　ＳＤ58平面図……133
第173図　ＳＤ59平面図……133
第174図　ＳＨ13平面図……134
第175図　ＳＨ13出土遺物……134
第176図　Ａ群１類……135
第177図　Ａ群３類……135
第178図　Ａ群３類……135
第179図　Ａ群５類……136
第180図　Ｂ群１類……136
第181図　Ｂ群３類Ｂ種……137
第182図　Ｂ群３類Ｃ種……138
第183図　Ｂ群３類Ｄ種……138
第184図　Ｂ群３類Ｇ種……139
第185図　Ｂ群４類……140
第186図　Ｃ群１類……140
第187図　Ｃ群２類……141
第188図　Ｃ群３類……141
第189図　Ｃ群４類……142
第190図　Ａ群１類……142
第191図　磨石(1)……145
第192図　磨石(2)……146
第193図　磨石(3)……147
第194図　磨石(4)……148
第195図　磨石(5)……149
第196図　磨石(6)……150
第197図　磨石(7)、石錘、石皿、磨製石斧……151
第198図　礫器、打製石斧(1)……153
第199図　打製石斧(2)……154
第200図　打製石斧(3)……155
第201図　打製石斧(4)、三角錘形石器……156
第202図　尖頭器、石匙……157
第203図　石鏃(1)……158
第204図　石鏃(2)、ペンダント……159
第205図　Ｌ区東壁、南壁土層図……160
第206図　Ｌ区全体図 ……161・162
第207図　ＳＭ２土層図……163
第208図　ＳＭ３、４間掘り込み土層図……164
第209図　ＳＥ15土層図……165
第210図　ＳＥ12・13・14平面図……166
第211図　ＳＤ60平面図……166
第212図　Ｌ区出土遺物(1)……168
第213図　Ｌ区出土遺物(2)……169
第214図　Ｌ区出土遺物(3)……170
第215図　Ｌ区出土遺物(4)……171
第216図　Ｌ区出土遺物(5)……171
第217図　Ｌ区出土遺物(6)……173
第218図　Ｌ区出土遺物(7)……174
第219図　Ｌ区出土遺物(8)……175
第220図　Ｌ区出土遺物(9)……176
第221図　Ｌ区出土遺物(10)……177

第222図　L区出土遺物(11)……178
第223図　L区出土遺物(12)……179
第224図　L区出土遺物(13)……191
第225図　L区出土遺物(14)……192
第226図　L区出土遺物(15)……193
第227図　L区出土遺物(16)……194
第228図　L区出土遺物(17)……195
第229図　SM3～4間遺物出土状況図……198
第230図　M・N・O区北壁土層図……199
第231図　M・N・O区出土遺物……200
第232図　M・N・O区全体図 ……201・202
第233図　生産址遺構群周辺地形図……206
第234図　生産址遺構群周辺全体図……207
第235図　須恵窯、灰原全体図……208
第236図　須恵窯平面図……209
第237図　短頸壺施文具……211
第238図　坏身接合図……212
第239図　坏蓋接合図……212
第240図　高台付埦接合図……213
第241図　短頸壺身部と広口壺接合図……213
第242図　短頸壺蓋接合図……214
第243図　その他接合図……214
第244図　窯体内各種土器最高位ドット……215
第245図　坏身底径別個体数……218
第246図　蓋坏と有蓋高台付埦個体数の対応……219
第247図　蓋坏と有蓋高台付埦個体数の対応
復元……220
第248図　ヘラ記号を有する個体接合図……221
第249図　ヘラ記号拓図……222
第250図　坏身底径（1cm）……222
第251図　口径、底径比表……222
第252図　坏身(1)……224
第253図　坏身(2)……225
第254図　坏身(3)……226
第255図　坏身(4)……227
第256図　坏身(5)……228
第257図　坏身(6)……229
第258図　坏蓋(1)……234
第259図　坏蓋(2)……235
第260図　坏蓋(3)……236
第261図　坏蓋(4)……237
第262図　坏蓋(5)……238
第263図　坏蓋(6)……239
第264図　坏蓋(7)……240
第265図　坏蓋(8)……241
第266図　坏蓋(9)……242
第267図　坏蓋(10)……243
第268図　高台付埦(1)……248
第269図　高台付埦(2)……249
第270図　短頸壺(1)……251
第271図　短頸壺(2)……252
第272図　短頸壺(3)……253
第273図　短頸壺蓋……255
第274図　広口壺……256
第275図　横瓶等……257
第276図　丸底壺……258
第277図　焼台(1)……259
第278図　焼台(2)……260
第279図　1号炭窯平面図……262
第280図　2・3号炭窯平面図……263
第281図　2・3号エレベーション図……264
第282図　4・5号平面図……267
第283図　4・5号土層図……268
第284図　3号炭窯出土遺物……269
第285図　道路址遺構平面図……271
第286図　柱穴址平面図……272
第287図　SD4平面図……272
第288図　谷地部包含層出土古銭拓図……273
第289図　製鉄址遺構平面図……274
第290図　製鉄址遺構セクション図……275
第291図　製鉄炉主体部……277
第292図　石積み側面図……277
第293図　製鉄址遺構出土遺物……278
第294図　大鍛冶装置等略図……279

図 版 目 次

図 版 1　A～E区全景／E区より赤城山を望む／E区作業風景／E区地割れ
図 版 2　遺物（第38図－14）出土状況／遺物（第41図－18）出土状況／遺物（第197図－92）出土状況／SD1セクション／SD1遺物出土状況／SD1遺物（第11図－1）出土状況／SD2／SD3
図 版 3　F・G・H区全景／SH2遺物出土状況／SH2遺物（第56図－2）出土状況／SH3・4
図 版 4　SH3・4埋甕／SH5／SH6／SH6セクション／SD5／SH7／SD6遺物（第71図－1、3）出土状況／SD6遺物出土状況
図 版 5　SD7／SD8／SD10／SD14／SD15／SD18／SD20／SD20遺物（第93図－1・2）出土状況
図 版 6　SD21／SD22／SD26／SD27／H・I区全景
図 版 7　H区近景／SD28／第一土器群／SD29／SD29遺物（第120図－1）出土状況接写／SD31／SD31遺物（第125図－1）出土状況接写／SH8
図 版 8　H・I区全景／I区近景西より／I区近景東より／SD38遺物出土状況／SD38
図 版 9　SD44／SD47／SD48／SD49／J・K・L区全景
図 版 10　J区近景西より／J区低地部／J区作業風景／SH9～11遺物出土状況／SH9～11完掘状況／SH12／SH12遺物（第164図－1）出土状況／SH13
図 版 11　SD52／SD53／SD54／SD55／SD56／SD57／L区全景
図 版 12　J・K区／L区西より／L区M3・4／L区M1コーナー部／L区M1／L区井戸址・円形土坑／SD60／長方形土坑群
図 版 13　L区竪穴状方形土坑／L区柱穴址群／L区遺物（第219図－150）出土状況／L区遺物出土状況／L区遺物（第216図－119）出土状況／M・N・O区近景／M・N・O区近景／M・N・O区トレンチ（東より）／M・N・O区トレンチ（西より）
図 版 14　須恵器窯址全景
図 版 15　須恵器窯址遺物出土状況
図 版 16　須恵器窯址遺物出土状況
図 版 17　生産址遺構群北より／生産址遺構群南より／作業風景／生産址遺構群西より／1号～3号炭窯・製鉄址／4・5号炭窯、須恵器窯址／1号炭窯／木炭出土状況
図 版 18　2号炭窯址／3号炭窯址／4号炭窯址／5号炭窯址／1号炭窯セクション／3号炭窯セクション
図 版 19　4号炭窯セクション／生産址遺構群作業過程／製鉄址遺構作業風景／製鉄址遺構セクション製鉄址遺構セクション／製鉄址遺構セクション／炉壁堆積状況、炉体内セクション
図 版 20　1号炉体／製鉄址遺構南西より／炉体完掘状況／炉体掘り方／炉壁の修復痕／布目痕が残る炉壁／指撫痕が残る炉壁／製鉄址遺構須恵器坏出土状況
図 版 21　道路址遺構／柱穴址群／谷地部トレンチ状況／現代大鍛冶
図 版 22　SH1出土遺物1～10（第6～8図）

図 版 23　ＳＨ１出土遺物11～30（第７～８）／ＳＤ１出土遺物１～４（第11図）
図 版 24　Ａ群１類土器１～５（第15図）／Ａ群３類１～５（第16図）／Ａ群４類１～２（第17図）
図 版 25　ＳＤ３出土遺物１～２（第14図）／Ｂ群３類Ａ種１～６（第18図）
図 版 26　Ｂ群３類Ａ種７～34（第18～19図）／Ｂ群３類Ｂ種１～２（第20図）
図 版 27　Ｂ群３類Ｂ種３～17（第20～21図）
図 版 28　Ｂ群３類Ｂ種18～76（第21～23図）
図 版 29　Ｂ群３類Ｂ種77～119（第23～25図）／Ｂ群３類Ｃ種１～２（第26図）
図 版 30　Ｂ群３類Ｃ種３～11（第26～27図）
図 版 31　Ｂ群３類Ｃ種12～19（第27図）
図 版 32　Ｂ群３類Ｃ種21～67（第28～30図）
図 版 33　Ｂ群３類Ｃ種68～76（第30図）／Ｂ群３類Ｄ種１～７（第31図）
図 版 34　Ｂ群３類Ｄ種８～15、22（第31～32、33図）
図 版 35　Ｂ群３類Ｄ種17～21、23～25（第32～33図）
図 版 36　Ｂ群３類Ｄ種26～66（第33～36図）
図 版 37　Ｂ群３類Ｄ種67～76（第36図）／Ｂ群３類Ｅ種１～８（第37図）
図 版 38　Ｂ群３類Ｅ種９～29（第38図）／Ｂ群３類Ｆ種１～10（第39図）
図 版 39　Ｂ群３類Ｆ種11～31（第40～42図）
図 版 40　Ｂ群３類Ｇ種（第43図）／Ｂ群４類１～27（第44、45図）／Ｂ群３類Ｈ種（第46図）
図 版 41　Ｂ群３類Ｈ種２～28（第46～47図）
図 版 42　Ｂ群３類Ｈ種29～51（第47～48図）／Ｄ群１～３（第49図）
図 版 43　ＳＨ２出土遺物１～14（第54・57図）
図 版 44　ＳＨ３・４出土遺物１～14（第59・60図）
図 版 45　ＳＨ３・４出土遺物15～28（第60図）／ＳＨ５出土遺物２～８（第62図）／ＳＨ６出土遺物１～７（第64図）
図 版 46　ＳＨ７出土遺物１～21（第66・67図）
図 版 47　ＳＨ７出土遺物22～26（第67図）／ＳＤ５出土遺物（第69図）／ＳＤ６出土遺物１～８（第71図）
図 版 48　ＳＤ７出土遺物１～３（第73図）／ＳＤ８出土遺物１～３（第75図）／ＳＤ10出土遺物１～８（第78図）／ＳＤ13出土遺物（第82図）ＳＤ14出土遺物１・２～５・７・８（第84図）
図 版 49　ＳＤ14出土遺物６・９～16（第84図）／ＳＤ16出土遺物１・２（第87図）／ＳＤ18出土遺物１・２（第90図）／ＳＤ20出土遺物１～３（第93図）ＳＤ23出土遺物１～６（第97図）
図 版 50　ＳＤ24出土遺物１～４（第99図）／ＳＤ25出土遺物１～７（第101図）／Ｂ群３類Ｂ種１～11（第104、105図）
図 版 51　Ｂ群３類Ｂ種12～30（第105図）／Ｂ群３類Ｃ種１～14（第106図）／Ｂ群３類Ｄ種１（第107図）
図 版 52　Ｂ群３類Ｄ種２～14（第107図）／Ｂ群３類Ｆ種１～４（第108図）
図 版 53　Ｂ群３類Ｆ種５～７（第108図）／Ｂ群３類Ｇ種１～12（第109図）
図 版 54　Ｂ群３類Ｇ種13～41（第109～111図）／Ｂ群４類１～８（第112図）
図 版 55　Ｂ群４類９～14（第112図）／Ｂ群・Ｃ群底部１～７（第113図）

図 版 56　ＳＨ８出土遺物１・２（第115図）／ＳＤ29出土遺物１・２（第118図）／ＳＤ30出土遺物１・２（第122図）／第一土器群出土遺物１～４（第126図）
図 版 57　ＳＤ31出土遺物１～５（第125図）／ＳＤ34出土遺物１～５（第130図）／ＳＤ37出土遺物１～４（第134図）／ＳＤ38出土遺物１（第136図）／ＳＤ41出土遺物１（第140図）
図 版 58　ＳＤ47･48出土遺物（第149図）／ＳＤ49出土遺物１～３（第151図）／Ｂ群２類１～９（第154図）／Ｂ群３類Ｄ種１・２（第155図）／Ｂ群３類１～４（第156図）／Ｂ群３類５・６（第156図）／Ｂ群３類Ｇ種１～３（第157図）
図 版 59　Ｂ群４類１・２（第158図）／ＳＨ９～11出土遺物１～19（第161･162図）／ＳＨ12出土遺物１・２（第164図）
図 版 60　ＳＤ52出土遺物（第166図）／Ａ群１類１～４（第167図）／ＳＨ13出土遺物（第175図）Ａ群３類１～５（第177図）Ａ群３類（第178図）／Ａ群５類１・２（第179図）／Ｂ群１類１（第180図）
図 版 61　Ｂ群１類２・３（第180図）／Ｂ群３類Ｂ種１～10（第181図）／Ｂ群３類Ｃ種１・２（第182図）
図 版 62　Ｂ群３類Ｄ種１～３（第183図）／Ｂ群３類Ｇ種１～16（第184図）／Ｂ群４類１～３（第185図）
図 版 63　Ｃ群１類１～４（第186図）／Ｃ群２類１～６（第187図）／Ｃ群３類１～４（第188図）／Ｃ群４類１～５（第189図）／Ａ群１類１、２（第190図）／Ｍ・Ｎ・Ｏ区出土遺物（第231図）
図 版 64　特殊磨石・磨石（第191～193図１～31）
図 版 65　磨石（第193～195図32～61）
図 版 66　磨石（第195～197図62～87）
図 版 67　石錘・石皿・磨製石斧・礫石・打製石斧（第197～199図88～115）
図 版 68　打製石斧・三角錘形石器（第199～201図116～138）
図 版 69　尖頭器・石匙・石鏃・ペンダント（第202～204図139～178）
図 版 70　陶磁器（第212図１～10）
図 版 71　陶磁器（第212～213図11～26）
図 版 72　陶磁器（第213図27～37）
図 版 73　陶磁器（第213～214図39～50）
図 版 74　陶磁器（第214図51～64）
図 版 75　陶磁器（第214～215図65～88）
図 版 76　陶磁器（第215～216図89～101）
図 版 77　陶磁器（第216図102～113）
図 版 78　陶磁器・カワラケ・摺鉢（第216～217図115～130）
図 版 79　摺鉢（第217～218図131～149）
図 版 80　土瓶・焙烙（第219～221図150～158）
図 版 81　焙烙（第221～222図）159～168）
図 版 82　焙烙・土鍋・香炉（第222～223図169～178）
図 版 83　硯・砥石（第224～226図179～226）
図 版 84　砥石・石臼（第226～227図227～243）
図 版 85　石臼・宝篋印塔・板碑（第227～228図244～253）

図 版 86　坏身（第252～253図１～16）

図 版 87　坏身（第253～254図17～34）

図 版 88　坏身（第254～256図35～50）

図 版 89　坏身（第256～257図51～66）

図 版 90　坏身（第257図67～74）／坏蓋（第258図１～６）

図 版 91　坏蓋（第258～259図７～23）

図 版 92　坏蓋（第259～261図24～41）

図 版 93　坏蓋（第261～262図42～58）

図 版 94　坏蓋（第262～264図59～74）

図 版 95　坏蓋（第264～266図75～91）

図 版 96　坏蓋（第266～267図92～98）／高台付埦（第268図１～４）

図 版 97　高台付埦（第268～269図５～11）

図 版 98　短頸壺（第270～272図１～14）

図 版 99　短頸壺蓋（第273図１～15）

図 版100　広口壺（第274図１～４）／鉢形土器・長頸壺・土師坏等（第275図１～５）

図 版101　横瓶（第275図６）／丸底壺（第276図７）／焼台１～52（第277～278図）／ヘラ記号接写（第249図４）

図 版102　ヘラ記号接写（第249図８・９・11・89）／坏蓋内面回転ナデ痕／坏蓋内面横ナデ痕／坏身底部全面回転ヘラ削り／坏身底部周縁部回転ヘラ削り

図 版103　坏身底部手持ヘラ削り痕／坏身底部ぬぐい痕／丸底壺底部叩き目／谷地部包含層出土古銭／３号炭窯出土遺物／製鉄址出土須恵器坏／製鉄址出土粘土玉／柴の刻印（第214図45）／柴の刻印（第213図44）

Ⅰ　発掘調査に至る経過と調査の経過

群馬県勢多郡大胡町は県都前橋市の東方に接し、中世に赤城南麓の雄として名を馳せた大胡氏が居住する大胡城を中心として栄えた城下町である。城下町の佇みは江戸時代初期に徳川幕府譜代の大名として大胡に赴任した牧野氏によって最終的な形成がなされ、現在も著しい変化が無くその町割を良く留めている。また日光裏街道の宿場町として地方農産物の集散地としても栄えた町である。

こうした城下町や宿場町として発達した町並に残る曲折した中央街路は、朝夕のラッシュ時には道路は車両輻輳した長い列をなす混雑ぶりとなり、いつ不測の事態が発生しないとも限らない状態となっている。

町内を通ずるこの主要地方道前橋、大間々桐生線の交通渋滞を緩和する為にも町の南部へ新路線を建設したいとの問題が昭和45年に起こり、翌年路線が決定され、50年には県教育委員会文化財保護課により、天神風呂、八ヶ峰地区の埋蔵文化財予備調査が行われる。そして虚々実々の年月を経て、55年茂木天神風呂地区の埋蔵文化財発掘調査を大胡町教育委員会が行い、翌年この工区が開通した。

58年10月には残る上大屋、樋越地区内の埋蔵文化財調査実施の覚書を県知事と大胡町教育長の間で交し、実施することになった。

なお、発掘調査の計画、概要は次のとおりである。

1.	発掘調査予定地の所在	勢多郡大胡町上大屋字八ヶ峰、樋越字西久保、西前沖、東前沖、蚤替戸
2.	発掘調査予定地面積	28,200㎡
3.	発掘調査予定地の現状	桑畑、雑木林、田畑等
4.	発掘調査の目的	主要地方道、前橋、大間々桐生線（大胡線バイパス）建設工事に伴う事前埋蔵文化財発掘調査
5.	事業主体	群馬県道路建設課
6.	調査主体	大胡町教育委員会
7.	調査期間	昭和58年11月～昭和60年３月

調査区は、㈱、伊勢崎・大胡線の北～北東に広がる字八ヶ峰地区の台地の周縁部に沿い、生産址が検出された小谷地を挟んで字樋越境の地区を経て樋越字西久保の谷地を貫く。西久保の低地を経て字西前沖の南北に伸びる台地を横断し、低地に入り、字東前沖と続き、神沢川を挟んで字蚤替戸と続く。

八ヶ峰地区に於ては県教育委員会文化財保護課により予備調査が行われ、樋越境まで広範囲に遺跡の広がりを確認している。この地区はＥ区、Ｆ区の一部、Ｇ区が桑畑として土地利用がなされ、その他の地域は広葉樹が繁茂する雑木林と化し、一帯が開墾地と称される所であった。Ｅ区より㈱伊勢崎、大胡線間は上記した雑木林で、西方に向って急傾斜面である為、４本のトレンチを設定し、遺跡の存在を追求するが、やはり皆無の状態であった。Ｅ区に於ては路線掘削巾の北側より調査を開始し、４Ｔ付近でトレンチと同様の結果が生じるまで調査区を追求し、北東部も同様に雑木林を切り開き追求した。

Ｆ・Ｇ区に於ては、樋越境の境に通過する道路部まで間、小谷地東側傾斜の桑根の伐墾より開始するが、炭窯等の検出により谷地底に廃棄した残土、桑根を除去する結果となってしまった。この為、対岸の傾斜上面からＥ区に向け搬出路を設定し、東西の傾斜地、谷底部の調査を行う。

樋越境の台地は、路線がＧ区より南東方向気味にカーブし、住宅間を通過する為、町道を挟んでＨ区

より開始し、H区終了後、緩やかに東傾斜を呈するＩ区に移る。

西久保の低地より西前沖の調査区は町道15号線より西方に進入し、台地上のＪ区より調査を開始し、終了後、一段低くテラス状を呈する微高地の調査に入る。この微高地は篠竹がうっそうと繁茂している為、重機により伐開してローム台地端まで調査を広げる。台地東側は土抜き等によって、台地縁辺を方形状にえぐっている為、調査区を除外し、前面の田甫にトレンチを設けて遺跡の存在を追求する。このトレンチによりローム地に掘り込みが確認された為、15号線を挟んでローム地端までＬ区の調査区を広げる。

西前沖より東前沖は平坦面が神沢川まで広がり、田畑、菜園等に土地利用がなされている。Ｌ区での調査でローム地端以東は砂層、じゃり層が堆積する為、神沢川右岸よりトレンチを調査区北側に設定し、一部表土下面を調査する。

神沢川左辺の蚤替戸地区には二本のトレンチを設定するが遺跡の存在は確認されなかった。

58年11月１日	長期に亘る調査に安全を祈願して関係者一同による地鎮祭を行う。
11月～59年２月	トレンチ１～４、Ｃ～Ｅ区の包含層、SD１～３、SHI、地割れ等の調査。
59年７月～９月	H・Ｉ区の調査、SH８。SD28～SD51。SE－１等
59年９月～11月	Ｊ・K区の調査、SH９～SH13、SD51～SD59等
59年11月～60年３月	L・MNO 区等の調査。江戸後期の屋敷跡、井戸、堀跡等。

以上の様に１年５ヶ月の歳月を費し、縄文時代前期の住居址12軒、土坑58ヶ所、奈良時代～平安時代の生産址７ヶ所、住居址１軒、土坑１ヶ所、断層、江戸時代後期等の井戸址15本、溝、堀状遺構を検出した。

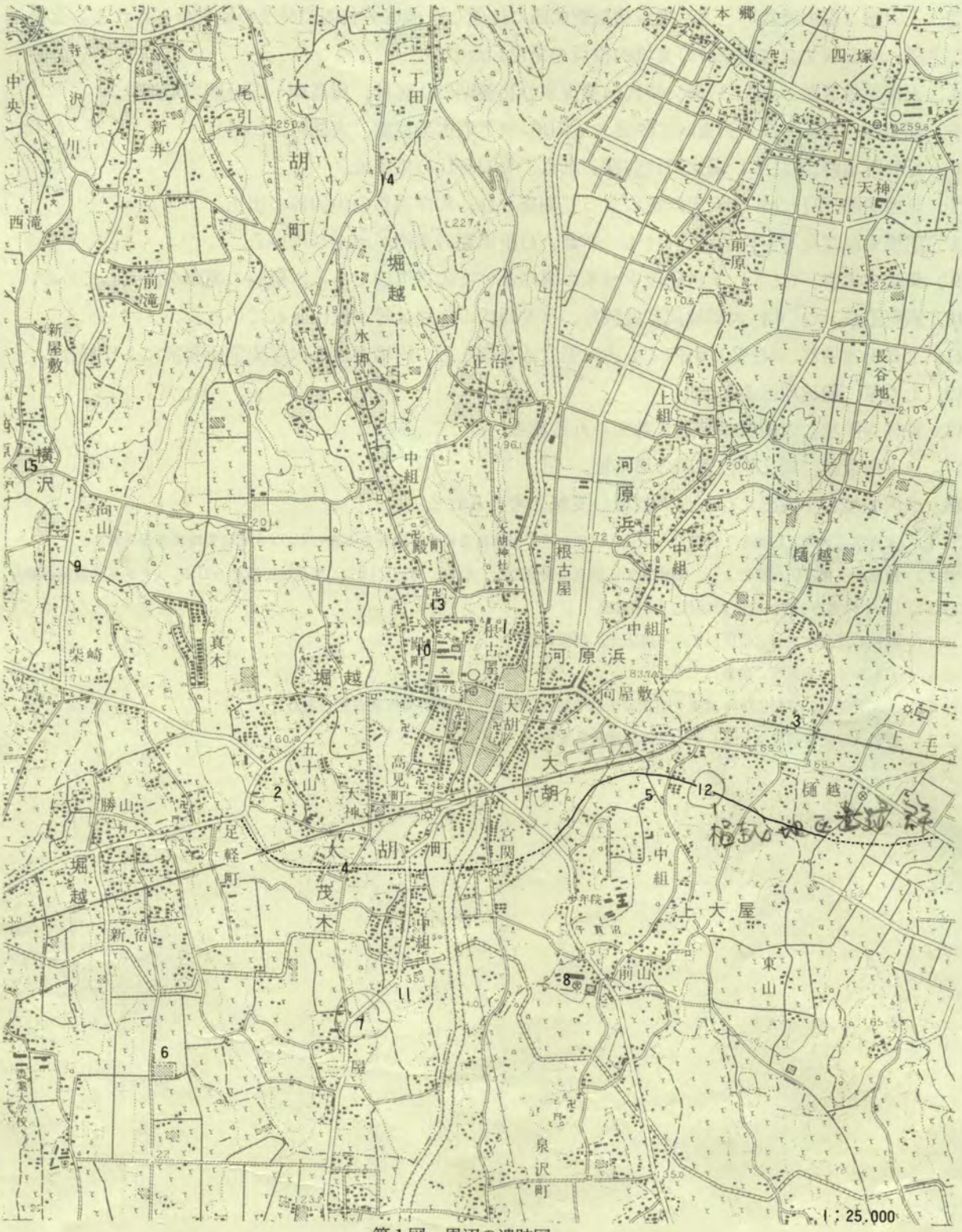
II　遺跡の位置と環境

1. 遺 跡 の 位 置

上大屋、樋越地区遺跡群は、第４紀火山の赤城山南麓に広がる雄大な裾野上に立地する勢多郡大胡町地内に所在する。㈜、前橋・大間々・桐生線と㈜、伊勢崎・大胡線に挟まれ、荒砥川の左岸、私電上毛電鉄大胡～樋越駅間の南窓に広がる台地上に位置する。カルデラ型火山赤城の裾野は、火砕流堆積物と、火山泥流状堆積物で構成され、荒山の東側の谷に源を発し、伊勢崎市内で広瀬川と合流する荒砥川等によって侵食され、高い崖をもつ台地地形となり、その上にローム層が厚くおおって堆積している。

「山の上碑」に表記される「大児臣」の居住地と考えられる大胡町は、近世前橋城のできるまでは、赤城南麓の中心地として栄えた地であり、荒砥川によって侵食された断崖上の台地を利して築城された大胡城が、現在の街を形成している。こうした台地上には、数多くの遺跡が分布している。

2. 周 辺 の 遺 跡（第1図）



第1図　周辺の遺跡図

1．大胡城跡、荒砥川右岸の断崖に築かれた平山城で、戦国期特有の根古屋式山城の形態をとる。城跡の本丸、二ノ丸は県指定史跡で、桝形門、空堀り、土塁等が残る。

2．堀越古墳、（上毛古墳綜覧、大胡町第15号）、山寄せの円墳で、墳丘径25mを測る、截石切組積の石室と台形状をした前庭部が残る。７世紀末ないし８世紀初頭の構築と考えられている。

3．丁田城（稲垣屋敷）　上毛電鉄樋越駅北西に位置し、稲垣平右衛門長茂の屋敷址とされる。土橋、土塁、濠を残す。大胡城跡の支城的役目を果たしたのか？

4．天神風呂遺跡、（注１）縄文時代前期後半の諸磯期の住居址、鬼高期～国分期の集落址。

5．稲荷塚古墳、今回の調査区に隣接する円墳。（上毛古墳綜覧、大胡町第25号）

6．足軽町遺跡、（注２）縄文時代前期、奈良、平安時代の集落址。

7．三屋遺跡、（注３）相沢忠洋氏によって調査され、片面調整の尖頭器が出土。

8．前橋東商業高等学校遺跡、（注４）所謂、石田川期の遺物が出土している。

9．柴崎古墳群、（注５）７世紀後半～末の頃にかけての古墳群である。獅嚙の環頭が出土している。

10．殿町遺跡、（注６）大胡城武家屋敷址。平安時代の住居址等が検出されている。

11．上の山古墳群、（注７）町内でも古い竪穴式石槨をもつ円墳が群馬大学史学研究室により調査。

12．上大屋、樋越地区遺跡群。

13．養林寺館址、大胡城の前進と考えられる館址。

14．一丁田遺跡、縄文時代中期の集落址。

15．横沢城址、字内出に存し、大胡城の支城と考えられる。

（注１）　天神風呂遺跡は1980年１月16日～12月10日にかけて当教育委員会が調査を実施した。（大胡町発堀調査報告書Ｉ）

（注２）　群馬大学史学研究室により、昭和30年に調査を実施した。なお、周辺には広く集落址が認められる。（すざく会誌第四輯）

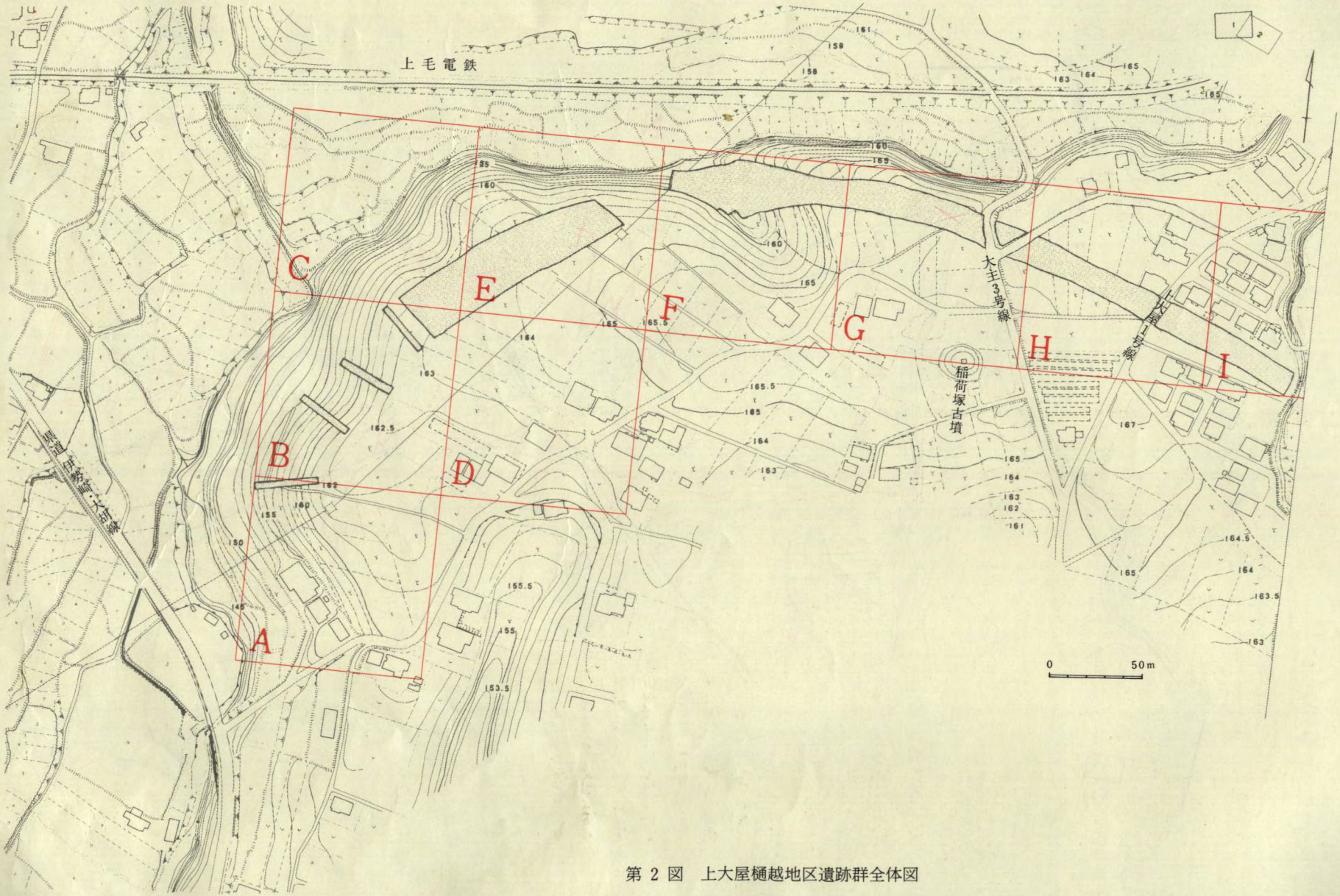
（注３）「日本の考古学Ｉ、先土器時代」河出書房

（注４）　同校の校庭にゴミ穴を掘っている際出土。同校保管

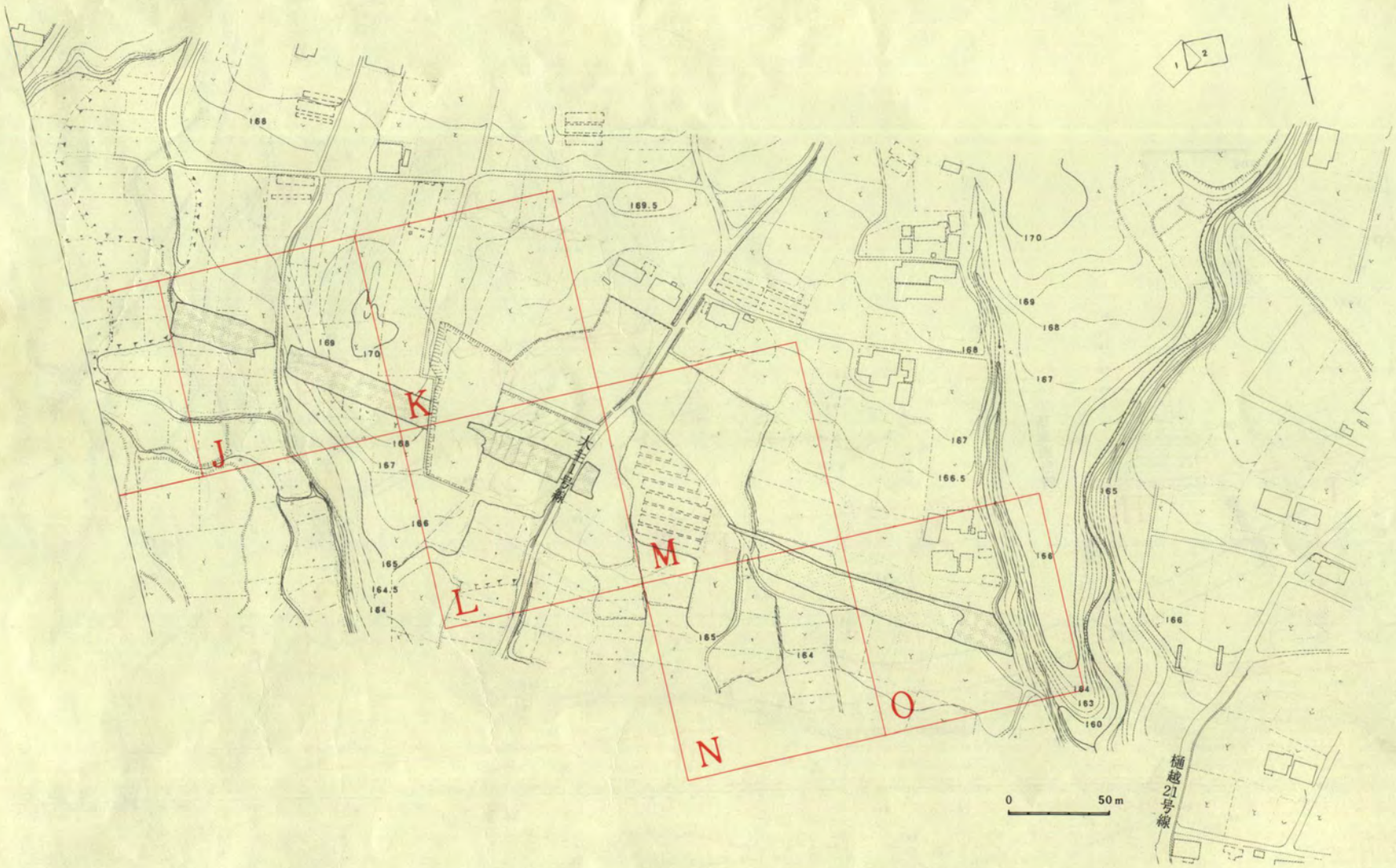
（注５）　昭和58年上毛新聞に掲載

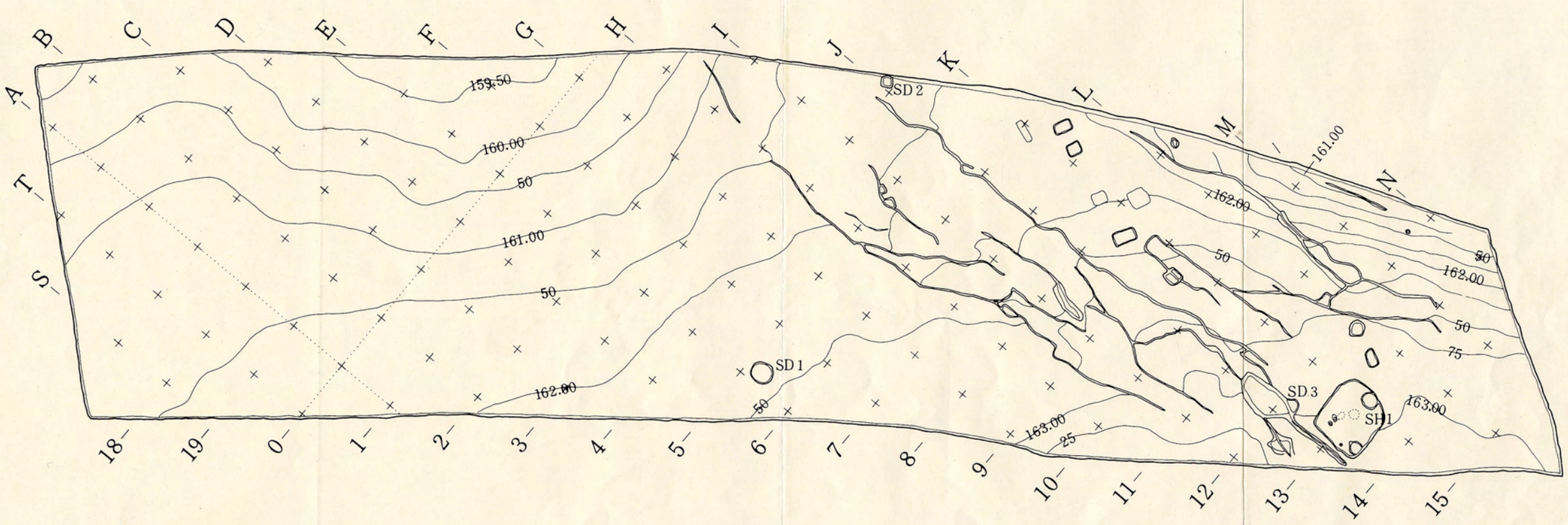
（注６）　大胡郵便局の移転に伴う調査を昭和57年11～12月に実施。（大胡町発掘調査報告書II）

（注７）　群馬大学史学研究室により昭和32年に調査を実施。



第 2 図　上大屋樋越地区遺跡群全体図


J
K
L
M
N
O
1
2
0
50 m
樋越21号線
169.5
170
169
168
167
166.5
166
165
164.5
164
163
160


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
T
S
18
19
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
SD 1
SD 2
SD 3
SH 1
159.50
160.00
50
161.00
50
162.00
50
161.00
162.00
50
50
75
162.00
163.00
163.00
25

第3図　E区全体図

III　検出した遺構と遺物

1　E区（B・C・Dの一部を含む）

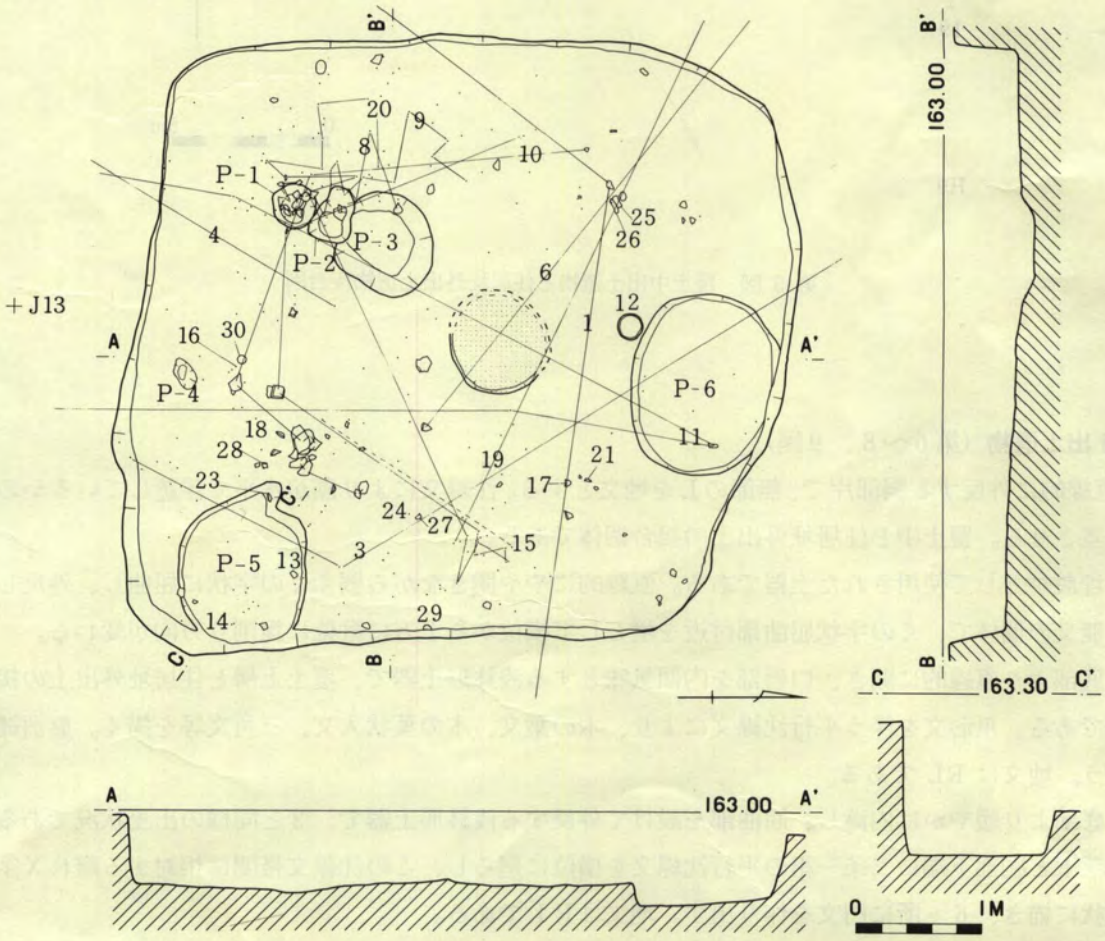
(1) 検出した遺構と遺物（第3～52図）

E区で検出された遺構は、竪穴住居址（SH1）が1軒、土坑（SD1～3）が3基である。なお地震による地割れ、断層が検出されている。本区は北西方向に向って広がる緩慢な鞍部状の谷地を挟んで両側がやや上がる台地上斜面で、調査区での比高差は4m近くを測る。

SH1（第4図）

本住居址はE区一J13、14Gに跨がり検出された。丁度、南東に位置する住宅地より廃水パイプが上面を通過する位置にあった。本区の調査地内の最高部付近で、比較的平坦な面に位置する。確認面は軟質ローム層である。

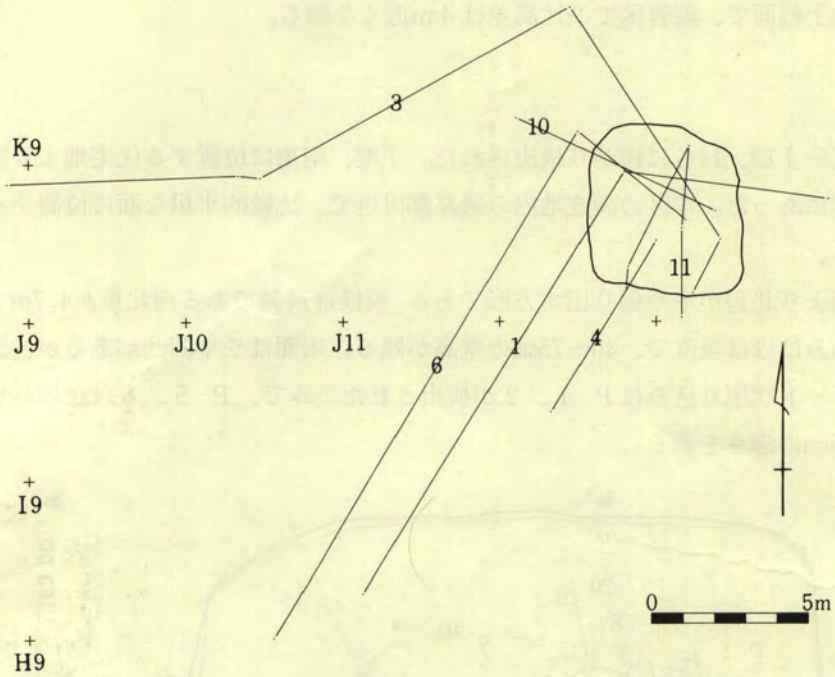
平面形は北西隅より北辺がやや張り出す方形である。規模は長軸である南北長が4.7mで長軸がほぼ北を呈する。掘り込みはほぼ垂直で、40～75cmの壁高が残る。床面はやや凹凸があるが、比較的安定したレベルを保つ。ピット状掘り込みはP-1、2が検出されたのみで、P-5、6は土坑状掘り込みで楕円形を呈し、15～35cmの深さを測る。



第4図　SH1平面図

本住居址の炉址は中央部やや北寄りに検出され、炉址の50cmほど北寄り、P－6に接するかの様に埋甕炉が検出された。中央部の炉は床面を皿状に浅く掘り込んだもので、80cmほどの円形を測り、10cm前後の焼土が堆積する。埋甕炉は床面を20cmほどの深さに掘り込み、正位に埋設したもので、ローム粒を含む黄褐色土と焼土が堆積する。

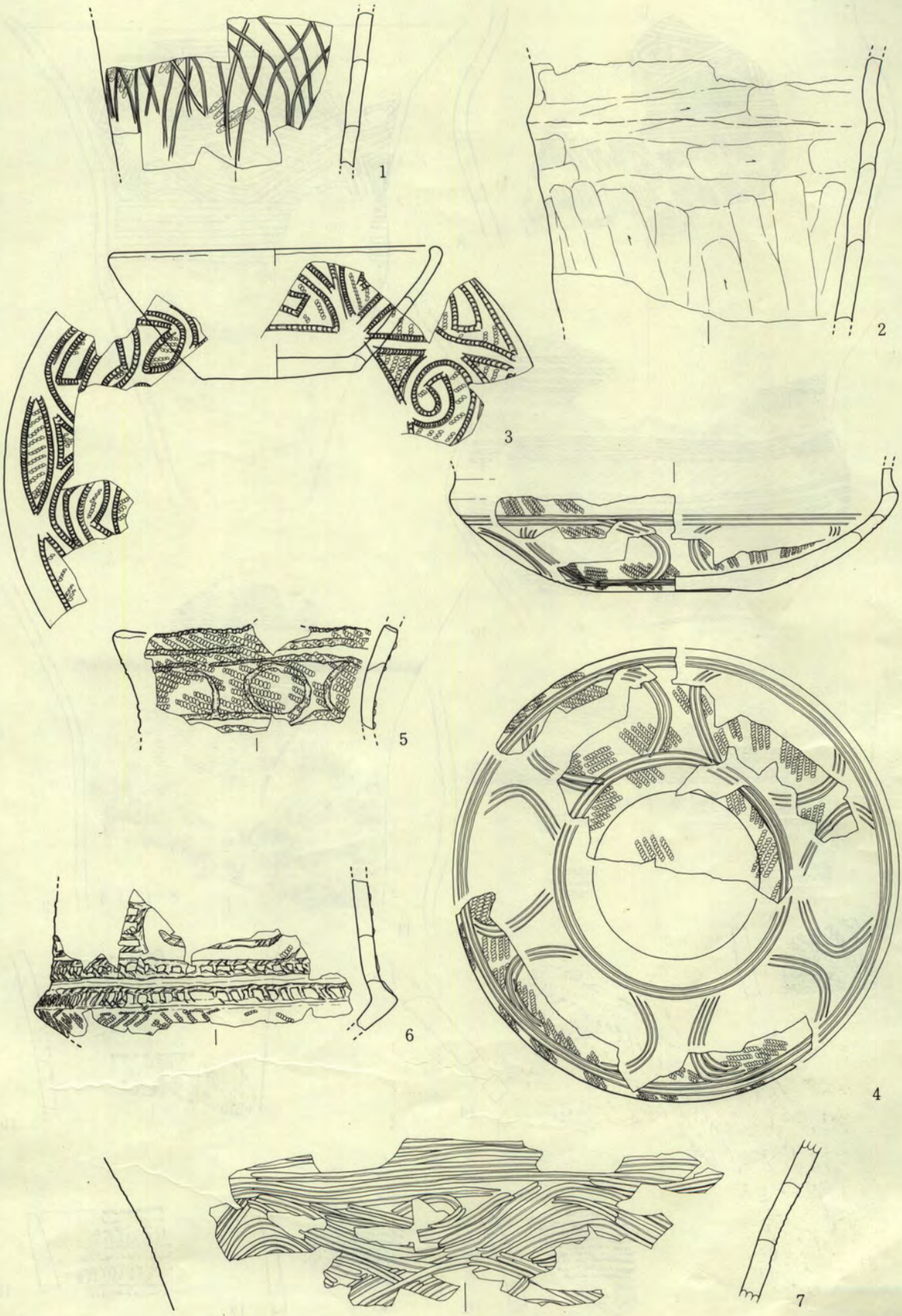
遺物出土状態はP－1、2上面とP－5西方の床面に集中して出土。覆土中出土遺物と住居址外出土の接合個体も多い。図示した遺物は土器が20点、石器が10点である。



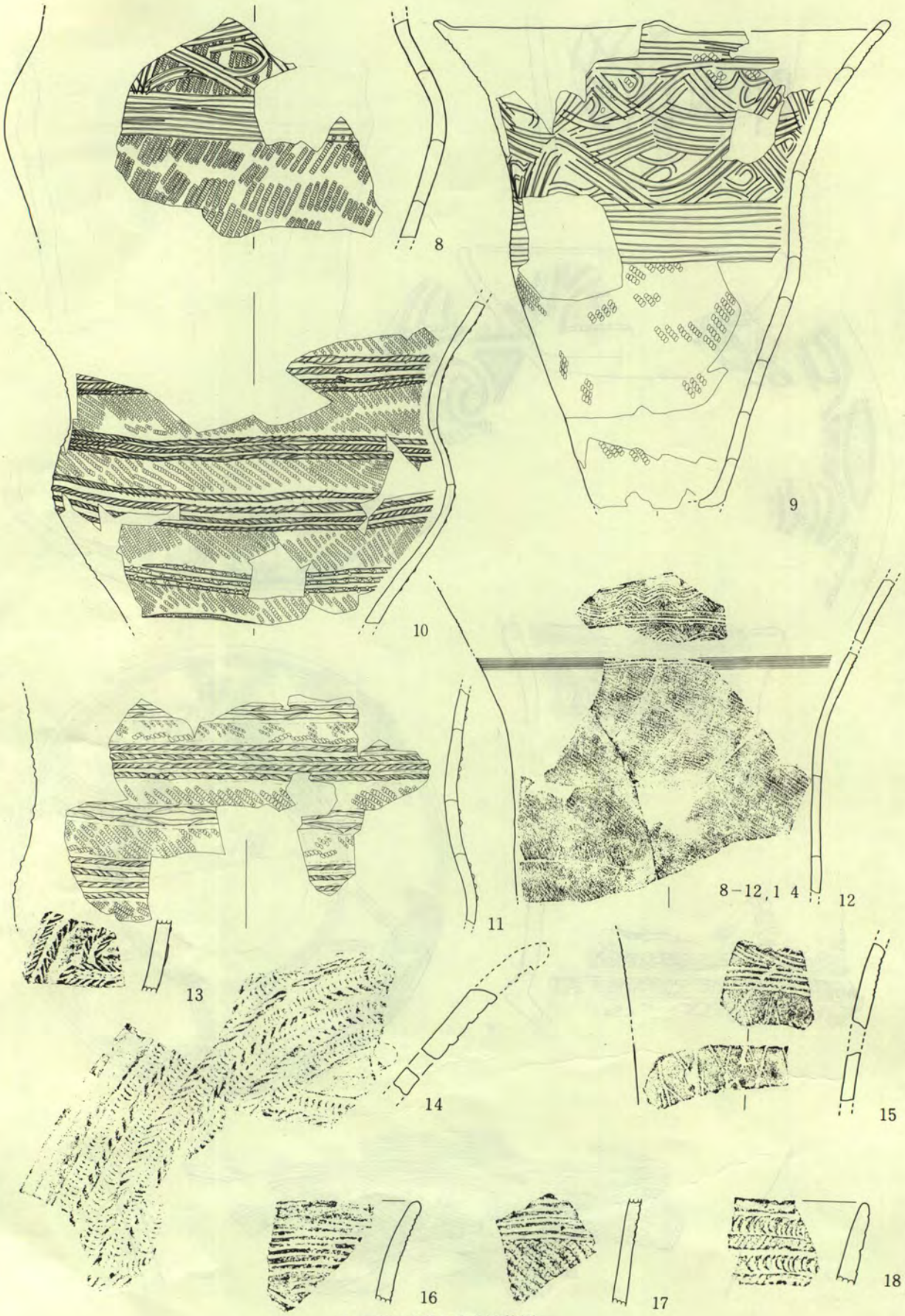
第5図　覆土中出土遺物と住居址外出土遺物接合図

SH1出土遺物（第6～8、9図）

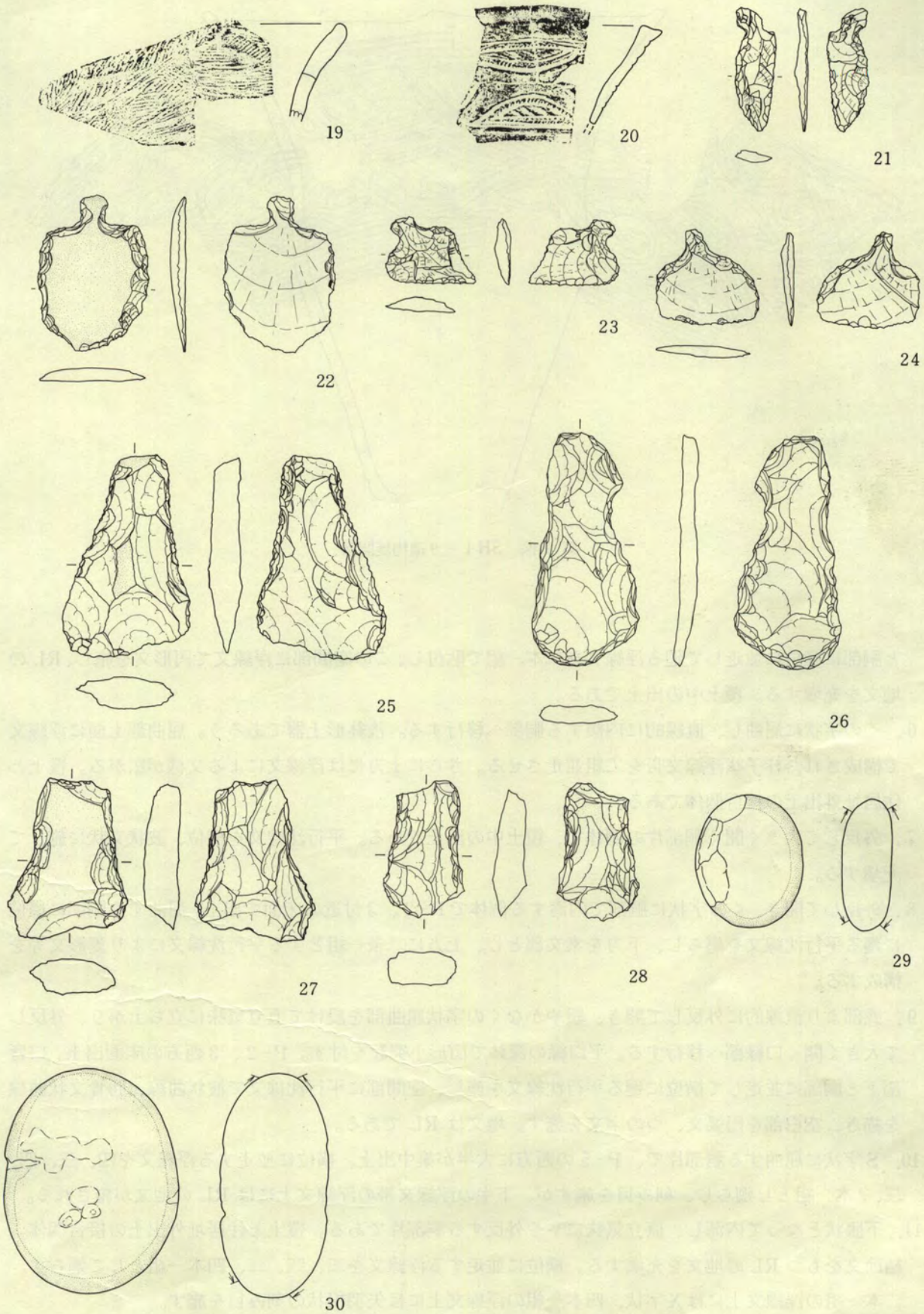
1. 直線的に外反する胴部片で、無節のLを地文とする。沈線文により藻が水平で浮遊しているかの様に交差させる。覆土中と住居址外出土の接合個体である。
2. 埋設炉として使用された土器である。直線的にやや開きながら弱くくの字状に屈曲し、外反して開く無文の個体で、くの字状屈曲部付近を境として横位から下方に縦位に箆削り方向が変わる。
3. 底部より直線的に開き、口唇部を内傾気味とする浅鉢形土器で、覆土上層と住居址外出土の接合個体である。爪形文を伴う平行沈線文により、木の葉文、木の葉状入文、三角文等を描く。磨消縄文を伴う。地文はRLである。
4. 底部より緩やかに内湾し、屈曲部を設けて外反する浅鉢形土器で、3と同様の出土状況である。屈曲部下と胴部下端に二条一組の平行沈線文を横位に廻らし、この沈線文帯間に相対する離れX字文を弧状に描き、6ヶ所に円文を作り出す。地文はRLである。
5. 外反して開く口縁部片で小突起を付していたであろう。口唇部には縦位の刻み目を施す。口唇部下



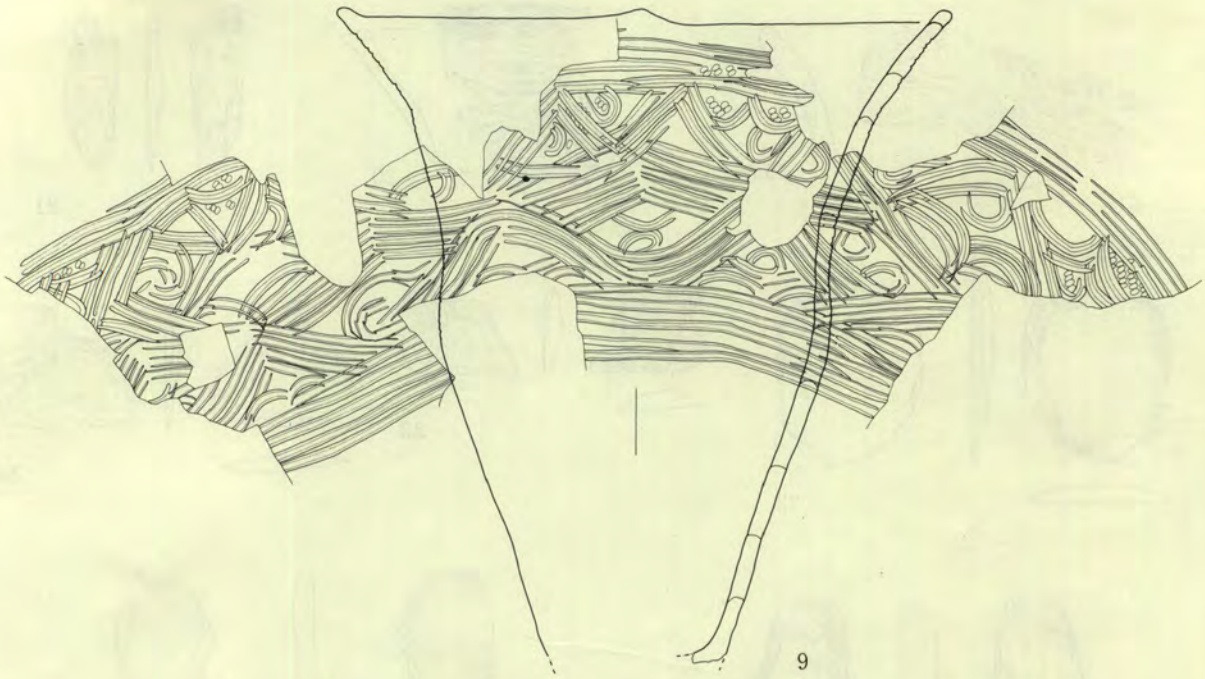
第 6 図　SH 1 出土遺物(1)



第 7 図　SH 1 出土遺物(2)



第 8 図　SH 1 出土遺物(3)



第 9 図　SH 1 − 9 遺物展開図

と胴部に横位に並走して廻る浮線文を二本一組で貼付し、この空間部に浮線文で円形文を施し、RL の地文を充塡する。覆土中の出土である。

6．くの字状に屈曲し、直線的に内傾する胴部へ移行する。浅鉢形土器であろう。屈曲部上面に浮線文で構成された梯子状浮線文帯を二組並走させる。さらに上方には浮線文による文様が広がる。覆土と住居址外出土の接合個体である。

7．外反して大きく開く胴部片の個体で、覆土中の出土である。平行沈線文を横位、波状文状に施して充塡する。

8．外反して開き、くの字状に胴部で内湾する個体でP-2、3付近の床面で出土。屈曲する胴部に横位に廻る平行沈線文を廻らし、下方を素文部とし、上方に二条一組とする平行沈線文により菱形文等を構成する。

9．底部より直線的に外反して開き、緩やかなくの字状屈曲部を設けて直立気味に立ち上がり、外反して大きく開く口縁部へ移行する。平口縁の深鉢で山形小突起を付す。P-2、3西方の床面出土。口唇部下と胴部に並走して横位に廻る平行沈線文を施し、空間部に平行沈線文で波状曲線、肋骨文状曲線を描き、空白部を円弧文、つの字文を施す。地文は RL である。

10．S字状に屈曲する胴部片で、P-5の西方に大半が集中出土。横位に並走する浮線文を四、三、四、三、?本一組とし廻らし、刻み目を施すが、下半の浮線文帯の浮線文上には RL の地文が施される。

11．下脹状となって内湾し、直立気味にやや外反する胴部片である。覆土と住居址外出土の接合個体。結節文をもつ RL の地文を充塡する。横位に並走する浮線文を二、四、二、四本一組として廻らす。二本一組の浮線文上にはX字状、四本一組の浮線文上には矢羽根状の刻み目を施す。

12．直立気味に伸びる胴部より大きく外反して開く個体で、覆土中の出土である。素文部と文様部を横

位に並走する平行線文で区画し、文様帯は平行沈線文と波状文を交互に操り返す。地文はRLである。

13. 浮線文土器の胴部片。

14. 大きな丸味を呈する波状口縁部片で、波状に沿い斜位の刻み目を挟んで爪形文帯を廻らす。下方にレンズ文が区画され、空白部に貫通孔を設ける。

15. 直立気味に外反する胴部片で、横位に並走して廻る平行沈線文により、下方に斜格子状の文様と、上方に曲線文を施す。

16、17は平行沈線文を施す口縁部と胴部片で、胴部片の素文部はRLの地文を施す。

18. 口唇部下に並走する爪形文を伴う平行沈線文を施す口縁部片。

19. 外反して開く口縁部片で、山形小突起を付す。撚糸文を口唇部に斜位、体部外面に斜位、横位に充塡して施す。文様は小突起下に相対気味に沈線文を描く。

20. 浅鉢形土器の口縁部片で、爪形文を伴う平行沈線文で木の葉を描く。RLの地文で磨消縄文を施す。

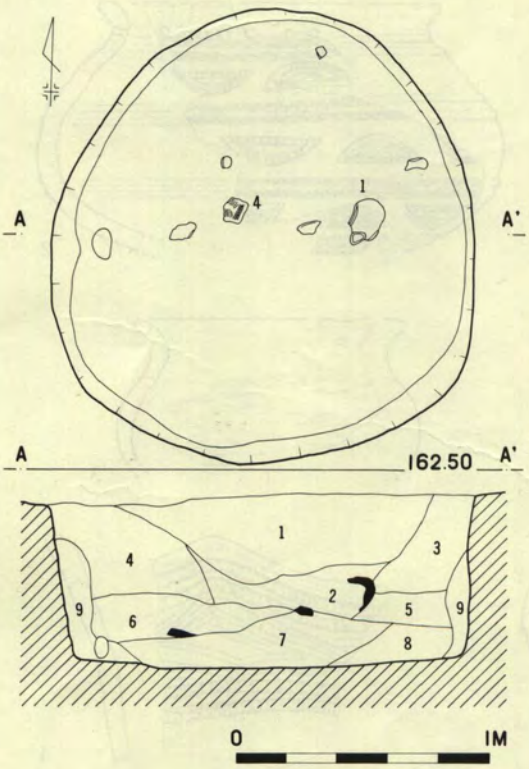
21～24は石匙である。21、22は縦型、23、24は横型で石質は頁岩である。

25～28は打製石斧で、25、27は撥形、26は分銅形を呈す。

29、30は磨石で、29は側面に敲打痕、30は表裏に凹孔を設ける。

SD 1（第10図）

E区E５Gの南西部に検出。ほぼ円形を呈し、1.6～1.78mの径を測る。掘り込みはほぼ垂直で、底面も安定して平坦である。覆土中より浅鉢形土器、浮島系土器片が出土。



第10図　SD 1 平面図

SD 1　土層説明

1	暗褐色土	班点状にカーボン粒子を含む
2	暗褐色土	1層よりも明るい
3	褐色土	ローム粒を含む
4	にぶい黄褐色土	カーボン粒子、白色粒子を含む
5	にぶい黄褐色土	4層に似る
6	暗褐色土	2層より暗い
7	黒褐色土	カーボン粒子を含み粘質である
8	にぶい黄褐色土	やや粘質を帯びる
9	黄褐色土	少量のカーボン粒子を含む

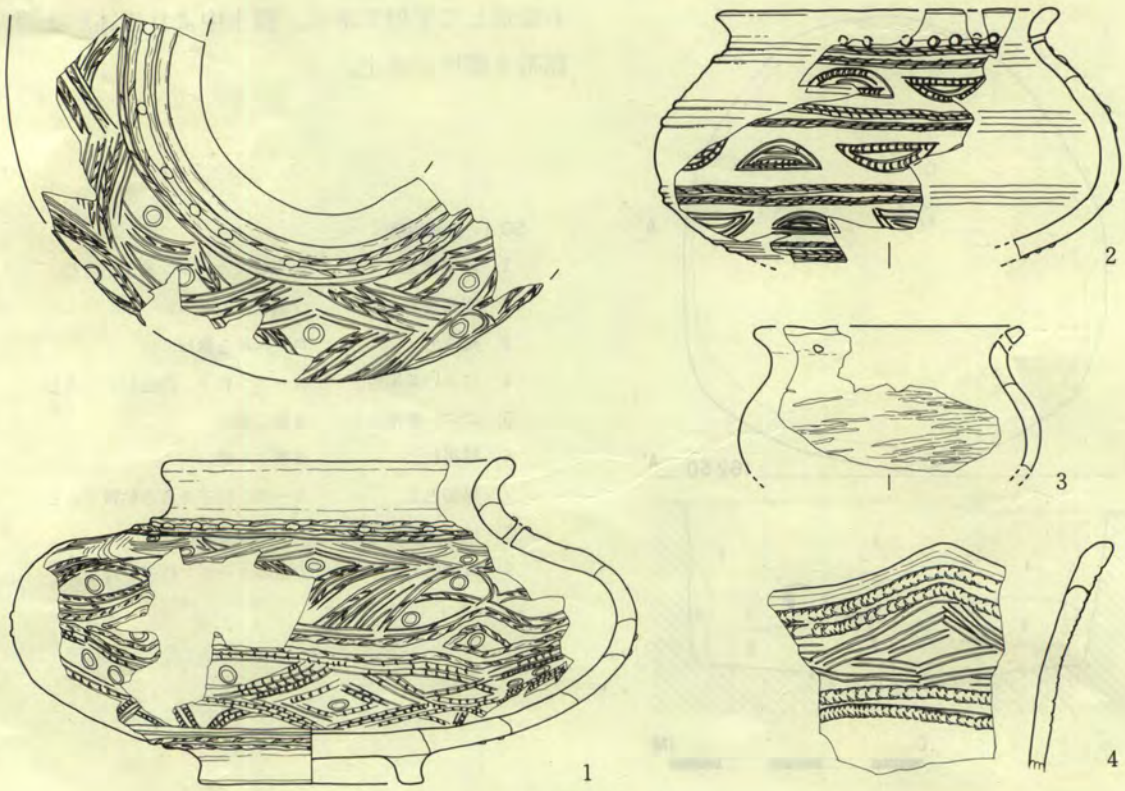
SD１出土遺物（第11図）

1．口径に比べて小さめの高台より緩やかに内湾し、つの字状に屈曲する扁平な胴部に移行する。浅鉢形土器である。水平気味となる肩部より口縁部は短かく強く外反する。肩部より口縁部へ移る立ち上がり部、胴部最大径部、高台脇に浮線文を配し、肩部上面の浮線文間には１～2.5cm間隔で貫通孔を廻らし、浮線文上に二本一組で矢羽根状となる刻み目を施す。高台脇も同様に矢羽根状となる刻み目を施す。胴部最大径部に貼付された浮線文は、空白部に円形刺突文を施すレンズ状文を挟んで横位に並走する。上部の空間には矢羽根状の刻み目を伴う平行沈線文によって菱形文、木の葉文を作り出し、空白部に円形刺突文を施す。下部の空間部は爪形文を伴う平行沈線文によって上部と同じ文様を作り出している。

2．やや肥大した算盤玉状の胴部よりくの字状に短かく外反する口縁部へ移行する浅鉢形土器である。浮線文は二～三本一組で２～2.5cm間隔で頸部より胴部下半に貼付する。浮線文上には矢羽根状となる刻み目を施す。頸部浮線文帯の上面には５㎜～１cm強の間隔で貫通孔を穿つ。浮線文帯間には半月状の木の葉文を上下させながら交互に平行沈線文で描き、一部を除いて沈線文内を爪形文で充填する。

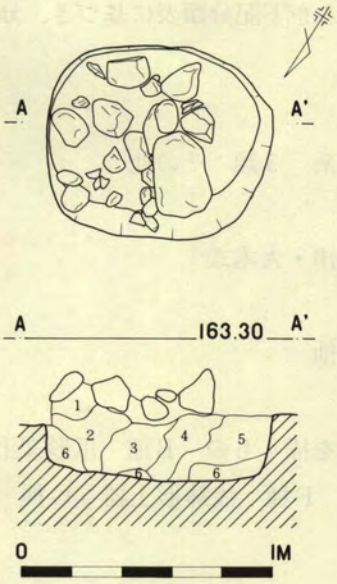
3．やや扁平気味な内湾する胴部よりくの字状に外反する口縁部へ移行する無文の浅鉢形土器である。口唇部下に貫通孔を穿つ。

4．直線的に外反する胴部より僅かに屈曲して外反する口縁部へ移行する波状口縁の深鉢である。胴部と波形に沿い口唇部下に並走する平行沈線文を二条廻らし、沈線文内に爪形文を充填する。爪形文帯間の空間部は平行線文によって菱形文形を作り出す。浮島IIに比定されよう。



第11図　SD１出土遺物

SD 2（第12図）



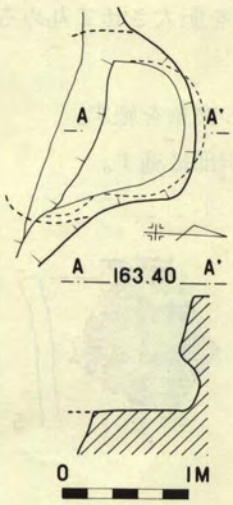
第 12 図　SD 2 平面図

E区J４Gの南東部に検出。集石を伴いやや楕円形気味を呈する。長軸はN－58°－Eで長軸長0.9×短軸長0.75mを測る。5 cm前後～35cmほどの礫を覆土上層部に集石する。出土遺物は皆無である。

SD 2　土層説明

1	褐色土	焼土粒、カーボン粒子を含む
2	暗褐色土	少量の褐色土粒子を含む
3	黒褐色土	少量のカーボン粒子を含む
4	暗褐色土	全体にソフト
5	褐色土	1層より明るい
6	暗褐色土	ロームブロックを含む

SD 3（第13図）



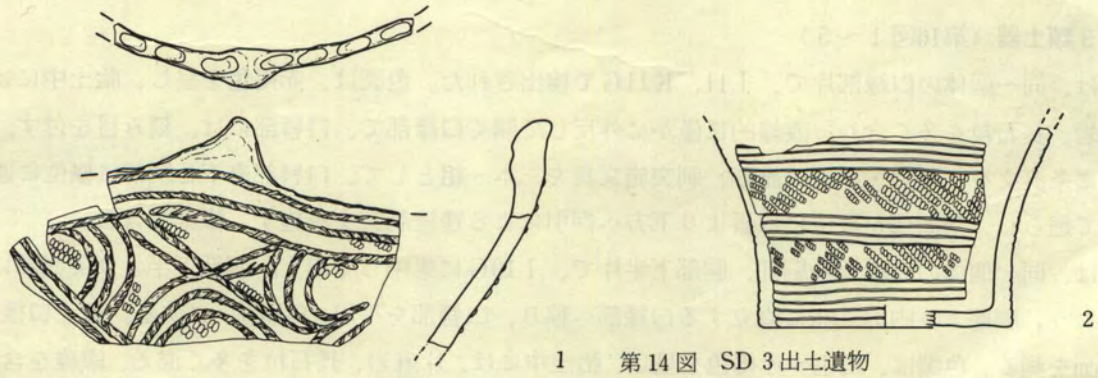
第 13 図　SD 3 平面図

E区J12Gの南西部、地割れの追求時に検出。不注意にも地割れの追求時に半分ほどの掘り込みを確認できなかった。残存部は約半分と考えられる。方形気味の円形プランを呈していたのであろうか。袋状の掘り込みを呈する。覆土中より土器片が二点出土する。

SD 3 出土遺物（第14図）

1．直線的に開き、突起部を直立気味に内湾させる口縁部片である。突起は三角形を呈する山形で、口唇部には指頭による圧痕を連続させる。口唇部下に三本一組の浮線文を並走させ、下方に曲線文、斜位文を配す。地文はRL である。

2．底部より直立して立ち上がり、外反して大きく開く胴部へ移行する。横位に並走する平行沈線文を胴部下端より四、三、四条一組として廻らす。



第 14 図　SD 3 出土遺物

調査区包含層出土土器分類表

調査区包含層中より、早期より後期の縄文式土器が検出された。これらを下記分類表に基づき、分類する。

A群　早期に比定されるもの

1類　撚糸文系　2類　押形文系　3類　条痕文系　4類　沈線文系　5類　その他

B群　前期に比定されるもの

1類　花積下層式　2類　黒浜式　3類　諸磯式　4類　浮島・興津・大木式

C群　中期に比定されるもの

1類　五領ヶ台式　2類　勝坂式系　3類　阿玉台式　4類　その他

D群　後期に比定されるもの

以上の大別をし、主体となる諸磯式は、A種、木の葉文・肋骨文等を描くもの　B種　爪形文土器　C種　沈線文土器　D種　浮線文土器　E種　獣面把手を付すもの　F種　浅鉢形土器　G種　所謂、C式に比定されるもの　H種　縄文を施すものに細分した。

(2)　包含層出土遺物分類と出土状況（第15～52図）

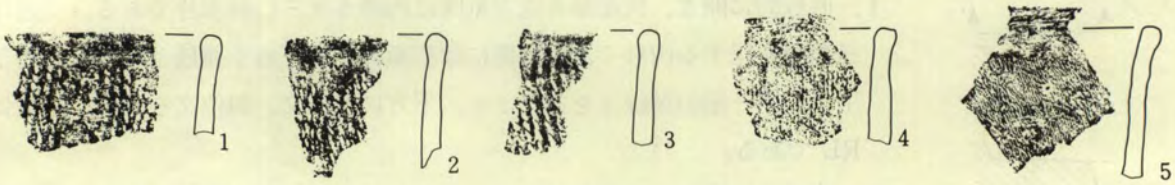
A群に比定される破片は、1類、3、4類が出土した。

A群1類土器（第15図、1～5）

1～3は、同一個体と考えられる口縁部片で、胎土中に金雲母、緑泥片岩等の片麻岩粒を含む。焼成は堅く焼き上がり、赤褐色～黄褐色の色調を呈す。直立気味に立つ胴部より口唇部を肥大させて丸める。Rの撚糸を施す。

4．直立する胴部より口縁部が外反する。口唇部は横位、横位、胴部は縦位にRの撚糸を施す。

5．やや薄目の器肉を呈し、4よりも口唇部の外反が強い。Rの撚糸を口唇部と胴部に施す。



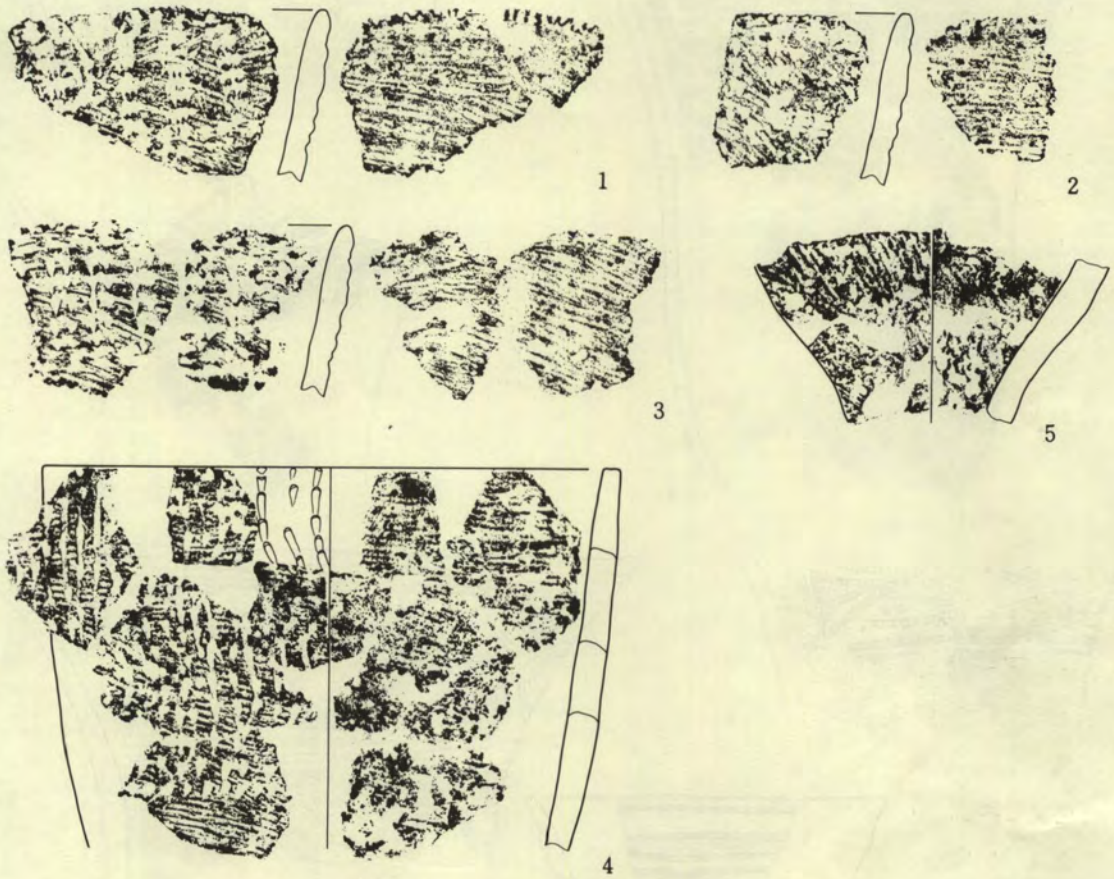
第15図　A群1類土器

A群3類土器（第16図1～5）

1～3は、同一個体の口縁部片で、J11、K11Gで検出された。色調は、赤褐色を呈し、胎土中には、片麻岩、長石粒を多く含む。直線的に僅かに外反して開く口縁部で、口唇部には、刻み目を付す。内外面に条痕文を、斜位・横位に施し、刺突施文具を三本一組として、口唇部直下と胴部に横位に連続させて廻らし、空間部を縦位に口唇より下方へ押引による連続刺突文を施す。繊維を含む。

4、5は、同一個体の口縁部～胴部、胴部下半片で、I10Gに集中して出土。胴部下半より尖底部に移行しよう。胴部より内湾気味に直立する口縁部へ移り、口唇部を平坦（角頭状）にする。復元口径は、22.8cmを測る。色調は、褐色～赤褐色を呈し、胎土中には、片麻岩、長石粒を多く混え、繊維を含む。

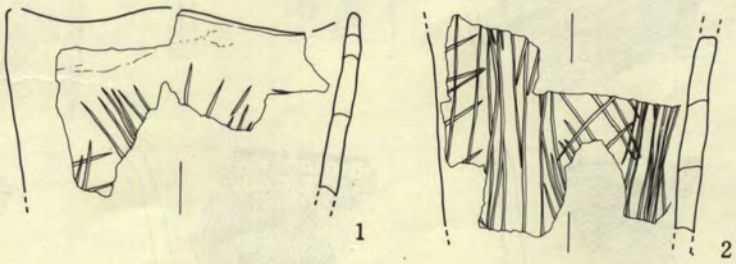
内外面を条痕文により、横位、斜位気味に施し、口唇部直下より胴部へ押引による連続刺突文を縦位に並走させる。



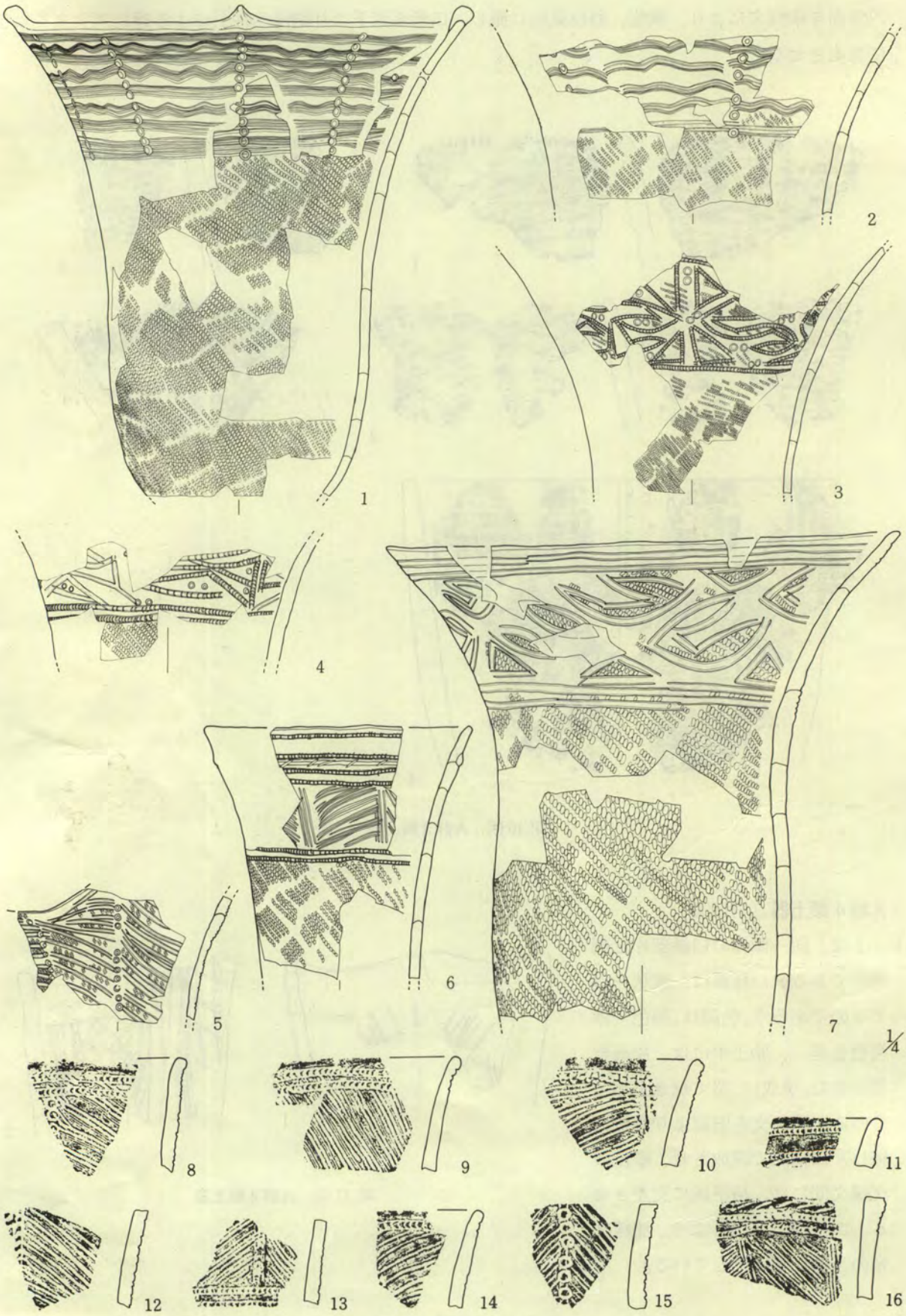
第16図　A群3類土器

A群4類土器（第17図）

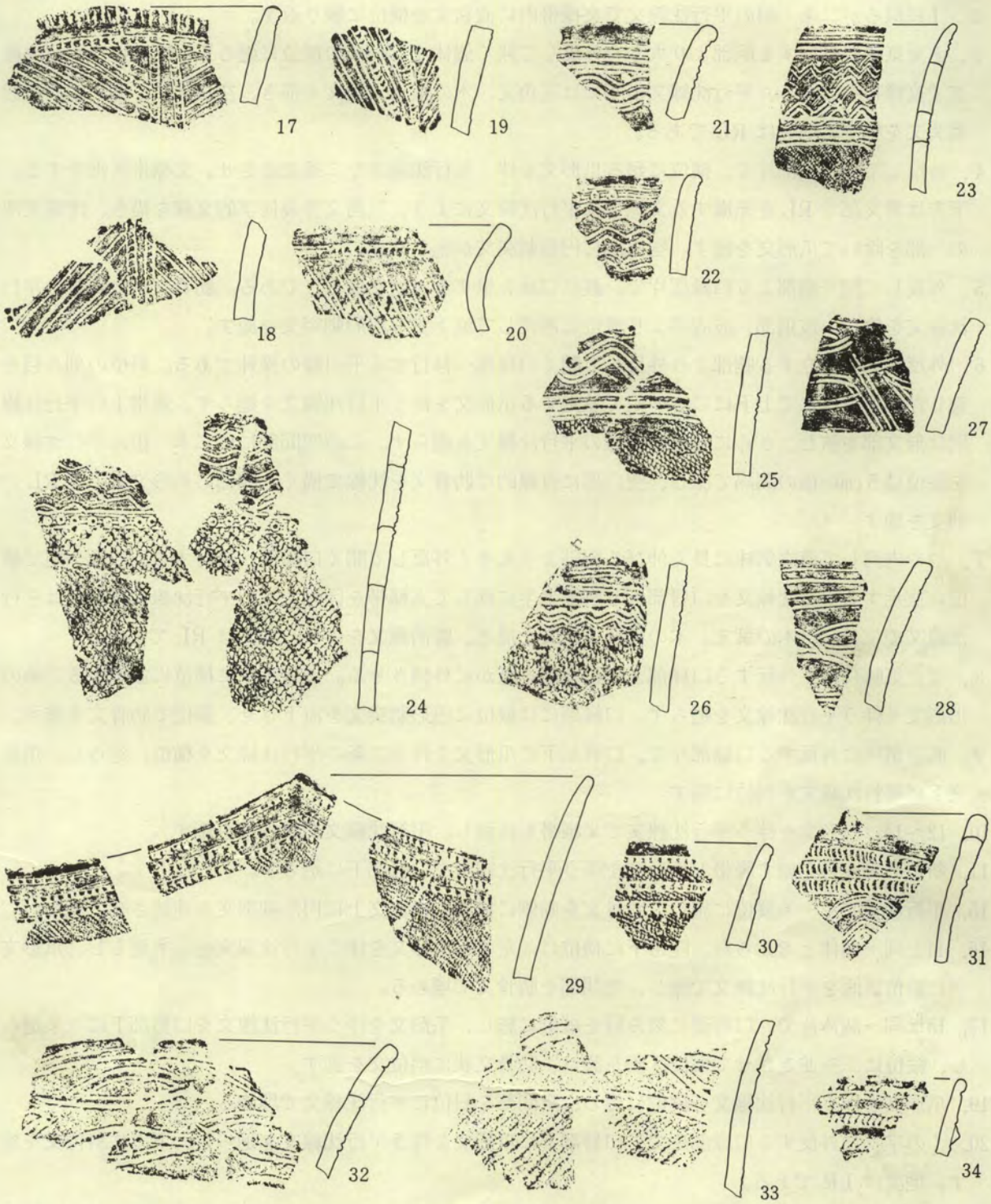
1、2は、同一個体の口縁部片と胴部片である。口縁部は、波状を呈するのであろう。色調は、褐色～赤褐色を呈し、胎土中には、片麻岩等を含む。焼成は、堅く焼き上がっている。沈線文を胴部より縦位に施し、口縁部で開放させ、縦位の沈線文間には、格子状に交差させる。この他に、SH1より、沈線文糸の土器片が出土している。



第17図　A群4類土器



第18図　B群3類A種(1)



第19図　B群3類A種(2)

B群3類A種（第18、19図1～34）

1．内湾する胴部下半より直立気味に長く立ち上がり外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢で、四ヶ所に山形の小突起を付す。全体の⅔以上が素文部で占め、RLの地文を施す。口唇部下と胴部上半に横位に四条一組の鋸歯状工具で文様帯を区画し、その間を同様の工具で波状文と平行沈線文を交互に繰り返し、縦位に円形突文を連続して流下する。

2．1に似るが二条一組の平行沈線文で文様帯内に波状文を横位に繰り返す。

3．直立気味に外反する胴部より大きく外反して開く個体で、一条の横位に廻る爪形文を伴う平行沈線文で文様帯を区画し、平行沈線文帯間には三角文、木の葉状入組文を描き、空白部に二個一組の円形刺突文を施す。地文は RL である。

4．外反して開く胴部片で、横位に廻る爪形文を伴う平行沈線文を二条並走させ、文様帯区画をする。下方は素文部で RL を充塡する文様帯は平行沈線文により、三角文等幾何学的文様を描き、沈線文内の一部を除いて爪形文を施す。空白部に円形刺突文が施される。

5．外反して開く胴部より口縁部片で、波状口縁を呈する。地文は RL である。肋骨文状に斜位の平行沈線文を施し、波頂部、波底部より縦位に連続して流下する円形刺突文を施す。

6．外反気味に直立する胴部より外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。斜位の刻み目を施した隆帯を挟んで上下に二本一組で並走する爪形文を伴う平行沈線文を廻らす。隆帯上の平行沈線間は無文部を挟む。さらに胴部に同様の平行沈線文を廻らす。この空間部には二本一組の平行沈線文を縦位に5cm前後の間隔で施し、空白部に直線的な肋骨文を沈線で描く。胴部の爪形文帯下は RL の地文を施す。

7．やや内湾して直立気味に長く伸びる胴部より大きく外反して開く口縁部へ移行する。二条一組で横位に並走する平行沈線文を口唇部下と胴部上半に施して文様帯を区画する。平行沈線文帯間には平行沈線文で三角文、木の葉文、木の葉状入組文を描き、磨消縄文を伴う。地文は RL である。

8．直立気味にやや外反する口縁部より口唇部を僅かに外傾させる。口唇部下に横位に並走する二条の爪形文を伴う平行沈線文を廻らす。口縁部には縦位に円形刺突文を流下させ、斜位で肋骨文を施す。

9．直立気味に外反する口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う二条の平行沈線文を横位に廻らし、爪形文下に平行沈線文を斜位に施す。

10．12～14は爪形文を伴う平行沈線文で文様帯を区画し、平行沈線文で肋骨文を施す。

11．斜位の刻み目を施す隆帯と爪形文を伴う平行沈線文を口唇部下に廻らす。

15．平行沈線文を一条縦位に施し、肋骨文を両側に描き、縦位文上に円形刺突文を連続させて施す。

16．11と同一個体と考えられ、隆帯下に横位に並走する爪形文を伴う平行沈線文を二条廻らし、爪形文下に縦位区画を平行沈線文で施し、空間部を肋骨文で埋める。

17．18は同一個体片で、口唇部に刻み目を縦位に施し、爪形文を伴う平行沈線文を口唇部下に一条廻らし、縦位に二条並走させて縦位区画を設け、肋骨文状に斜位文を施す。

19．爪形文を伴う平行沈線文を縦位に施し、空間部を斜位に平行沈線文で埋める。

20．くの字状に外反する口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う平行沈線文を廻らし、下方に斜位文を施す。地文は LR である。

21～26は波状文を伴う破片で、22、24は同一個体と考えられ、文様帯区画の横位に廻る沈線文上に円形刺突文を施す。

27．28は平行沈線文で木の葉文等描く。

29．外反して開く波状口縁の深鉢片で、波形に沿って爪形文を伴う平行沈線文を三条並走させる。素文部は細かい RL の地文である。

30．直線的に外反する口縁部片で、29と同様の爪形文帯を口唇部下に施す。

31．山形小突起を付す直立気味に外反する口縁部片で、口唇部下に爪形文帯を廻らし、下方に平行沈線

文で曲線文等を描く。

32. 33は同一個体片の口縁部と胴部片である。平行沈線文により木の葉文を描く。素文部はLRの地文を施す。

34. 斜位に刻み目を施す隆帯を設け、口唇直下と隆帯上方に爪形文を伴う平行沈線文を横位に並走させる。

B群3類B種（第20～25図1～119）

1. 波頂部が丸味を帯びる大型の波状口縁片で、波底より波頂部に移る位置に緩やかな突起を二ヶ所設け、突起間の口唇部直下に斜位の刻み目を施す。波状形に沿って並走する平行沈線文を廻らし、沈線文下と接して曲線文を施し、空白部を縦位に幅広爪形文を充塡する平行沈線文三条一組で施す。地文はRLである。

2. やや外反気味に直立して開く胴部より、外反して開く胴部上半へ移行する。文様帯は胴部上半に並走して横位に廻る二本の浮線文により二分され、上部には曲線文を配し、下部には並走して横位に廻る平行沈線文を四条施し、沈線文間に斜位の刻み目を施す。沈線文内には広幅爪形文を充塡する。地文はRLである。

3. 内湾する胴部下半より直立気味に立ち上がり、徐々に外反を強めて開く胴部上半へ移行する。文様帯は胴部に並走して横位に廻る。爪形文帯間の間に刻み目が施され、これを交互に施す区画によって二分され、上部は刻み目を挟んで並走する二条の爪形文帯で渦巻状曲線文等を施し、下部には一条の横位に廻る爪形文を伴う平行沈線文間を縦位に区画し、空白部は斜位で三角形区画を作り出し、三角形区画内に円形刺突文を施す。下方には素文部が続く。素文部はLRの地文を施す。胴部上半部に貫通孔を設けている。

4. 外反して開く胴部片で5は直立気味に立つ胴部片で、爪形文帯と爪形文帯間に刻み目を施す。両者とも地文はRLである。5は下方に縦位、斜位の爪形文帯が走る。

6. 内湾してくの字状屈曲部を呈する胴部より外反して開く口縁へ移行する山形突起を付す平口縁の深鉢である。刻み目を挟んで並走する爪形文帯を口唇部下と胴部屈曲部に施し、空間部に渦巻状曲線文等を配す。胴部屈曲部下は素文部となりRLの地文を施す。

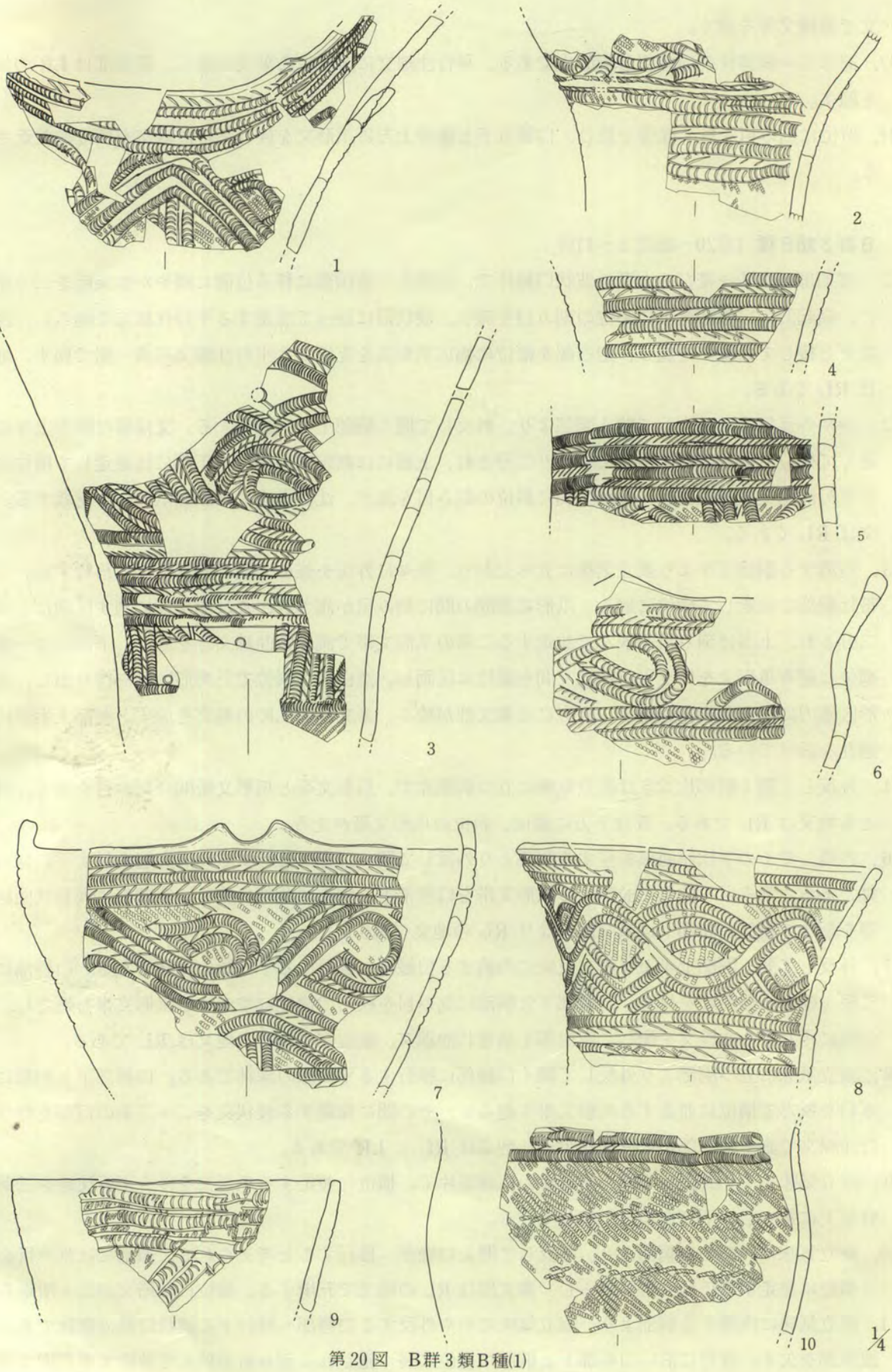
7. 外反して開く胴部上半より直立気味に内湾する口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。口唇部には二個一組の山形突起を付す。口唇部下と胴部に刻み目を挟んで横位に並走する爪形文帯を廻らし、その間に相対する曲線文を配し、空白部を渦巻状曲線文、縦位文で施す。地文はRLである。

8. 直立気味に立つ胴部より外反して開く口縁部に移行する平口縁の深鉢である。口唇部下と胴部に刻み目を挟んで横位に並走する爪形文帯を廻らし、その間に交差する波状文を二～三条の爪形を伴う平行沈線文で施す。一部が爪形文を欠く。地文はRLとLRである。

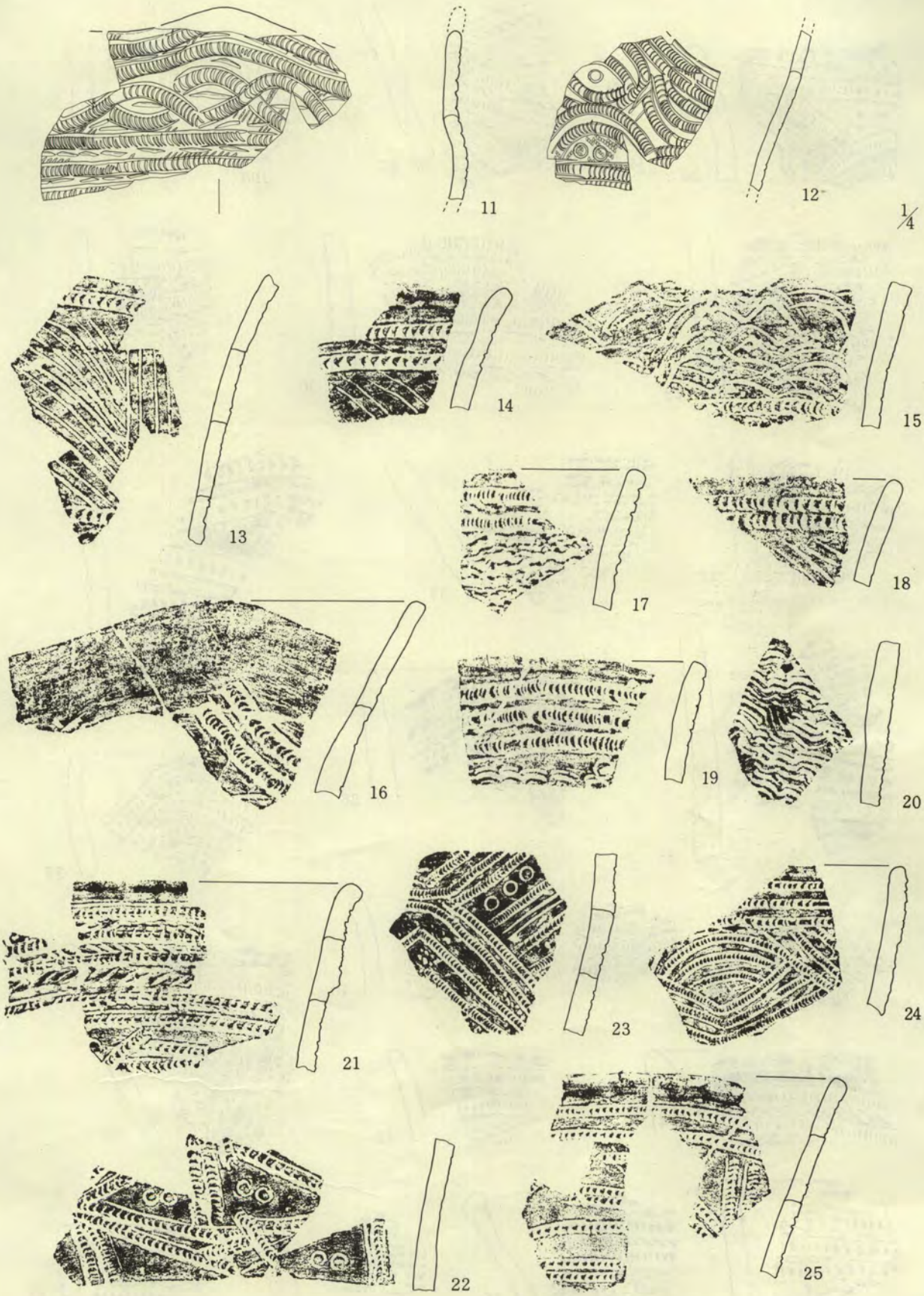
9. 直立気味にやや外反して開く平口縁の口縁部片で、横位に並走する爪形文を伴う平行沈線を三条口唇部下に廻らし、下方を斜位で施している。

10. 直立気味に内湾する胴部より、外反して開く口縁部へ移行すると考えられる。頸部には刻み目を伴う横位に並走する爪形文帯を廻らし、素文部はRLの地文で充塡する。横位に結節文が二ヶ所走る。

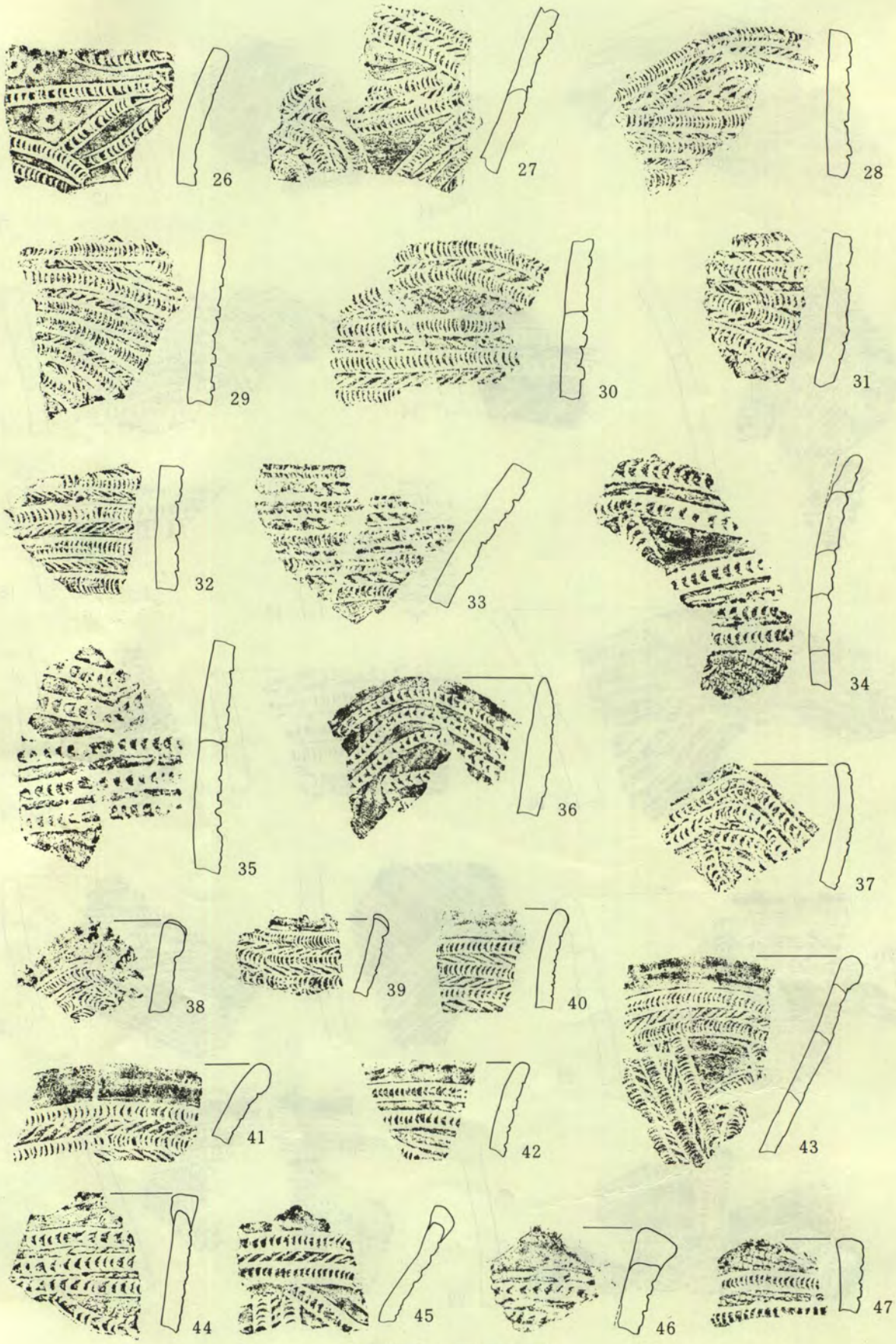
11. 直立気味に内湾する胴部より、直立気味にやや外反する口唇部へ移行する波状口縁の深鉢である。波頂部を欠く。波形に沿い口唇部下と胴部に横位に長く施される刻み目を挟んで並走する爪形文帯を



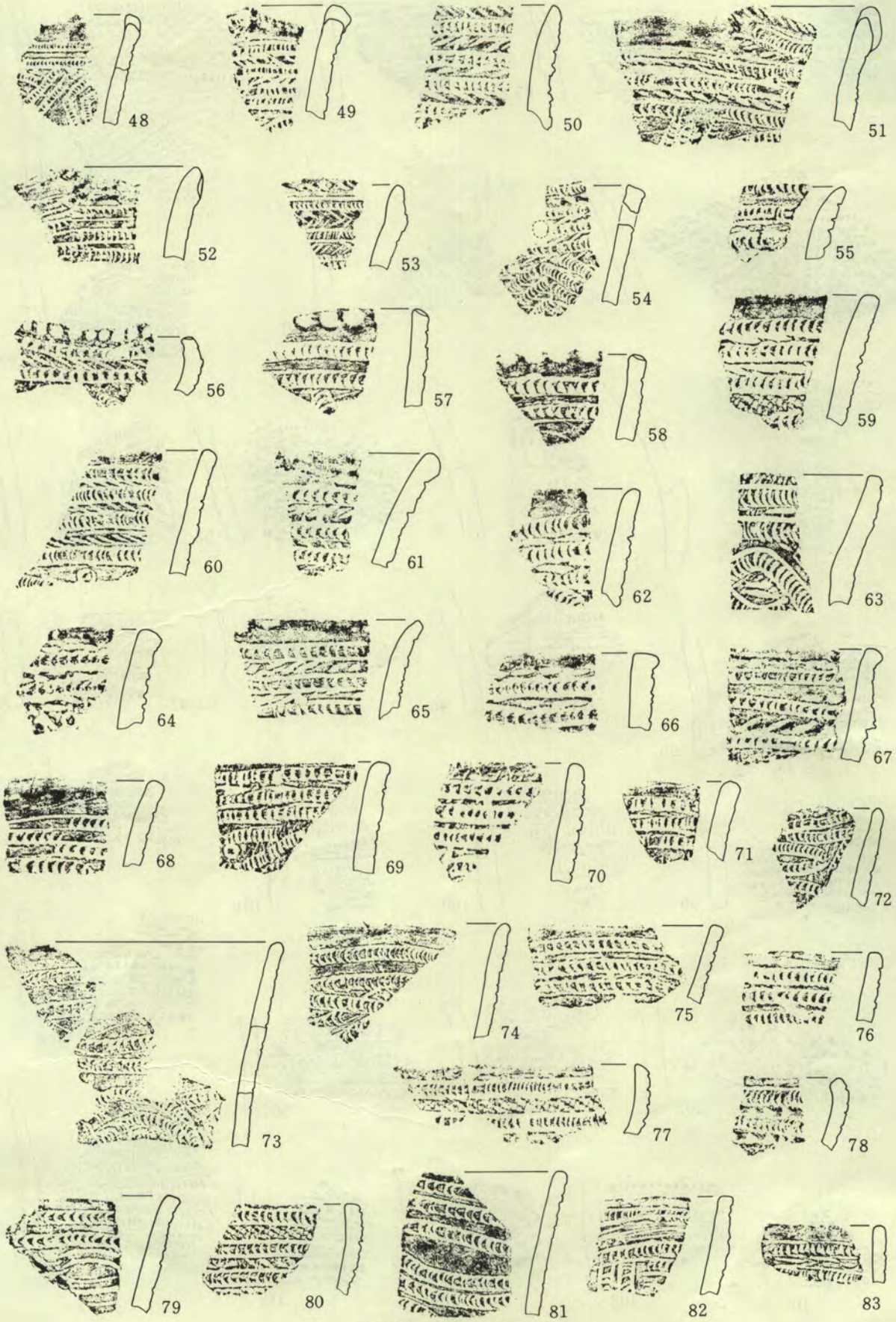
第20図　B群3類B種(1)



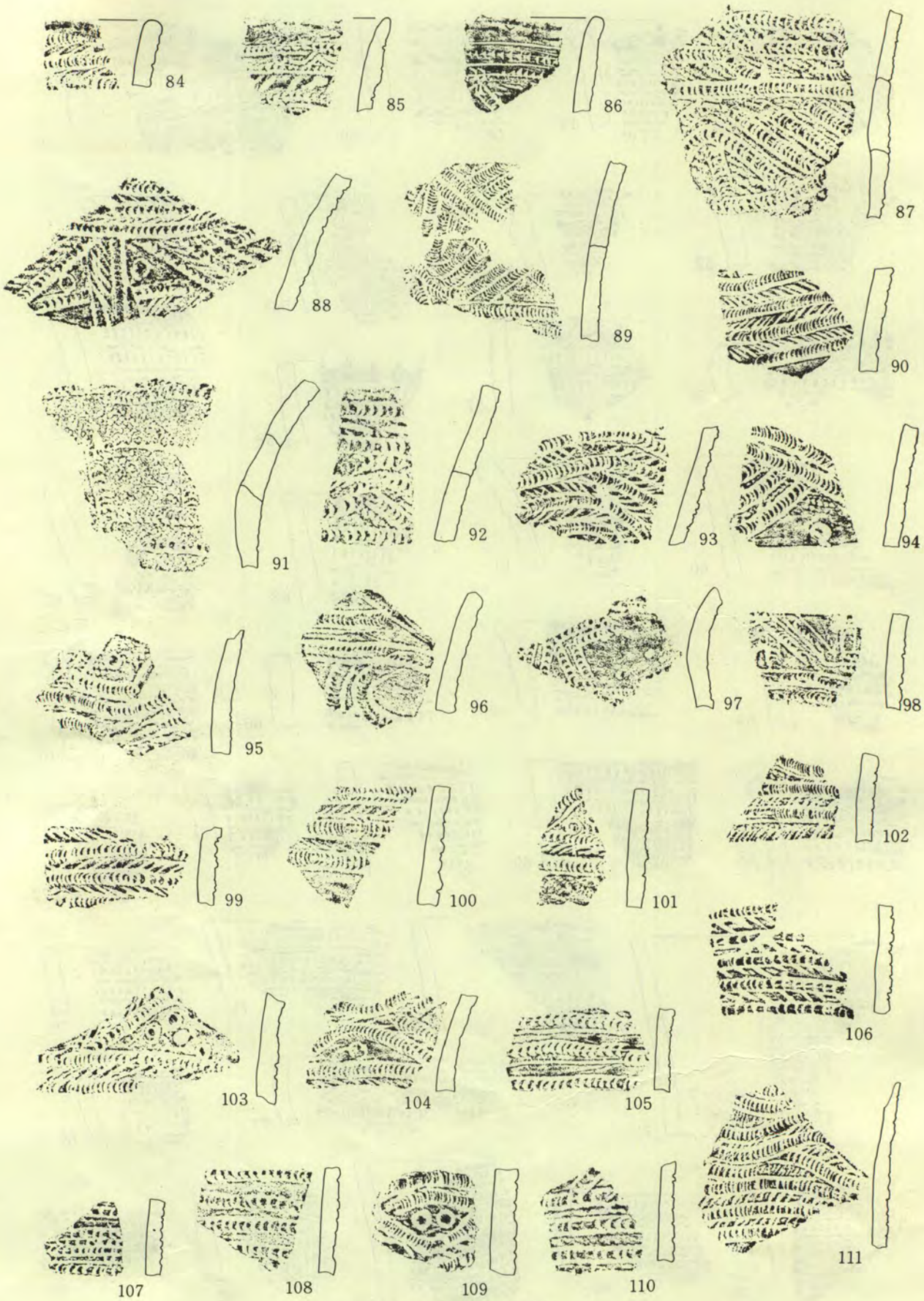
第21図　B群3類B種(2)



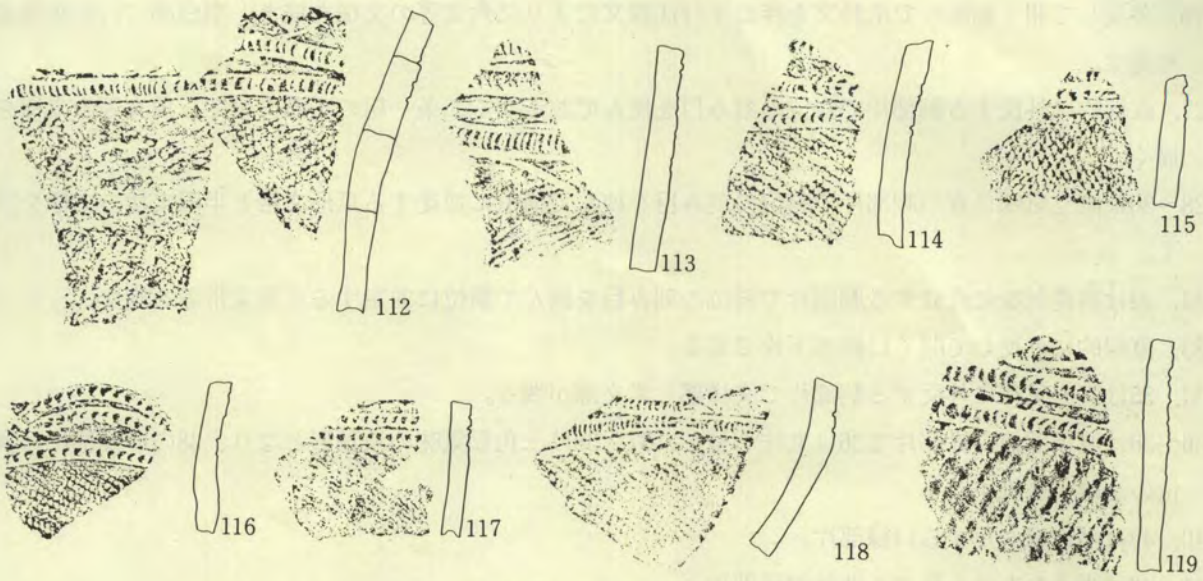
第22図　B群3類B種(3)



第23図　B群3類B種(4)



第24図　B群3類B種(5)



第25図　B群3類B種(6)

廻らし、その間を爪形を伴う平行沈線文で交差する波状文を配し、空白部に長い横位の刻み目を施す。

12. 外反して開く波状口縁部片で、波形に沿い口唇部下と胴部に二条ほどの爪形文帯を廻らし、空間部を沈線でレンズ状文、半円文等を作り出し、空白部に円形刺突文を施す。

13. 14は同一個体である。直立気味に外反する胴部上半から口縁部下に位置する破片と口縁部片で、口縁部下と胴部に爪形文を伴う平行沈線文を廻らし、空間部を縦位と斜位の平行沈線文で充填する。

15. 直立気味に外反する胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文を胴部に廻らし、上方に波状文を施す。

16. 直線的に外反する波状口縁部に広い無文部を設ける。爪形文を伴う平行沈線文で曲線文を施す。

17. 直立気味にやや外反する口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う平行沈線文を二条廻らし、下方に波状文を密に充填する。

18. 直線的に外反する口縁部片で口唇部下に接しながら並走する爪形文帯を廻らし、下方に斜位の沈続文を施す。

19. 20. 同一個体の胴部と口縁片で、口縁部下に爪形文を伴う平行沈線文を三条並走させ、爪形文帯下に波状文を充填する。

21. 直線的にやや外反する口唇部片で、口唇部下5cmほどに斜位の刻み目を施す隆帯を廻らし、この隆帯を挟んで横位に並走する爪形文を上部に三条、下部に二条廻らす。下方には斜位、横位に走る爪形文を伴う平行沈線文を施す。一部に円形刺突文を施す。

22. 直線的に外反する胴部片で、21の個体かも知れない。爪形文を伴う平行沈線文で三角文を作り出し、空白部に二個一組の円形刺突文を施す。

23. 24. 同一個体と考えられる胴部と口縁部片で、口唇部下には横位に並走する爪形文を伴う平行沈線文を三条廻らし、下方に曲線文、斜位文を施す。一部の空間に、円形刺突文を三つ連続させている。

25. 直線的に外反する口縁部片で、口唇部下に横位に並走する爪形文を伴う平行沈線文を二条廻らし、下方に横位、縦位で文様を施す。

26. 外反して開く胴部片で爪形文を伴う平行沈線文により三角文等の文様を描き、空白部に円形刺突文を施す。

27. 直線的に外反する胴部片で斜位の刻み目を挟んで並走する二条一組の爪形文帯で三角文等の文様を描く。

28〜30は直立気味に立つ胴部片で斜位の刻み目を挟んで横位に並走する爪形文帯と半円文状の文様を描く。

31. 32は内湾気味に直立する胴部片で斜位の刻み目を挟んで横位に並走する爪形文帯等を施す。

33. 直線的に外反して開く口縁部下片である。

34. 35は直立気味に外反する胴部片で文様部と素文部が残る。

36〜38は波頂部の口縁部片で36は丸味を呈し、37、38は三角形気味の波頂形となり、38の口縁部には縦位の沈線文を施す。

40. 42は平口縁を呈する口縁部片。

41. 43は大きな丸味を呈する波状口縁部片。

44. 45. 48. 49は山形の小突起を付す口縁部片。

46. 47はやや大きめの山形突起を付す口縁部片。

50〜53は、口唇部に斜位の刻み目を施す口縁部片。

54. 口唇部に爪形文を連続させる口縁部片で口縁部下に貫通孔を一ヶ所設ける。

55. 口唇部に縦位の刻み目を施す口縁部片。

56〜58は口唇部に指頭状圧痕を連続させる口縁部片。

59〜86は平口縁を呈する口縁部片である。59. 62. 68〜82. 86は口唇部下に刻み目を挟まず爪形文帯を廻らす。60. 61. 65. 84は斜位の刻み目を挟み、63. 64. 66. 83は横位の刻み目を挟んで爪形文帯をを廻らす。67は斜位の刻み目を施す隆帯を設ける。a型式に比定されよう。

73. 74は同一個体と考えられる。85も67と同様、隆帯を設ける。

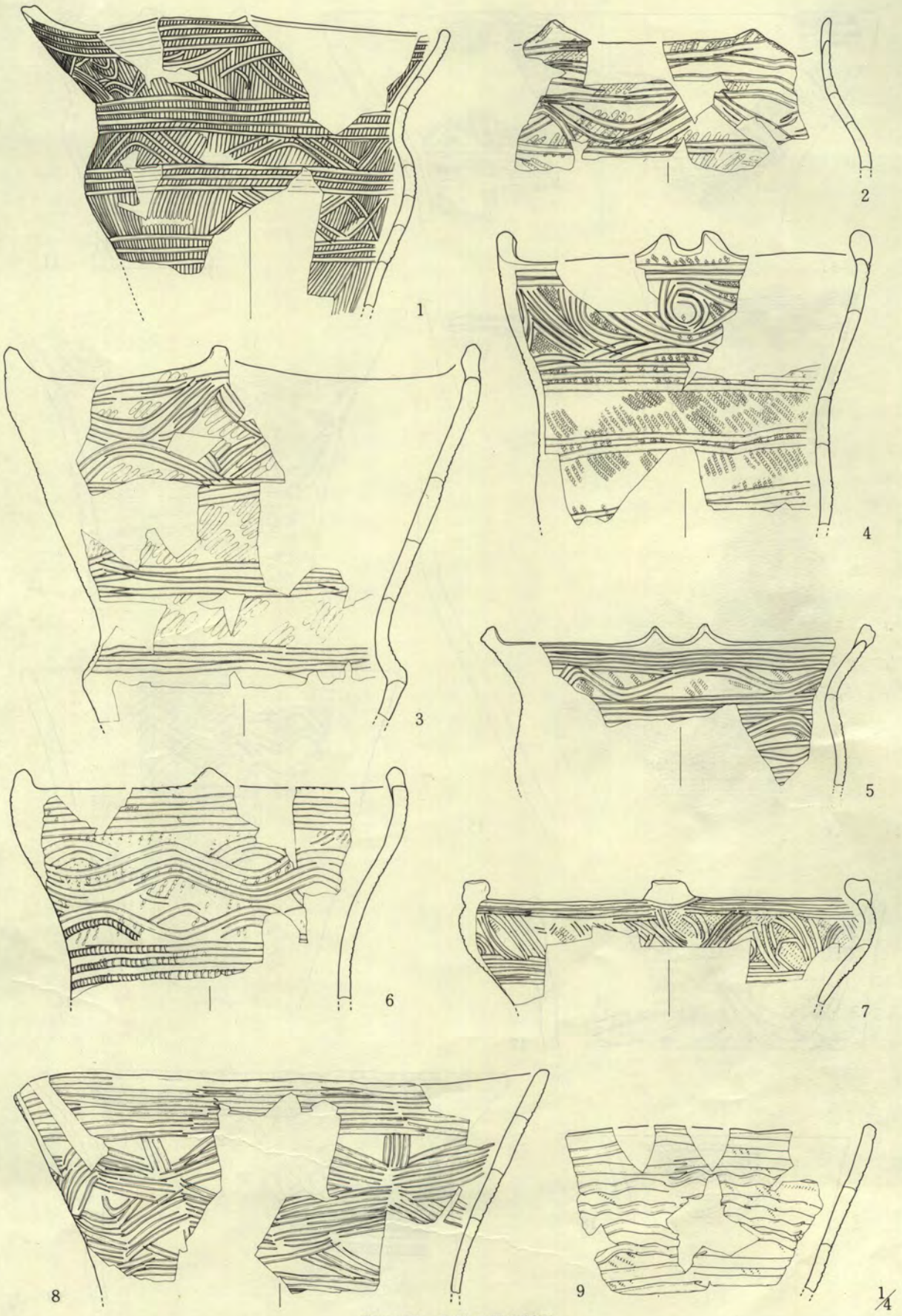
87〜119は胴部上半より下半の破片である。刻み目を挟まず爪形文を伴う平行沈線文で文様を構成するもの（87、89、91、94〜98、105、107〜112、114〜119）。刻み目を挟んで爪形文帯で文様を構成するもの（88、90、92、99〜101、102、103、106、113）。文様の空白部に円形刺突文を伴うもの（88、95、101、103、109）

B群3類C種（第26〜30図1〜76）

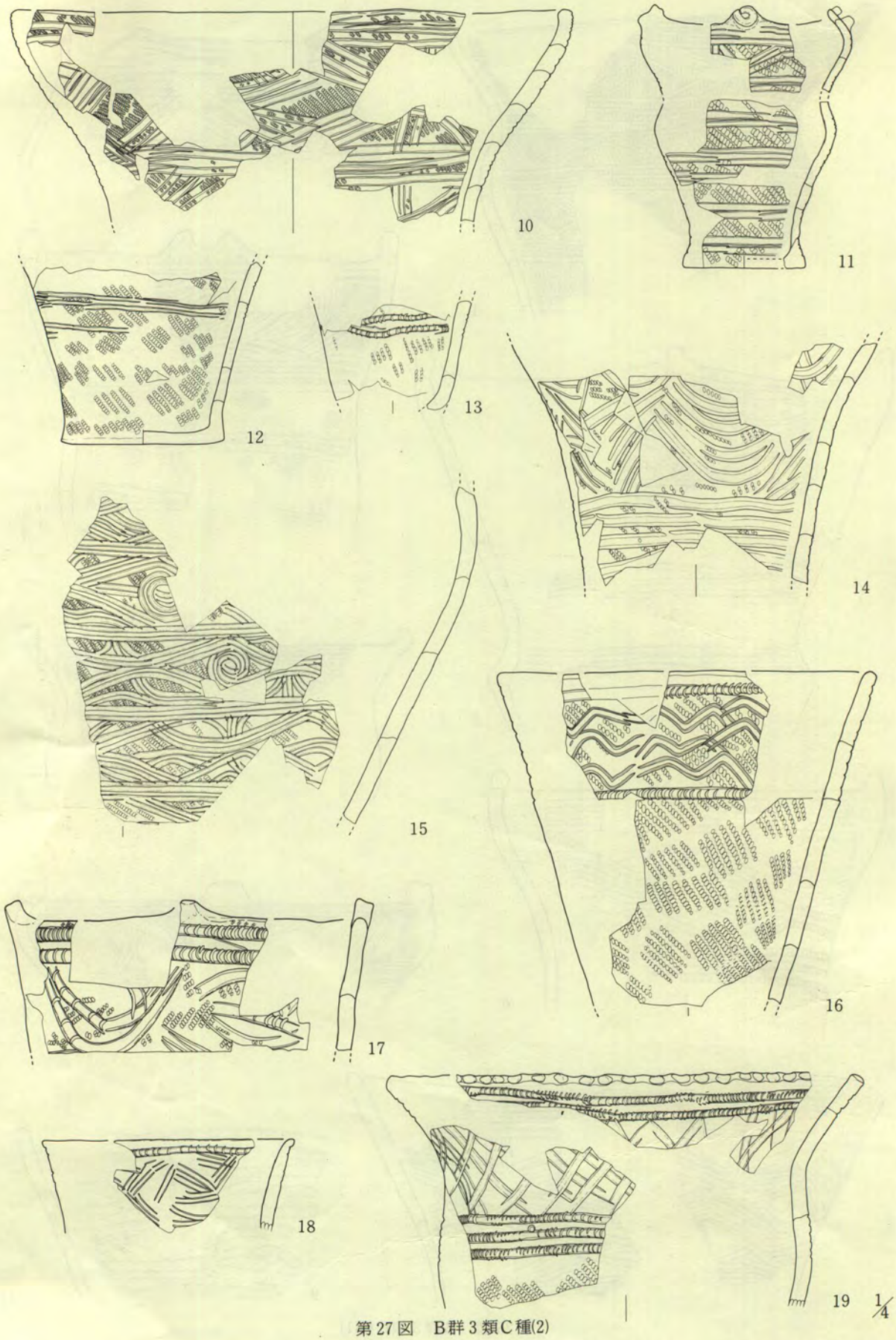
1．外反気味に開く胴部上半より、内湾して頸部へ移行し、外反して開く口縁部となる。緩やかな波状口縁の深鉢である。波状突起は大小のものを対角線状に作り出す。地文は無節のLを充塡する。平行沈線文を口唇直下、頸部、胴部最大径部、下半に並走させて横位に廻らし、曲線文等でその間を埋める。

2．最大径部を胴部に設け、口縁部を直立させ、大小の突起を付す波状口縁の深鉢である。地文は無節のLとRである。横位に並走する平行沈線文を口唇部下と胴部上半に施し、その間を曲線文で埋める。

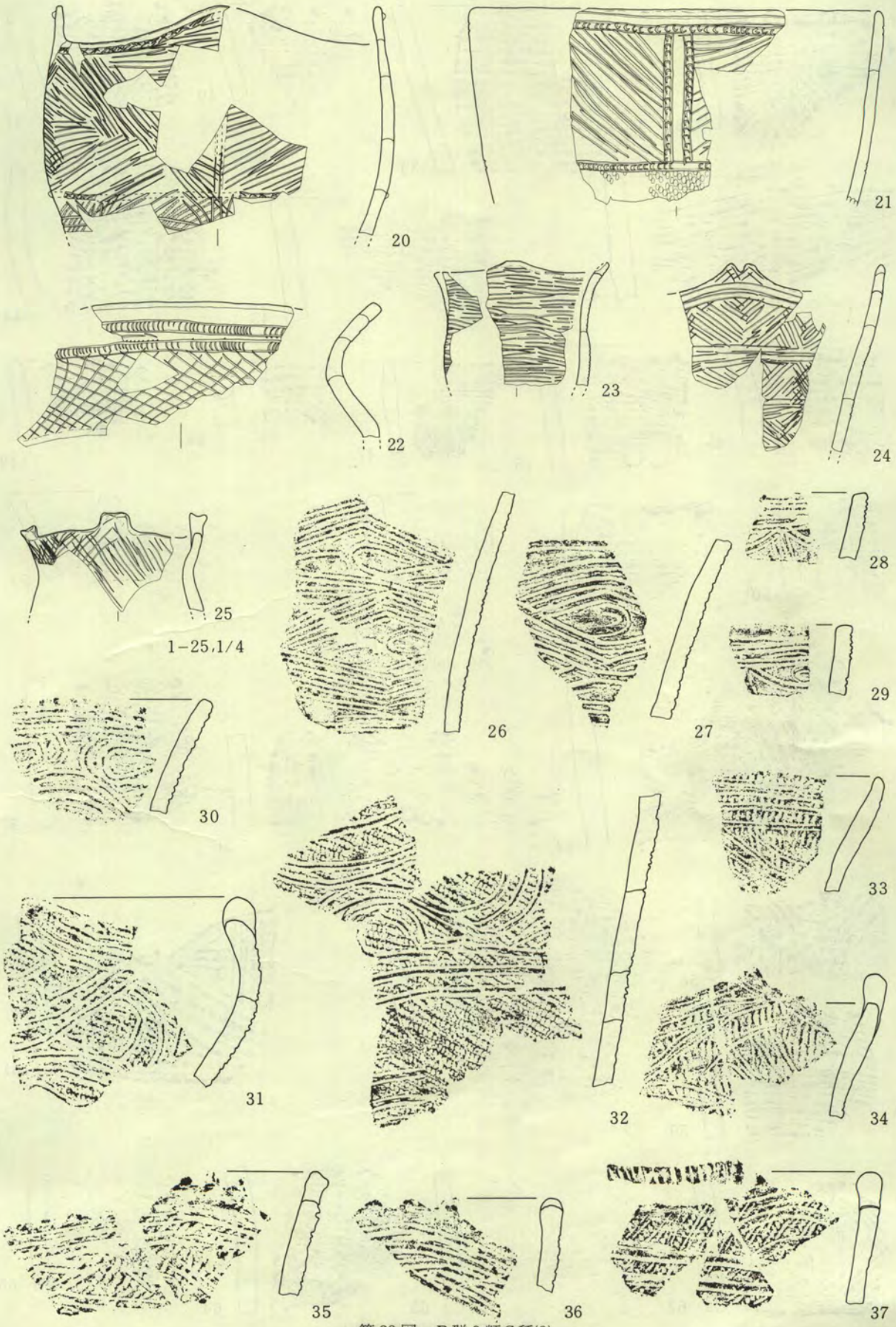
3．胴部下半でくの字状に屈曲し、外反して開きながら口縁部でやや内湾する緩やかな波状口縁の深鉢である。円錐形の小突起を付す。地文は無節のLである。平行沈線文を横位に二〜三条一組で口唇部下、胴部上半、中位、屈曲部上方に並走させ、上部の沈線文帯間に相対する曲線文を施す。



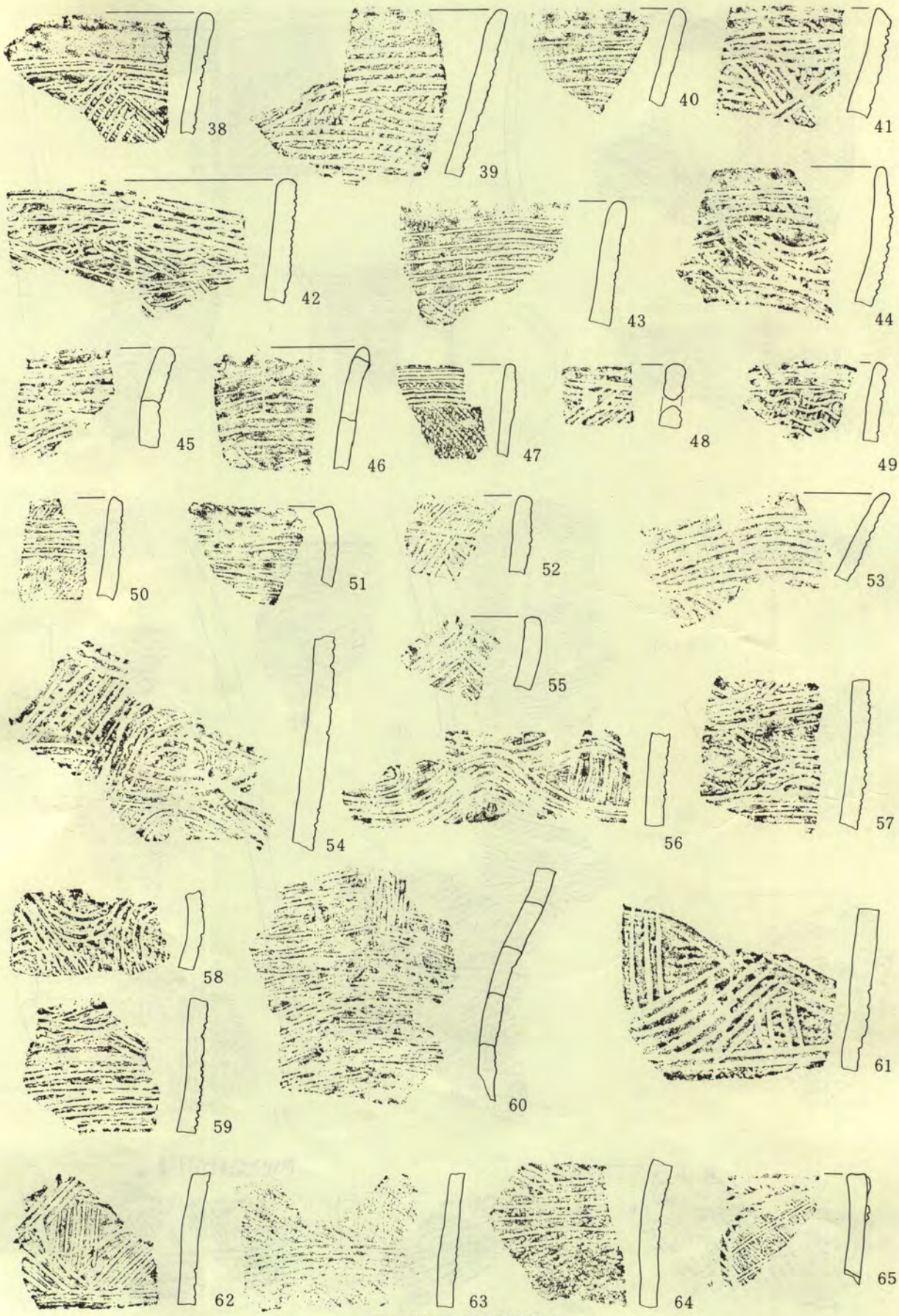
第26図　B群3類C種(1)



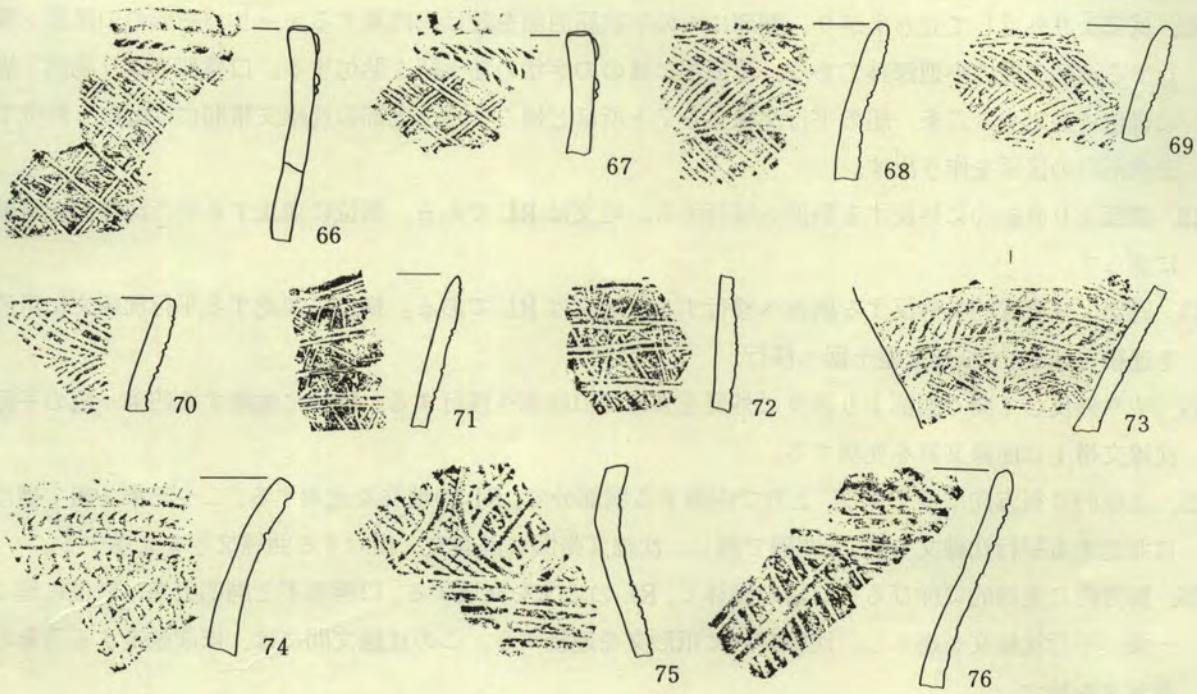
第27図　B群3類C種(2)



第28図　B群3類C種(3)



第29図　B群3類C種(4)



第30図　B群3類C種(5)

4．直立気味に内湾する胴部よりやや頸れを設け、外反気味にやや開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢で二個一組の山形小突起を付す。地文はRLである。二条～三条一組の横位に廻る平行沈線文を口唇部下より四組ほど設け、上部の沈線文帯間に渦巻文、曲線文等を施す。

5．内湾する胴部より外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢で、山形の小突起を二個一組で付す。地文はRLである。口唇部下より並走する平行沈線文を、四条、六条、三条（？）を一組として横位に廻らし、沈線文帯間に波状文、曲線文を描く。

6．直立する胴部より緩やかに内湾して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢で、山形小突起を付す。口唇部には斜位の刻み目を施す。地文はLRである。口唇部下と胴部上半に横位に並走する平行沈線文を三条一組で廻らし、胴部の平行沈線文内には一部爪形文を連続させる。この沈線文と曲線文を交差させる。

7．内湾するキャリパー形を呈する平口縁の深鉢で、円錐形小突起を付す。地文はRLである。口唇部直下と胴部上半に横位に並走する平行沈線文を廻らし、この沈線文帯間に曲線文等を施す。

8．胴部より外反して大きく開く平口縁の深鉢で、口唇部下と胴部に並走する平行沈線文を廻らし、沈線文帯間に集合沈線文を描く。

9．斜方向に直線的に開く平口縁の口縁部片。地文はRLである。口唇部下と胴部上半に横位に並走する平行沈線文を二条廻らし、この沈線文帯間にウェーブする平行沈線文を四条廻らす。

10．直立気味に外反する胴部より内湾気味に開きキャリパー形を呈する口縁部へ移行し、口唇部を直立気味とする平行縁の深鉢である。地文はRLである。口唇部下と胴部上半に並走して廻る平行沈線文を施し、沈線文帯間にX字状の集合沈線文と縦位の沈線文を埋める。

11. 底部より外反して立ち上がり、胴部にくの字状屈曲部を設け、内湾するキャリパー形の口縁部へ移行する波状口縁の小型深鉢である。波頂部にはのの字状の粘土紐を貼付する。口唇部下より胴部下端に横位に並走する二条一組の平行沈線文を7ヶ所ほど廻らそう。上部の沈線文帯間には縦位と斜位で三角形状の区画を作り出す。

12. 底部より直線的に外反する胴部へ移行する。地文はRLである。横位に並走する平行沈線文を胴部に廻らす。

13. 底部より直線的に外反する胴部へ移行する。地文はRLである。横位に並走する平行沈線文に爪形を連続させる。(爪形文型土器へ移行)

14. やや外反して開く胴部より徐々に外反を強めて口縁部へ移行する。横位に並走する四条一組の平行沈線文帯上に曲線文等を充塡する。

15. 直線的に斜方向に長く伸び、上方で内湾する胴部分で、RLの地文を充塡する。二〜三条一組で横位に並走する平行沈線文を4.5cm間隔で施し、沈線文帯間に渦巻文、相対する曲線文等を充塡する。

16. 斜方向に直線的に伸びる平口縁の深鉢で、RLの地文を充塡する。口唇部下と胴部上半に横位に廻る一条の平行沈線文を廻らし、沈線文内に爪形文を連続する。この沈線文間には、ほぼ並走する三条の波状文を施す。

17. やや外反気味に直立する平口縁の深鉢で、山形小突起を付す。口唇部下に横位に並走する二条の平行沈線文を廻らし、沈線文内を爪形文で充塡する。下方には曲線文を配し、一部に爪形が施される。地文はLRである。

18. 緩やかに直線的に外反する口縁部で、口唇部下に爪形文を伴う一条の平行沈線文を廻らし、下方に曲線文を施す。

19. 内湾気味の胴部より外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢で、口唇部には指頭圧痕を連続させる。口唇部下に二条、胴部に三条の横位に並走する平行沈線文を廻らし、沈線文内に爪形を連続させる。この沈線文帯間には平行沈線文で斜格子文を施す。胴部の地文はRLである。

20. 緩やかに内湾してほぼ直立気味となる口縁部へ移行する波状口縁の深鉢である。波状形に沿い口唇部下と胴部にX字状の刻み目を施す浮線文を貼付する。さらに波頂部より縦位に貼付されたと考えられる浮線文痕が認められる。浮線文間とさらに下方には斜位、横位の平行沈線文を充塡する。

21. 直立気味に緩やかに内湾する胴部より口縁部片で、平口縁である。口唇部下と胴部に横位に廻る平行沈線文を施し、沈線文内を爪形で埋める。この空間には縦位に並走する爪形を伴う平行沈線文を描く。空間部には肋骨文状に斜位の平行沈線文を充塡する。胴部にはRLの地文を施す。

22. くの字状に屈曲する平口縁の深鉢で、口唇部下に並走する二条の平行沈線を施し、沈線文間を爪形で埋め、下方には斜格子文を描く。

23. 直立気味に内湾する胴部より外反して開く口縁部へ移行する波状口縁の小型深鉢で、平行沈線文を横位に充塡する。

24. 直立気味に外反して開く口縁の深鉢で、U字状のスリットをもつ山形突起を付す。2.5cm間隔ほどで並走する平行沈線文を口唇部下より胴部に廻らし、その間を斜位の平行沈線文で充塡する。

25. 内湾する胴部より外反して開く口縁部へ移行する小型の深鉢で、小突起を付す。体部には斜位の沈線文を施し、一部は交差して格子文状となる。

26. 27は平行沈線文により菱形の区画を作り出し、空白部に相対する曲線文を描く胴部片である。

28～30は平口縁の口縁部片で、口唇部下に並走する平行沈線文を廻らし、下方に曲線文、縦位文、相対する曲線文等を施す。

31. 32は同一個体の口縁部と胴部片である。31は内湾するキャリパー形の波状口縁部片で、U字形のスリットを設ける波頂となろう。波状形に沿い平行沈線文を廻らし、下方には曲線文を施す。32の胴部片は横位に廻る平行沈線文帯間に波状気味の曲線文等を描く。地文は RL である。

33. 34は同一個体の口縁部片である。地文はRと考えられる。

35. 36は三個一組の小突起を付す波状口縁の口縁部片で、35は LR の地文を施す。

37. 小突起を設ける波状口縁の口縁部片で、口唇部には縦位の刻み目を施す。地文は付加条 RL である。

38. 緩やかな山形小突起を付す平口縁の深鉢片で、口唇部下に無文部を設け、下方に並走する二条の平行沈線文を廻らし、さらに斜位の平行沈線文を交差させて格子を描く。

39. 無節のLを地文とする平口縁の口縁部片である。

40. 43、横位に廻り並走する平行沈線文等を施す口縁部片である。

41. RL を地文として口唇部下に平行沈線文を廻らし、下方に交差する斜位の平行沈線文を施す。

42. 緩やかな波状を呈する口縁部片で、LR？を地文とする。

44. 緩やかに内湾する平口縁部片。

45. 弱くくの字状に外反する口縁部片。

46. 山形の小突起を付す口縁部片。

47. 直立気味に立つ小型深鉢の口縁部分で、並走する平行沈線文を口唇部下に廻らす。地文は RL である。

48. 補修孔を設ける口縁部の小破片

49. 50は撚糸文を地文とし、49には波状文を施している。

51. 口唇部端に斜位の刻み目を施す口縁部片。

52. 54は LR を地文とする。52は直立気味に立つ口唇部片で、54は渦巻文、曲線文を施す胴部片である。

53. 波状口縁を呈する口縁部片。

55. 波状口縁を呈する波頂部片で、口唇部に刻み目を施し、波頂を境として左右に斜位の平行沈線文を描く。

56. 波状文と曲線文を配し、空白部に渦巻文、縦位文を施す胴部片。

57. 平行沈線文帯間に相対する曲線文等を施す胴部片。

58. 内湾する胴部片で曲線文を施す。

59. 横位に並走する平行沈線文と曲線文を施す胴部片。

60. 乱れて横位に並走する平行沈線文と、縦位に施された平行沈線文を施す胴部片。

61. 三角形、レンズ状文様を施し、空白部に縦位の平行沈線文を描く。

62. 菱形文様の空白部に縦位の平行沈線文を描く。

63. RL の地文を施し、横位に並走する平行沈線文を廻らす胴部片。

64. LR の地文を施し、斜位と横位に並走する平行沈線文を施す胴部片。

65～67は同一個体と考えられ、口唇部には縦位の浮線文を貼付する。口唇部下に一本の浮線文を廻らし、二条一組の弧状浮線文によって横位に楕円形区画を作り、空白部を斜格子で充填する。

68～70は同一個体である。平行沈線文を口唇部下と胴部に横位に廻らし、空間部と下方を矢羽根状とす

る。

71. 72は同一個体の口縁部片と考えられ、71の口縁部は波状を呈しよう。X字状となる斜位の沈線文に1cm前後幅で横位に廻る平行沈線文を施す。地文は RL である。

73. 直線的に開く胴部片で横位に並走して廻る平行沈線文を二条一組で施し、一部の沈線文帯間に斜位の平行線文を施す。

74. 口唇部下に爪形文を伴う二条の平行沈線文を並走させ、下方に斜格子文を施す。

75. 76は同一個体片で、口唇部下と胴部に横位に並走する平行沈線文を廻らし、空間部を弧線を描き、横位に並ぶ楕円形文を作り出し、楕円形文内を斜格子で充塡する。

B群3類D種（第31～36図1～76）

1．くの字状に緩やかに折れる胴部より短かく外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢片である。口唇部にはX字状と三本の縦位の浮線文が交互に連続して貼付されよう。頸部には三本一組で横位に並走する浮線文を廻らし、刻み目を一本づつ方向を変え矢羽根状とする。胴部は二本一組で交差する波状を描き、レンズ状空間に渦巻を浮線文で貼付する。地文は RL である。

2．内湾するキャリパー形を呈する平行線の口縁部片で、二個一組の円形小突起を付す。口唇部には鋸歯状に刻み目を連続する。浮線文で木の葉状入組文に似る模様を貼付し、空間部に円形刺突を施す。口唇部付近は LR、下方は RL の地文である。

3．内湾するキャリパー形を呈する平口縁の口縁部片で山形突起の頂部を大きくU字状にえぐり裾部を残す状態の小突起を付す。口唇部は三本一組で3cm前後間隔に浮線文を縦位に貼付し、その間をX字で埋める。口唇直下には横位に並走する三本の浮線文を貼付し、下方では曲線を描く。

4．全体に寸胴気味で胴部の頸れ、キャリパー形を呈する内湾も弱い平口縁の深鉢である。口唇部には四ヶ所に円錘形小突起を付し、頂部を窪ます。器面全体に RL の地文を充塡する。口唇部直下、胴部上半、胴部頸れ部に二本一組で並走する浮線文を貼付し上部の空間に浮線文を渦巻、曲線状に施す。

5．胴部より外反して開き、波頂部は直立気味に立ち上がり口唇部を内湾させる波状口縁の深鉢である。波頂部は浅いV字形の窪みを設ける。波状の口縁に沿い三本の浮線文を並走させ、胴部上半には二本廻らす。この間に大きく曲線を描き、空間部を斜位に浮線文を貼付する。

6．底部より直立気味に外反して立ち上がり、胴部上半よりやや内湾気味に直立して大きく開く口縁部へ移行する。地文は RL と LR を交互して充塡し、二本一組で横位に口唇部より胴部下端まで5ヶ所、ほぼ等間隔に浮線文を貼付する。この間を弧状曲線で横位の浮線文帯と結び楕円形を横位に連続して作り出し、楕円形文の中央部に短かくとぎれる横位の浮線文を貼付する。さらに空間を1cmほどの円形刺突文で充塡する。なお楕円形文は離れX字状の浮線文による効果で生じたものかも知れかい。

7．直線的に斜方向に長く伸び、くの字に屈曲して口縁部へ移行する胴部片で RL の地文を充塡する。浮線は屈曲部に四本、やや上方に二本並走して貼付する。屈曲部の浮線文は二本一組で矢羽根状とし、上方の浮線文は一本づつ交互に方向を変えて刻み目を施し、X字状とする。

8．直立気味から上部で外反気味となる胴部片である。浮線文は三本一組で二ヶ所横位に並走させ貼付する。刻み目は、矢羽根状に交互して施す。RL の地文を充塡させ、上部浮線文帯下には結節文が横位に走る。

9．くの字状に屈曲する胴部片で、屈曲部を境にして上部に四本、二本、二本一組で並走する浮線文を

貼付する。刻み目は各組で矢羽根状に施す。地文は RL である。

10. 胴部上半より緩やかに外反し、内湾してキャリパー形を呈する口縁部へ移行する。口縁は緩やかな波状口縁である。口唇部には刻み目を施す。浮線文は口唇部直下、胴部上位、胴部中位に三本一組で並走させて貼付する。上部の浮線文間には渦巻、曲線文を施す。

11. 口径に比べて大きめの底部より緩やかなS字を描く胴部へ移行し、内湾してキャリパー形を呈する口縁となる。平口縁の深鉢で、四ヶ所に山形小突起を付す、口唇部には刻み目を施す。浮線文は口唇部直下より三、四、三、二、三、二本一組で横位に並走させて貼付する。上部の浮線文間には渦巻文波状文を施す。地文は RL である。

12. 直立気味に内湾する胴部上半より外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。円錐形の小小突起を付し、口唇部には刻み目を施す。文様構成は 6 に似るもので、三本一組で並走する浮線文を間隔をもって貼付し、この空間部に二本一組で上下の浮線文帯に接して弧状曲線を付し、幅をもって横位に連続して楕円形文を作り出す。そして楕円形状文の中央部と楕円形文間に横位に二本一組の短かい浮線文を貼付する。地文は RL と LR である。

13. 内湾の弱いキャリパー形を呈する波状口縁の深鉢片で、波頂部には獣面？を付していたのであろうか。口唇部には刻み目を施す。波状に沿って二本、胴部上半に三本、さらに下方に一本並走して浮線文が横位に廻る。上部の浮線文間には波頂下に相対する曲線文を貼付し、この空白部には縦位の浮線文を施す。浮線文貼付後に RL の地文を施している。

14. 外反して開く胴部上半より内湾して口縁部へ移行するキャリパー形を呈する平口縁の深鉢である。四ヶ所に 6 に似る小突起を付す。口唇部には刻み目を施す。胴部上半に四本一組、さらに下方にも続くと考えられる横位に廻る浮線文を貼付する。これらの上部にはウェーブする浮線文を四本並走させ RL の地文を上面から施している。

15. 内湾してキャリパー形を呈する波状口縁部である。口唇部にはX字状に連続して交差する波状と、三本一組の浮線文を縦位に貼付する。波状形に沿って三本一組の浮線文を並走させ、下方に曲線文等を施す。地文は RL である。

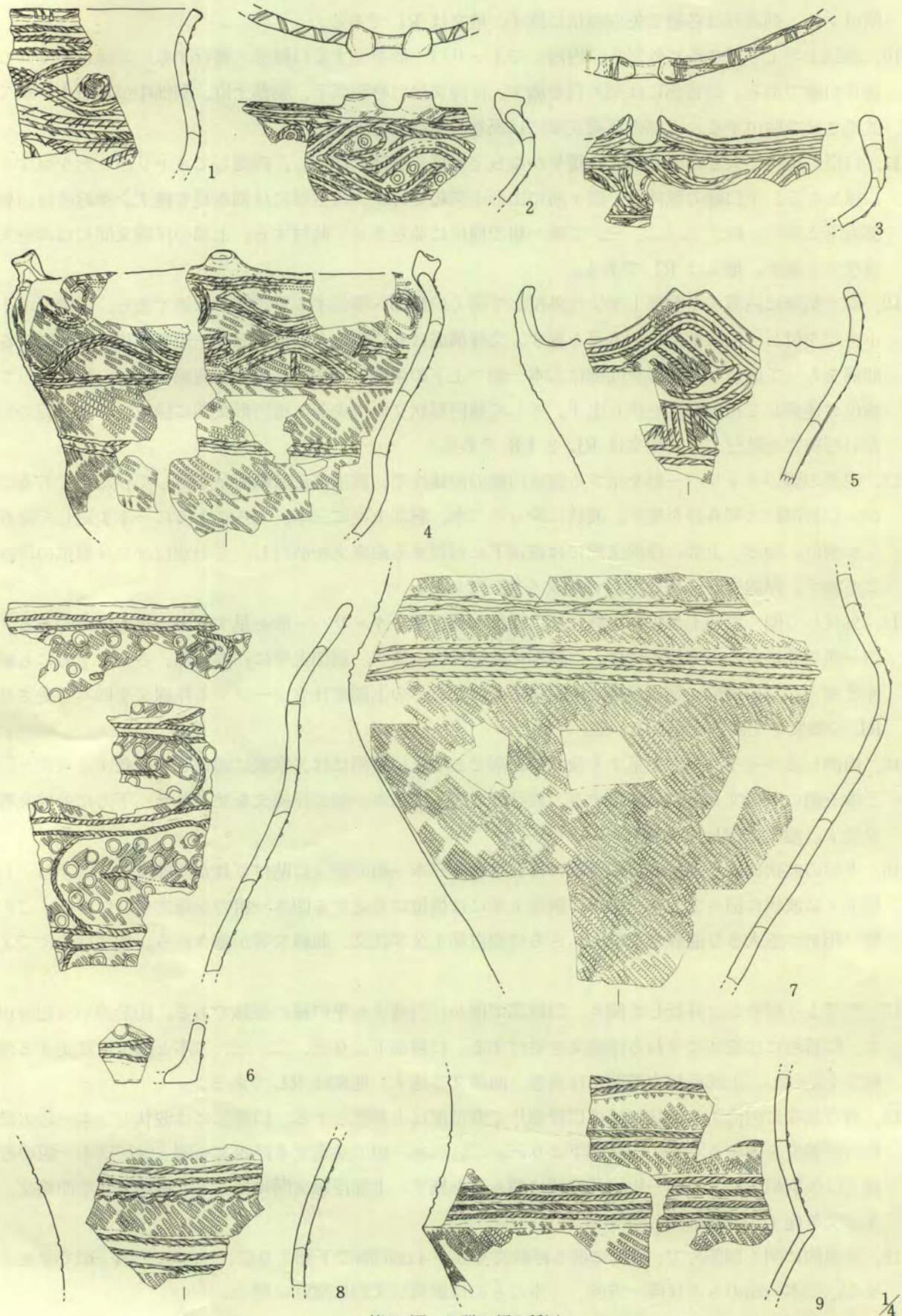
16. 大形の波状口縁を呈する。口唇部にはX字状と三本一組の縦位に貼付された浮線文が交互する。口唇部下に波状に沿って三本一組で、胴部上半には横位に並走する四本一組の浮線文を貼付する。この間に相対する大きな曲線文を配し、さらに空白部をX字状文、曲線文等が施される。地文は LR である。

17. 胴部より緩やかに外反して開き、口縁部で僅かに内湾する平口縁の深鉢である。山形の小突起を付す。口唇部には波状にうねる浮線文を貼付する。口唇部下より三、二、三、二本と横位に並走する浮線文を貼付し、上部浮線文帯間には渦巻、曲線文等施す。地文は RL である。

18. 直立気味に内湾する波状口縁の口縁部片で波頂部は山形状とする。口唇部には波状と三本一組の縦位の浮線文を連続させる。口唇部下より三、二、三本一組の並走する浮線文を廻らせ、三本一組の浮線文は矢羽根状に、二本一組はX字状に刻み目を施す。上部浮線文間には三本一組で大きな曲線文、X字文等施す。地文は RL である。

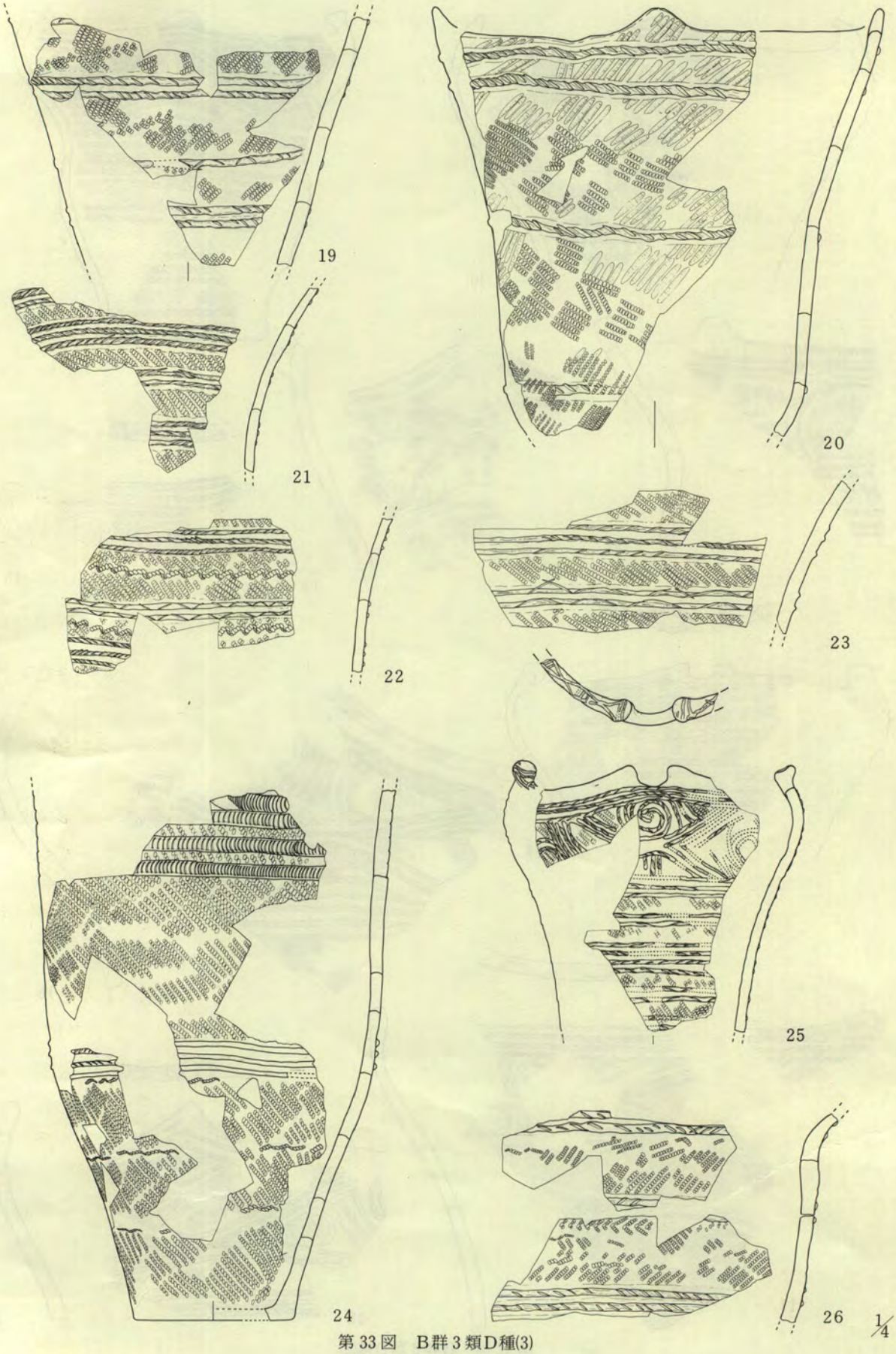
19. 直線的に開く胴部片で、横位に廻る浮線文を 3 ～ 4 cm間隔で下部より二、一、二、？本一組で並走させる。二本一組のものは同一方向、一本のものは鋸歯状文的に交互に刻む。

20. 内湾して立ち上がる胴部下半より直立気味となり、緩やかに外反して開く口縁部へ移行する。山形

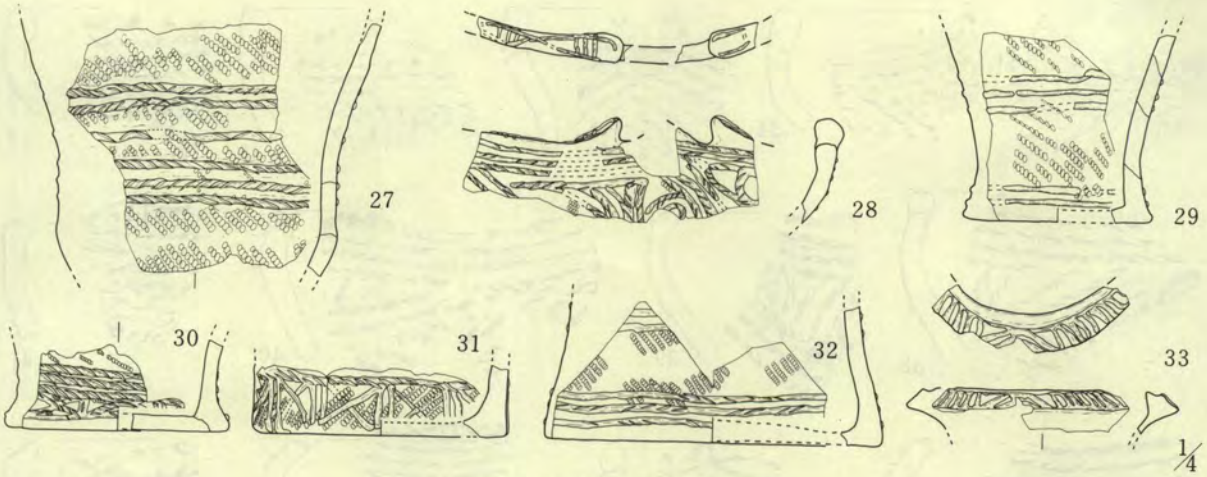


第31図　B群3類D種(1)

第32図　B群3類D種(2)



第33図　B群3類D種(3)



第34図　B群3類D種(4)

の小突起を付す平口縁の深鉢である。浮線文は口縁部に二本、胴部中位に一本、下部に一本を横位に廻らし、同一方向の刻み目を施す。地文は口縁部と胴部中位を中心として無節Lの斜縄文はLを施し胴部下半に LR、その他の部分が RL で充塡する。

21. 緩やかに外反する胴部片で、横位に廻る浮線文を上部より二？、三、二、三本一組で並走させる。地文は RL である。

22. 直立気味に外反する胴部片で、横位に廻る浮線文を三、二、三本で並走させ、二本一組の浮線文上には鋸歯状刻みを施す。他は矢羽根状に刻む。地文は RL で、横位に結節文が二ヶ所走る。

23. 外反して開く胴部分で、RL の地文を充塡させる。三、二本一組で横位に並走する浮線文が廻り、三本一組は矢羽根状、二本一組は鋸歯文的に刻む。

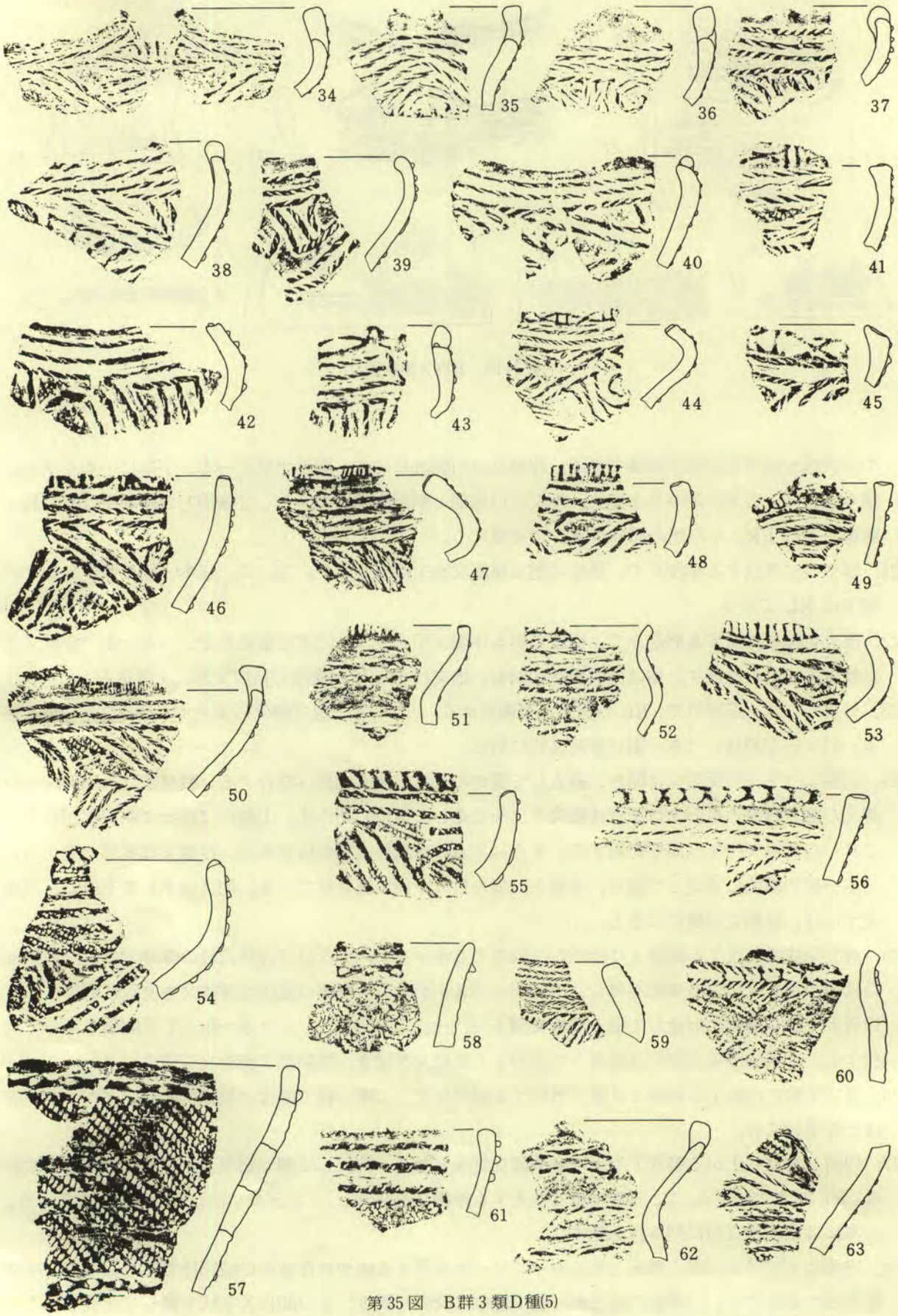
24. 底部よりやや外反気味に開き、直立して僅かに上方で開く胴部へ移行する。残存部には爪形文と浮線文が施される。爪形文は平行沈線文を三条並走して横位に廻らす。上部には僅かに曲線部が残り、これらの沈線文内を爪形で充塡する。さらに上方には爪形文様が広がろう。浮線文は胴部の変化点に三本一組で横位に並走して廻る。浮線上の刻み目は一部に施されている。地文は RL を充塡し、浮線文下には、結節文が横位に走る。

25. 直立気味に外反する胴部より緩やかに内湾するキャリパー形を呈す波状口縁の深鉢である。波頂部には緩やかな6に以る突起を付し、口唇部にはX字形と二～三本の縦位な浮線文を交互に貼付する。口唇部下より横位に並走して廻る浮線文間を三、三、二、四、二、二？本一組として間隔をもって貼付する。上部の浮線文間には波頂下で相対する曲線文を描き、空間部に渦巻文等施す。

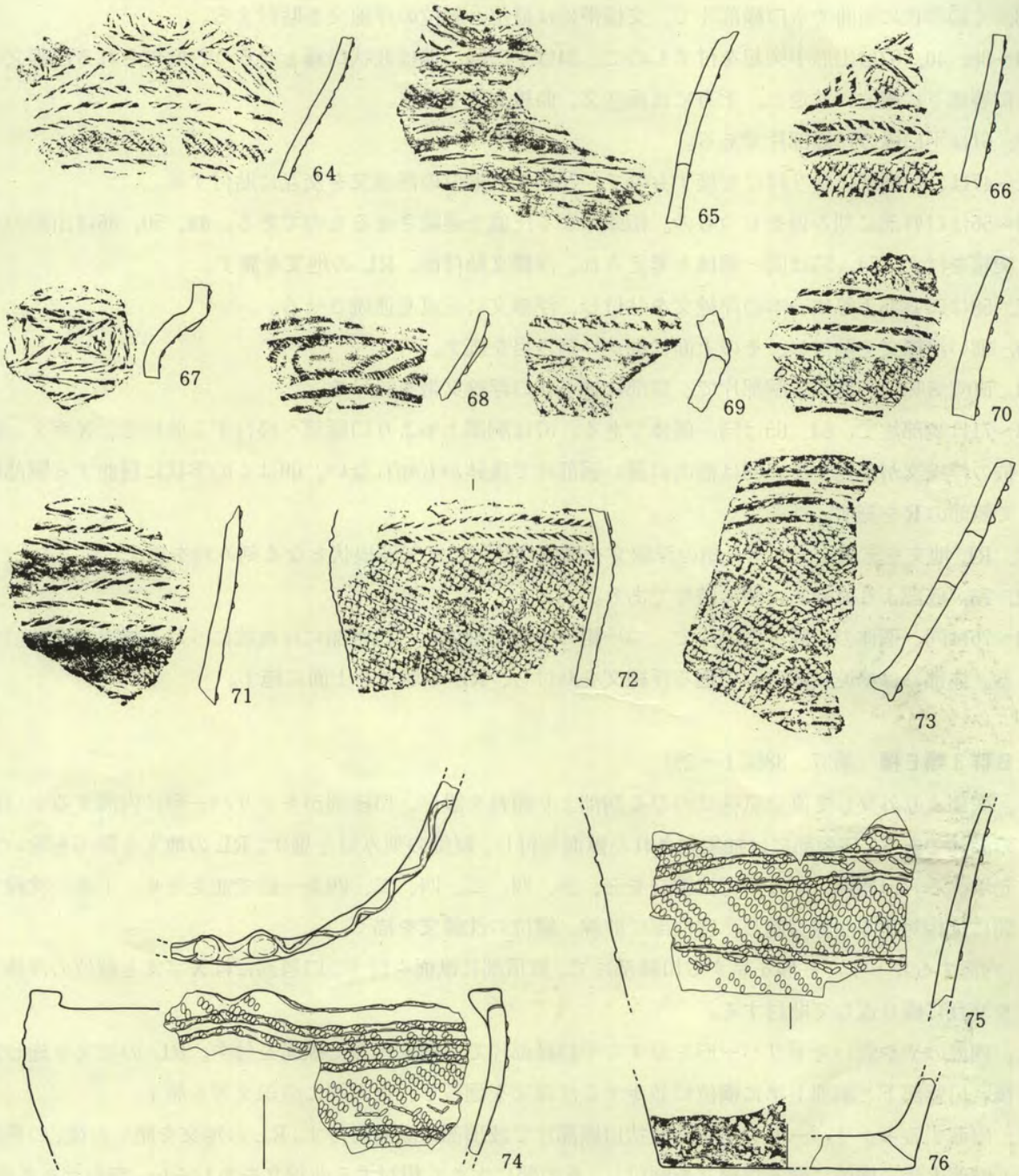
26. 直立気味に内湾する胴部より強く外反する胴部片で、二本一組で横位に並走する浮線文を4cm間隔ほどで貼付する。

27. 内湾して立ち上がる胴部下半よりやや直立気味となり、外反して開く胴部上半へ移行する破片である。RL の地文上に二、二、三本一組で並走する浮線文を貼付し、二、三本一組は矢羽根状となるよう、一本には鋸歯状文的に刻み目を施す。

28. 内湾して口唇部が直立気味となるキャリパー形を呈する緩やかな波状口縁部片である。山形の小突起を三つ連続させ、口唇部には三本一組で縦位に間隔を置き、その間にX字状を施して連続させる。



第35図　B群3類D種(5)



第36図　B群3類D種(6)

口唇部下に並走して廻り、下方に渦巻、曲線文等の浮線文を貼付する。

29. 底部より直立気味に内湾し、外反して開く胴部へ移行する。RL の地文上に胴部下半部に三本一組の横位に並走する浮線文を貼付する。

30. 31. 30は底部より外反気味に開き、31は直立するもので、両者とも胴部下端にX字文と縦位の浮線文を交互に連続させる。30は RL、31は LR の地文である。

32. 底部より直線的に内傾する。RLの地文上に三本一組等の浮線文を横位に廻らす。

33. くの字状に屈曲する口縁部片で、文様帯には縦位と斜位の浮線文を貼付する。

34～38. 40. 62は山形小突起を付すもので、34は平口縁、他は波状口縁となろう。貼付される浮線文は口唇部下に横位に並走し、下方には渦巻文、曲線文等を施す。

39. 61は平口縁の口縁部片である。

41～47は、口唇部に貼り付けを施すもので、X字文と縦位の浮線文を交互に貼付する。

48～56は口唇部に刻み目をもつもの。指頭による圧痕を連続させるものである。49、50、56は山形の小突起を付す。54、55は同一個体と考えられ、浮線文貼付後、RL の地文を施す。

57. 58は口唇部下等に一本の浮線文を貼付し、浮線文に圧痕を連続させる。

59. 細い浮線文を貼付し、その上面に細かい刻み目を施す。

60. 直立気味に内湾する胴部片で、頸部に梯子状の浮線文帯を設ける。

63～71は胴部片で、64、65は同一個体である。67は胴部上半より口縁部へ移行する破片で、X字文と縦位の浮線文が交互する。68は器肉の薄い胴部片で浅鉢かも知れない。69はくの字状に屈曲する胴部片で無節のRを施す。

70. RL 地文を充塡し、二本一組の浮線文を横位に貼付して矢羽根状となる刻み目を施す。

72. 73. 底部より直線的に開く破片である。

74～76は同一個体の口縁～底部片で二つ一組の小突起を付し、口唇部には波状にうねる浮線文を貼付する。体部には横位に並走して廻る浮線文を貼付し、RL の地文を上面に施す。

B群3類E種（第37、38図1～29）

1. 底部より外反して直立気味にのびる胴部より頸れを設け、口縁部がキャリパー形に内湾する平口縁の深鉢である。口唇部には抽象化された獣面を付し、縦位の刻み目を施す。RL の地文を頸部を除いて充塡する。口唇部下より平行沈線文を三、三、四、二、四、二、四条一組で並走させ、上部の沈線文間には相対する曲線を施し、空白部に曲線、縦位の沈線文を描く。

2. 内湾するキャリパー形を呈する口縁部片で、波頂部に獣面を付す。口唇部にはX字文と縦位の浮線文を交互に繰り返して貼付する。

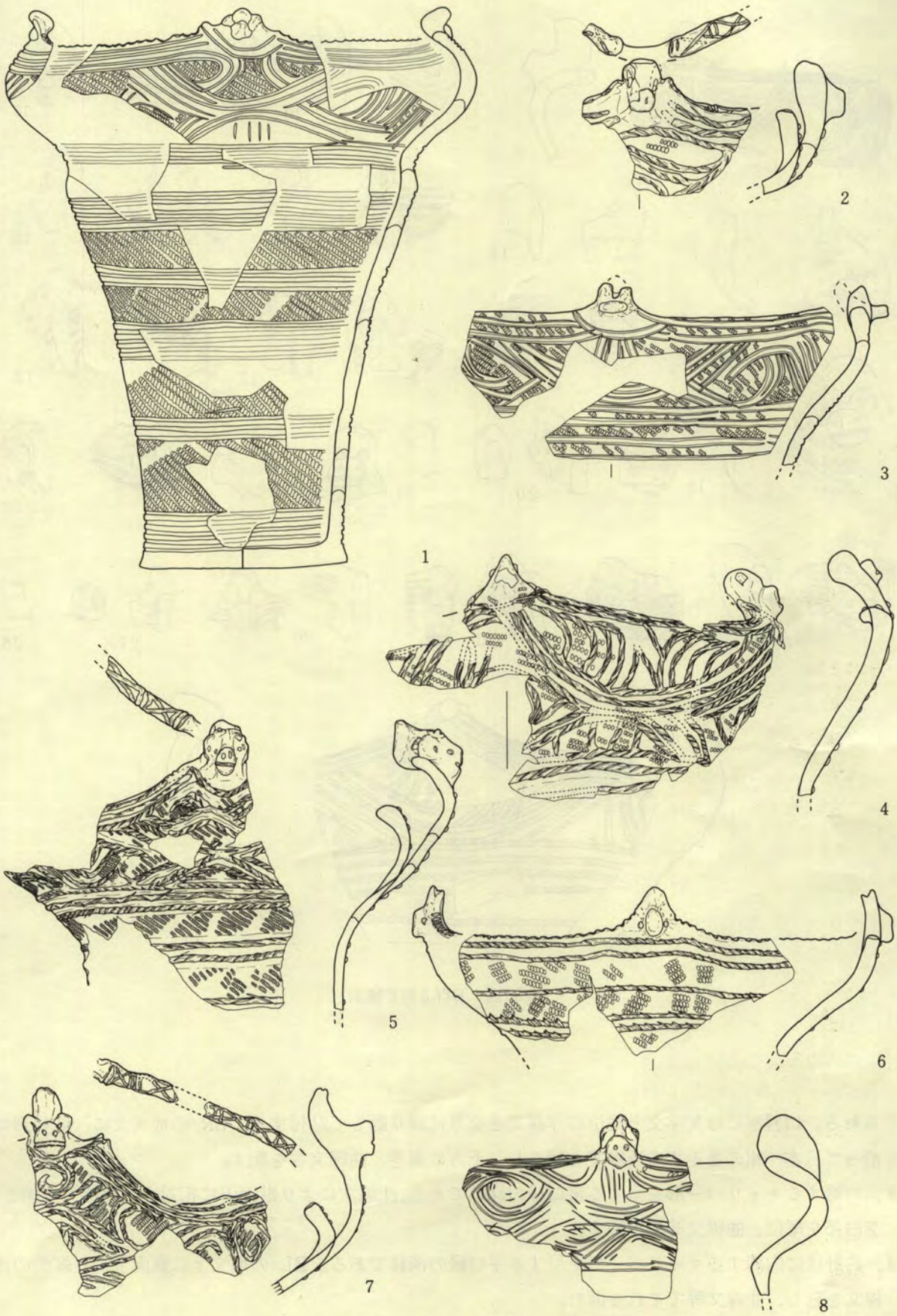
3. 内湾のやや弱いキャリパー形を呈する平口縁部片で、抽象化した獣面を付す。RL の地文を施した後、口唇部下と胴部上半に横位に並走する沈線文を廻らし、その間に曲線文等を施す。

4. 内湾するキャリパー形を呈する波状口縁部片で波頂部に獣面を付す。RL の地文を施した後、口唇部と胴部上半に横位に廻る浮線文を貼付し、その間に大きく相対する曲線文をあしらい、空白部を弧線、縦位の浮線文を施す。

5. 直立する胴部より内湾するキャリパー形を呈する波状口縁に移行し、波頂部に獣面を付す。全体に簿手の器肉である。口唇部にはX字文と縦位の浮線文を交互に繰り返して浮線文を貼付する。口唇部直下に波状に沿って三本一組で並走する浮線文と胴部の浮線文間に曲線文、X字状文等を充塡する。地文は RL である。

6. 胴部上半より大きく外反して開き、直立気味に内湾する平口縁の口縁部片で抽象化した獣面を付す。口唇部には縦位に刻み目を施す。RL の地文上に、口縁に平行して横位に廻る浮線文を二、一、二本一組で貼付し、同一方向の斜位の刻み目を施す。

7. 内湾するキャリパー形を呈する波状口縁の深鉢で、波頂部に獣面を付し、波底部には小突起が認め



第37図　B群3類E種(1)

第38図　B群3類E種(2)

られる。口唇部にはX字文と縦位の浮線文を交互に繰り返して貼付する。LR の地文上に、波状形に沿って三本一組の並走する浮線文を廻らし、下方に渦巻、曲線文等を配す。

8．内湾するキャリパー形を呈する平口縁の深鉢である。沈線文により獣面下に相対する曲線文を描き、空白部を縦位、曲線文等で埋める。

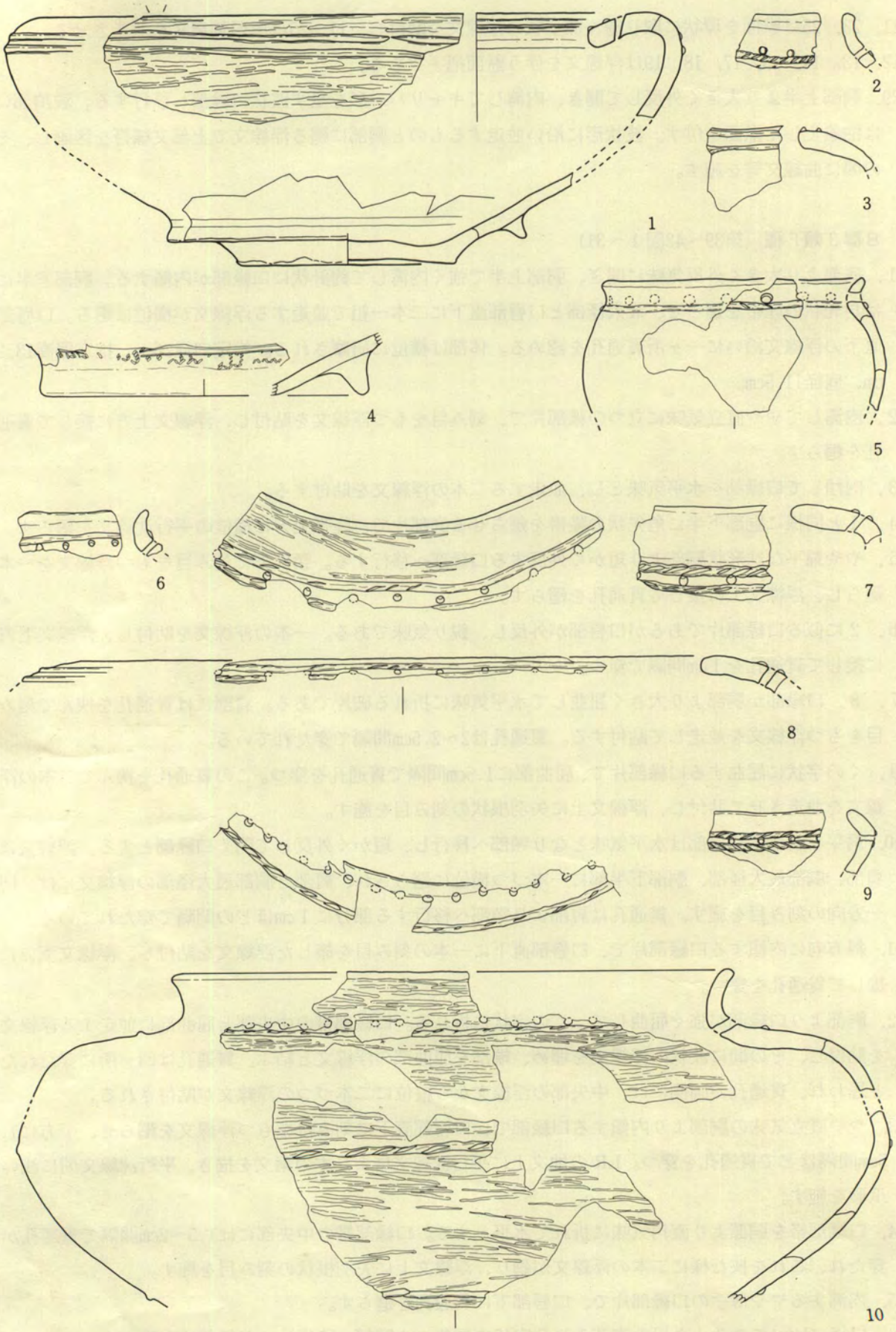
9．釣針状に内湾するキャリパー形を呈する平口縁の深鉢である。RL の地文上に獣面下より縦位の沈線文を施し、曲線文等でそれを囲む。

10．18．24．26．27は沈線文を伴う獣面把手である。

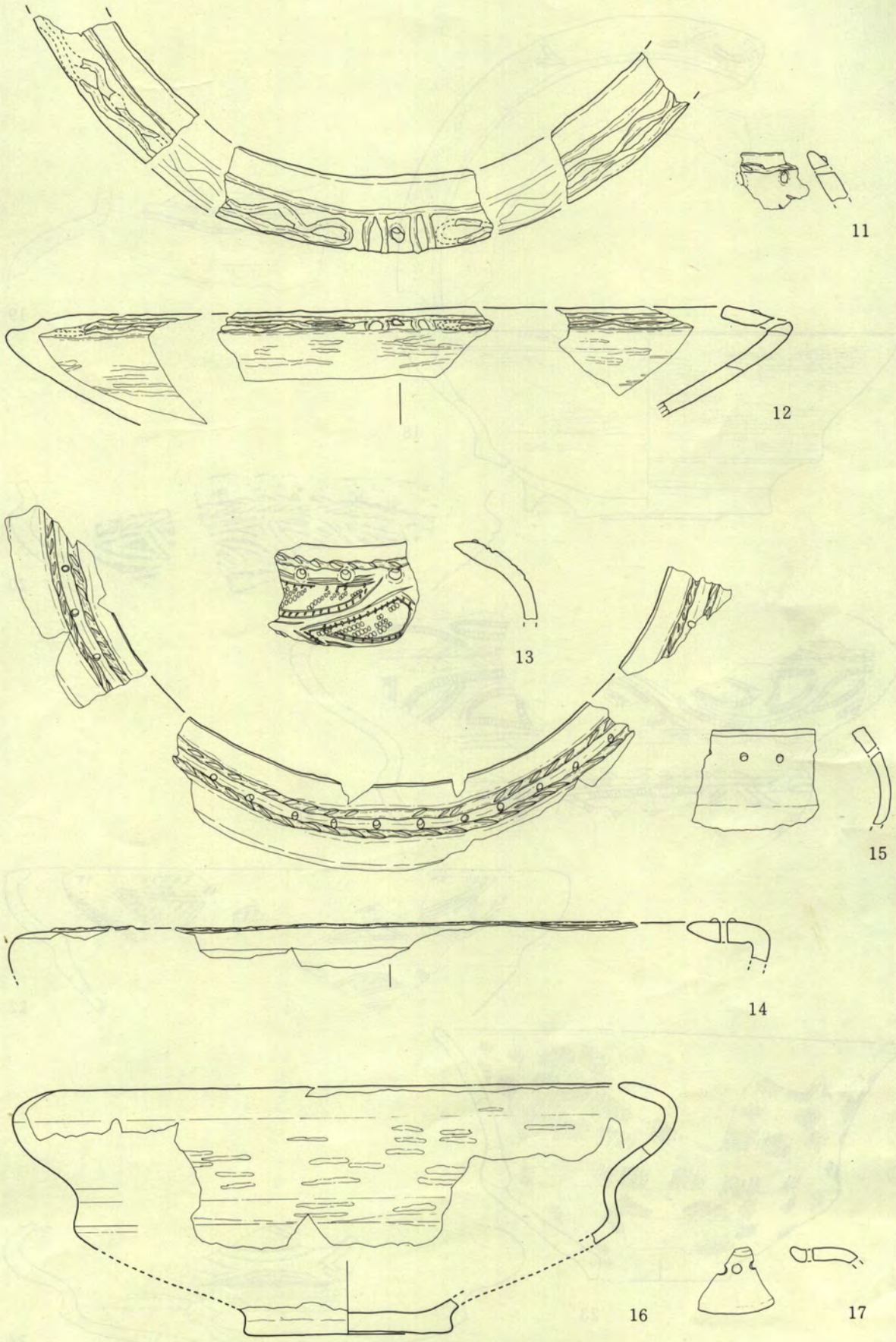
11. 23. 25は獣面を環状に取り巻く梯子状の浮線文を貼付し、11、25は円形刺突文を並走させる。
12. 13. 14. 15. 17. 18. 19は浮線文を伴う獣面把手である。
29. 胴部上半より大きく外反して開き、内湾してキャリパー形を呈す波状口縁部へ移行する。波頂部には抽象化した獣面を付す。波状形に沿い並走するものと胴部に廻る浮線文で上部文様帯を区画し、その間に曲線文等を施す。

B群3類F種（第39～42図1～31）

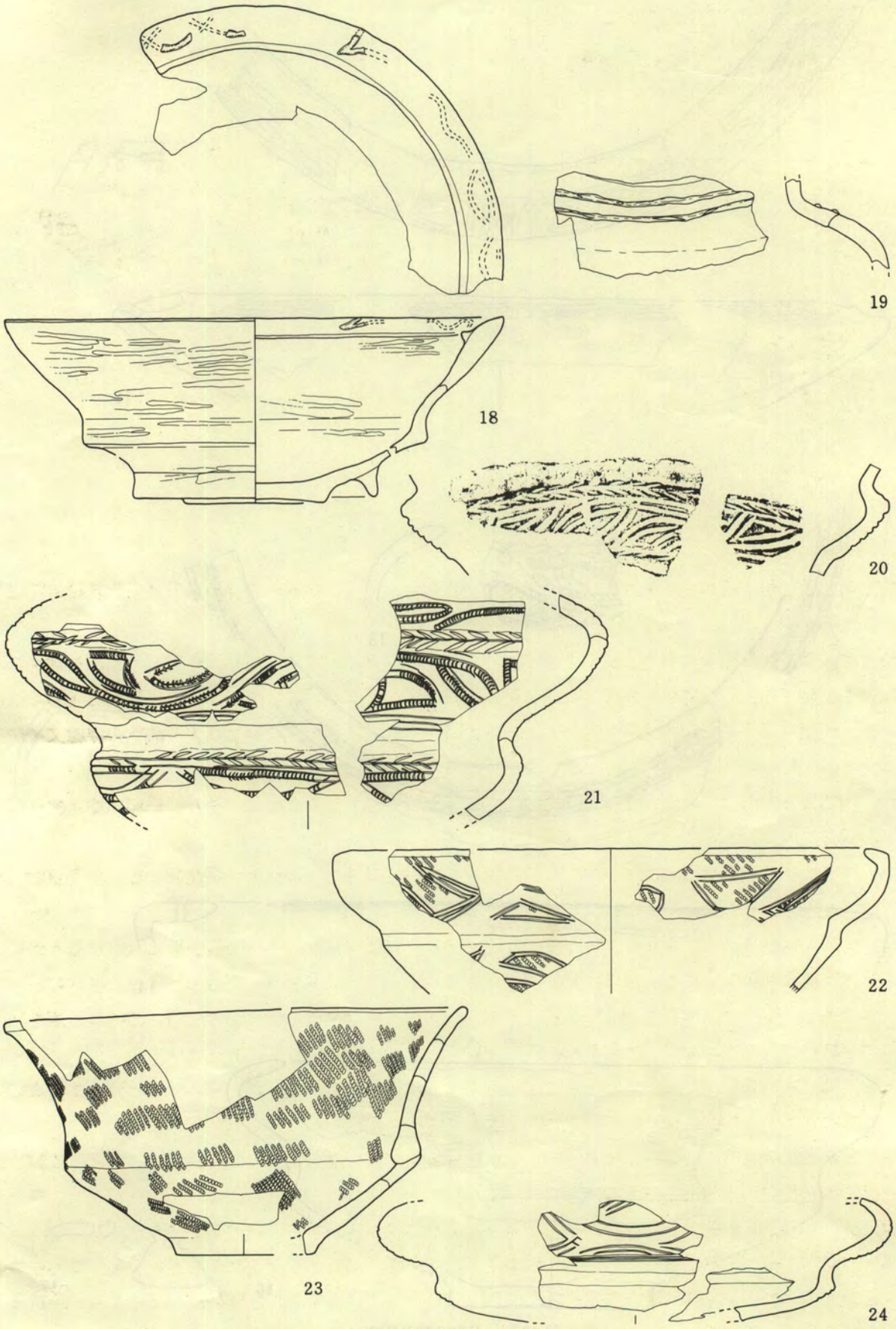
1．底部より大きく外反気味に開き、胴部上半で強く内湾して釣針状に口縁部が内傾する。胴部下半には角先状の隆帯を廻らせ、最大径部と口唇部直下に二本一組で並走する浮線文が横位に廻る。口唇部直下の浮線文沿いに一ヶ所貫通孔を認める。体部は横位に研摩される。推定口径26cm、推定器高13.2cm、底径11.5cm。
2．内湾してやや直立気味に立つ口縁部片で、刻み目をもつ浮線文を貼付し、浮線文上方に接して貫通孔を廻らす。
3．内傾して口縁部を水平気味とし、並走する二本の浮線文を貼付する。
4．1と同様に胴部下半に角先状の隆帯を廻らせる底部片で、隆帯上方に横位の平行沈線文を廻らす。
5．やや扁平な球形状胴部より短かく外反する口縁部へ移行する。頸部下に刻み目をもつ浮線文を一本廻らし、浮線文上に接して貫通孔を廻らす。
6．2に似る口縁部片であるが口唇部が外反し、鋭り気味である。一本の浮線文を貼付し、浮線文下方に接して貫通孔を1cm間隔で穿つ。
7．8．口縁部が胴部より大きく屈曲して水平気味に折れる破片である。肩部には貫通孔を挟んで刻み目をもつ浮線文を並走して貼付する。貫通孔は2～2.5cm間隔で穿たれている。
9．くの字状に屈曲する口縁部片で、屈曲部に1.5cm間隔で貫通孔を穿つ。この貫通孔を挟んで二本の浮線文を並走させて貼付し、浮線文上に矢羽根状の刻み目を施す。
10．扁平な胴部より肩部は水平気味となり頸部へ移行し、短かく外反して開く口縁部とする。浮線文は肩部、胴部最大径部、胴部下半部に一本づつ横位に廻らされ、肩部と胴部最大径部の浮線文には、同一方向の刻み目を施す。貫通孔は肩部より頸部へ移行する部分に1cmほどの間隔で穿たれている。
11．斜方向に内傾する口縁部片で、口唇部直下に一本の刻み目を施した浮線文を貼付し、浮線文下方に接して貫通孔を穿つ。
12．胴部より口縁部が強く屈曲して、くの字状に折れる。口縁部帯の中央部と屈曲部に並走する浮線文を貼付し、その間に波状の浮線文を埋め、端部を屈曲部の浮線文と結ぶ。貫通孔は四ヶ所に穿たれたと思われ、貫通孔の両側には、中央部の浮線文から縦位に二本づつの浮線文が貼付される。
13．やや直立気味の胴部より内傾する口縁部で、口唇部直下に刻み目をもつ浮線文を廻らせ、下方に1.5cm間隔ほどで貫通孔を穿つ。LRの地文上に平行沈線文により木の葉文を描き、平行沈線文間に浅い爪形を施す。
14．口縁部帯を胴部より直角気味に折れて水平とする。口縁部帯の中央部には1.5～2cm開隔で貫通孔が穿たれ、これを挟む様に二本の浮線文が廻り、浮線文上に矢羽根状の刻み目を施す。
15．内湾するやや薄手の口縁部片で、口唇部下に貫通孔を廻らす。
16．口径に比べてやや小さ目の底部よりS字状に屈曲する胴部へ移行し、口縁部は内湾する。



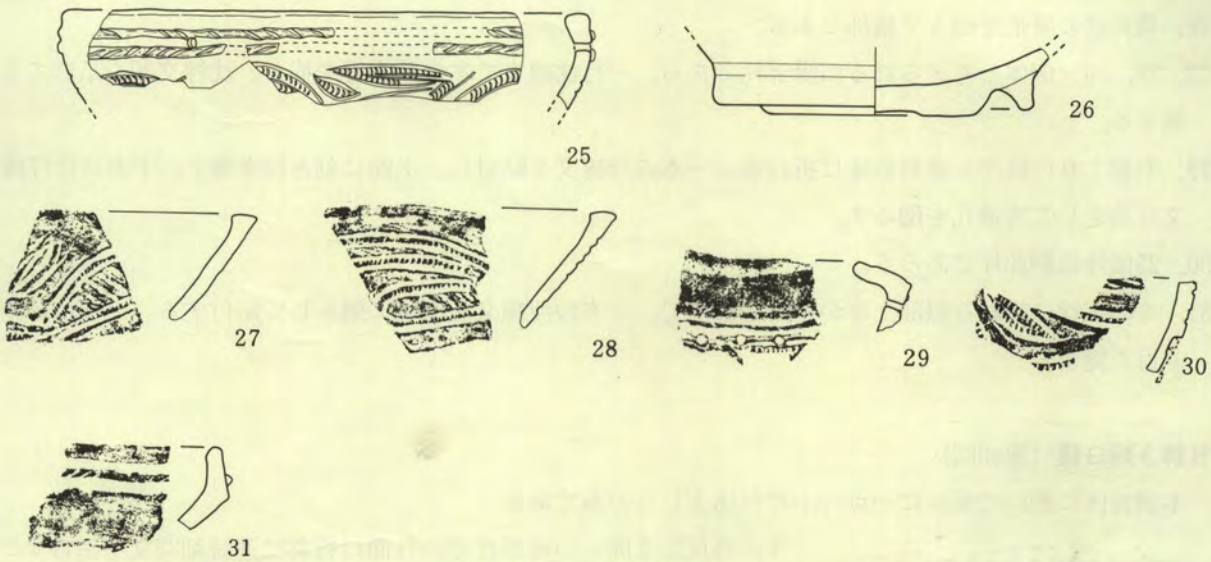
第39図　B群3類F種(1)



第40図　B群3類F種(2)



第41図　B群3類F種(3)



第42図　B群3類F種(4)

17. 胴部より強く折れて水平気味となり、僅かに口唇部を外反させる。口唇部直下に5㎜前後の間隔で貫通孔を穿つ。

18. 底部より外反気味に開き、胴部中位で段を設けて直立気味に立ち上がり、外反して器肉を徐々に肥大させながら開く口縁部へ移行する。口唇部は鋭り気味とする。口唇部内面下方に断面三角形の小隆帯、外面胴部下半に角先状隆帯を廻らす。内面の小隆帯と口唇部間には交互する波状の浮線文を貼付する。

19. 胴部より内湾して肩部へ移行し、頸部よりやや直立気味となる口縁部へ移る。肩部に並走する二本の浮線文を貼付する。

20. 胴部よりくの字状に短かく屈曲し、外反気味に開いて口縁部へ移行か？屈曲部には、矢羽根状の刻み目を施し、下方には平行沈線文で木の葉等を描く。

21. 底部よりS字状に屈曲する胴部となり、内湾する口縁部へ移行する。16の器形に類似するもので、最大径部は胴部上半より口縁部へ移行する屈曲部にある。この屈曲部と下方のS字状屈曲部には一条の沈線文を横位に廻らし、沈線文を挟んで矢羽根状に刻み目を施し、S字状の頸れ部の無文部を除いて平行沈線文で木の葉文、木の葉状入組文を描く。平行沈線文間は爪形で充塡する。

22. 内湾気味に開く胴部より短かく直立する頸部を設け、内湾して口唇部を短かく水平気味に折る口縁部へ移行する。RL の地文上に平行沈線文で木の葉等を描く。

23. 底部より直線的に斜方向に開き、くの字状屈曲部を設けて直立気味に立ち上がり、外反して開く口縁部へ移行する。地文は RL である。

24. 21の器形を扁平化したもので、平行沈線文により曲線で木の葉状等の文様を描く。

25. 内湾してやや口唇部を肥大させる口縁部片で、口唇部下に二本の浮線文を並走させ横位に廻らす。浮線文上には上下に刻み目の方向を変え矢羽根状とする。浮線文間には貫通孔が存在する。浮線文下方には平行沈線文等により木の葉文を描き、沈線文間に爪形を充塡する。

26. 角先状の隆帯を廻らす底部である。

27. 28. 同一個体と考えられる口縁部片である。平行沈線文で木の葉文等を描き、沈線文間を爪形で充塡する。

29. 胴部より口縁部が直角気味に折れる。一本の浮線文を貼付し、上面に刻み目を施す。下方には浮線文に並走して貫通孔を廻らす。

30. 25個体の胴部片であろう。

31. くの字状に折れる胴部上半から口縁部片で、一本の浮線文を横位に廻らして貼付する。上面には刻み目を施す。

B群3類G種（第43図）

本調査区に於いて僅かに一点の小片が出土したのみである。

第43図　B群3類G種

1. 外反して開く口縁部片で、外面口唇部に連続刺突文を廻らす。口縁部文様帯は、沈線文を横位とX字状に集合させる。頸部には斜位に施す。貼付文は、ボタン文とカマボコ文を交互に付すのであろう。

B群4類（第44、45図1～27）

1. 口縁に比べてやや小さ目の底部より直線的に外反して開く。口縁部でやや直立気味に内湾し、波頂部の口唇部を内傾させる。地文は撚糸文で斜位、横位に施す。三条一組で並走する平行沈線文を口唇部下にはやや波状気味に施し、胴部中位と下半部には斜状気味に廻らす。沈線文内は一部分を除き爪形文を連続させる。上部爪形文帯間には、二～三条一組の平行沈線文で三角文、木の葉状入組文を描く。

2. 外反して開く胴部片で、一条の爪形文を伴う平行沈線文を横位に廻らし、上下に横位、斜位の平行沈線文を施す。

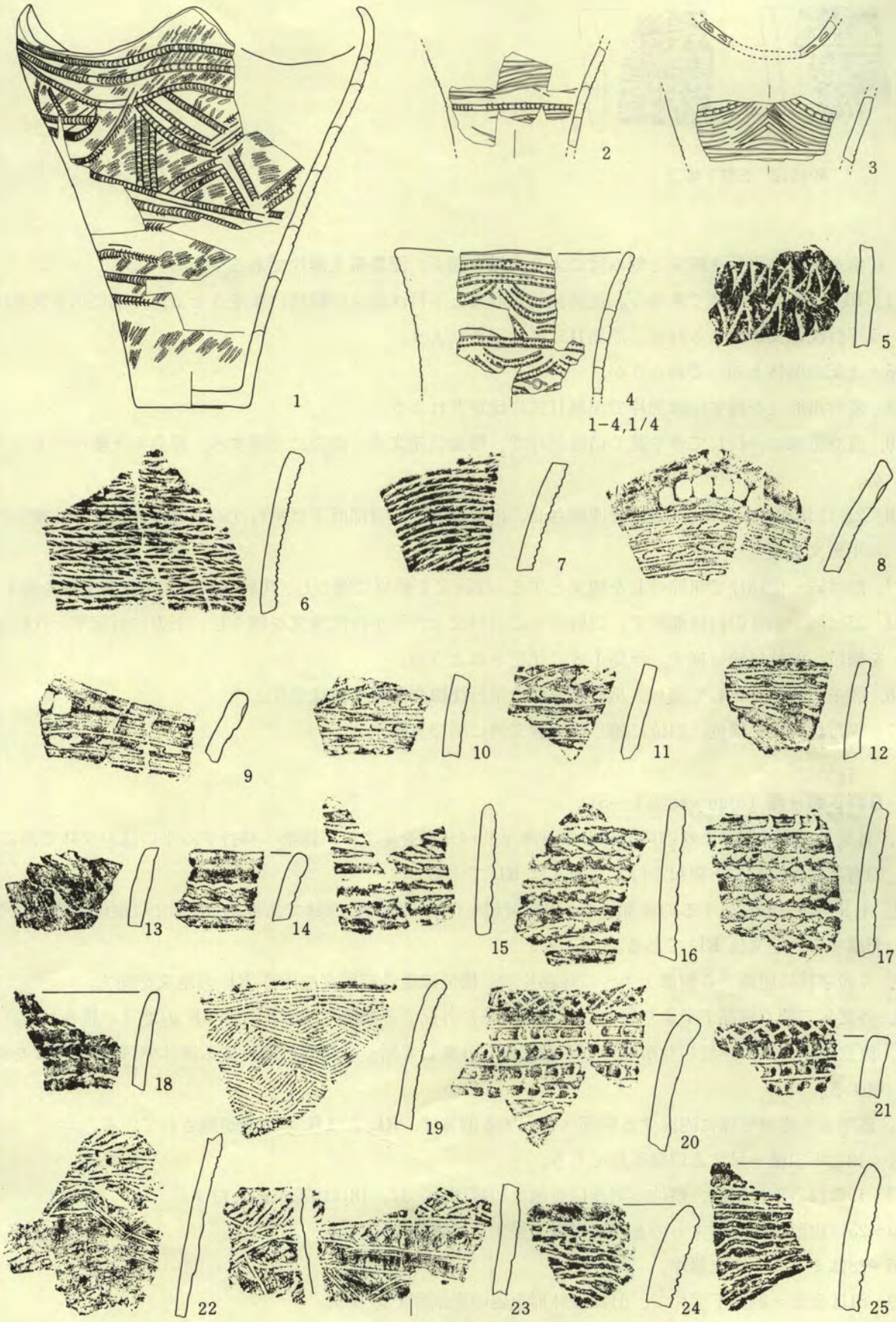
3. 直線的に開く波状口縁の深鉢片である。口唇部には刺突を連続させる。波形に沿って口唇部下に一条の爪形文を伴う平行沈線文を廻らし、胴部には二条以上の爪形文を伴わない平行沈線文を横位に並走させる。この空間部に波頂下を境として平行沈線文で肋骨文を施す。

4. 直立気味な胴部よりやや外反して開く口縁部へ移行する。変形爪形文を伴う平行沈線文を口唇部に二条、胴部上半に一条横位に廻らす。この空間部には相対気味に二条一組の平行沈線文で曲線文を施す。下方の文様帯の空白部に円形刺突文を施す。地文は撚糸文である。

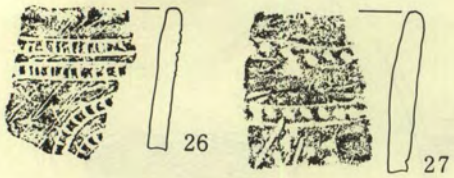
5. 直立気味にやや外反する胴部片で、ハマグリ等の二枚貝による波状貝殻文を施す。浮島II式に比定されよう。

6. 7は同一個体である。平行沈線文を意匠文として横位、斜位に施し、刻み目を施す。浮島I式に比定されよう。

8～13は同一個体の口縁部～胴部下半片である。口縁は波状口縁を呈し、波頂下に横位に連続する指頭



第44図　B群4類(1)



第45図　B群4類(2)

圧痕を施す。平行沈線文と刻み目により文様を描く。浮島系土器片であろう。

14. 16. 17は同一個体であろう。連続波状爪形文と平行沈線文を横位に並走させる。一部に爪形文を伴う平行沈線文が認められる。浮島II式に比定されよう。

15. 上記の個体と同一であろうか。

18. 変形爪形文を施す口縁部片で浮島II式に比定されよう。

19. 直立気味に外反してやや開く口縁部片で、櫛歯状施文具で斜位に充塡する。浮島系土器片であろうか。

20. 21は口唇部に×字状刻み目を連続させ、口唇部下、口唇部直下に平行沈線文を並走させ、沈線文内に爪形文を交互して施す。

22. 23は同一個体片で無節のLを地文とする。沈線文を横位に廻らし、沈線文間に鋸歯状の文様を施す。

24. 25は同一個体の口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う平行沈線文を廻らし、下方に有節平行沈線文を横位、波状気味に施す。浮島I式に比定されようか。

26. 撚糸文を地文として施し、爪形文を伴う平行沈線文を施す口縁部片。

27. 平行沈線文を横位、斜位に施し、沈線文内に刺突を施す。

B群3類H種（第46～48図1～51）

1. 外反して開く胴部より内湾気味となりキャリパー形を呈する口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。口唇部には山形の小突起を付す。地文は RL である。

2. キャリパー形を呈する口縁部片で、山形突起を付す平口縁の深鉢である。口唇部には縦位の刻み目を充塡する。地文は RL である。

3. くの字状に屈曲する胴部上半～口縁部片で、横位に走る結節文を伴う RL の地文を施す。

4. 外反して開く胴部下半より屈曲して直立気味に外反する胴部片で、RL と LR の地文が施される。

5. 直立気味にやや外反しながら伸びる胴部より外反して開く口唇部へ移行する深鉢で、細かい RL を充塡する。

7. 底部より直立気味に内湾する胴部へ移行する個体で、RL と LR の地文が施されている。

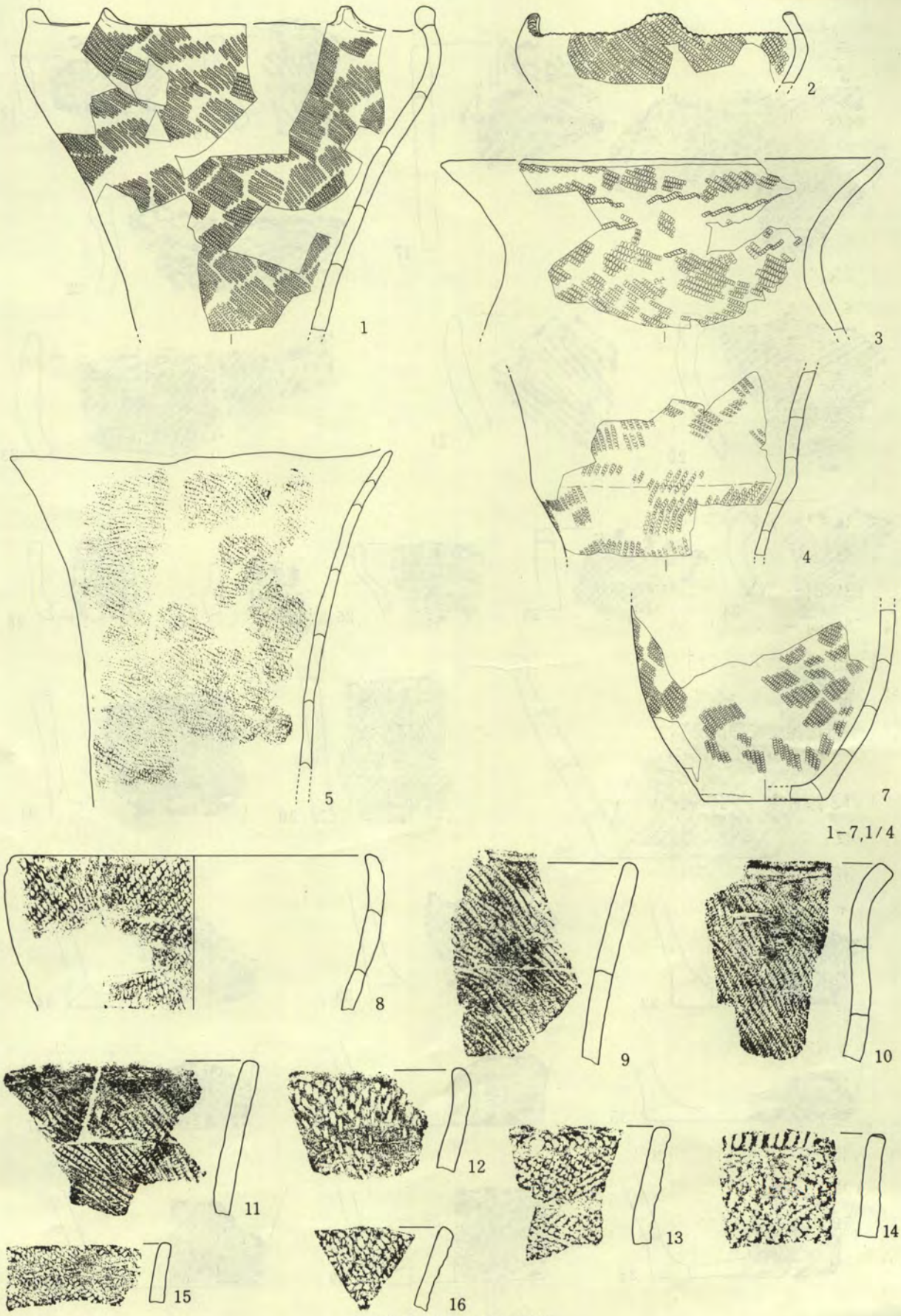
8～13は平口縁を呈する口縁部片である。

14～19は口唇部に斜位、縦位の刻み目を施す口縁部片。17、18は山形突起を付す。

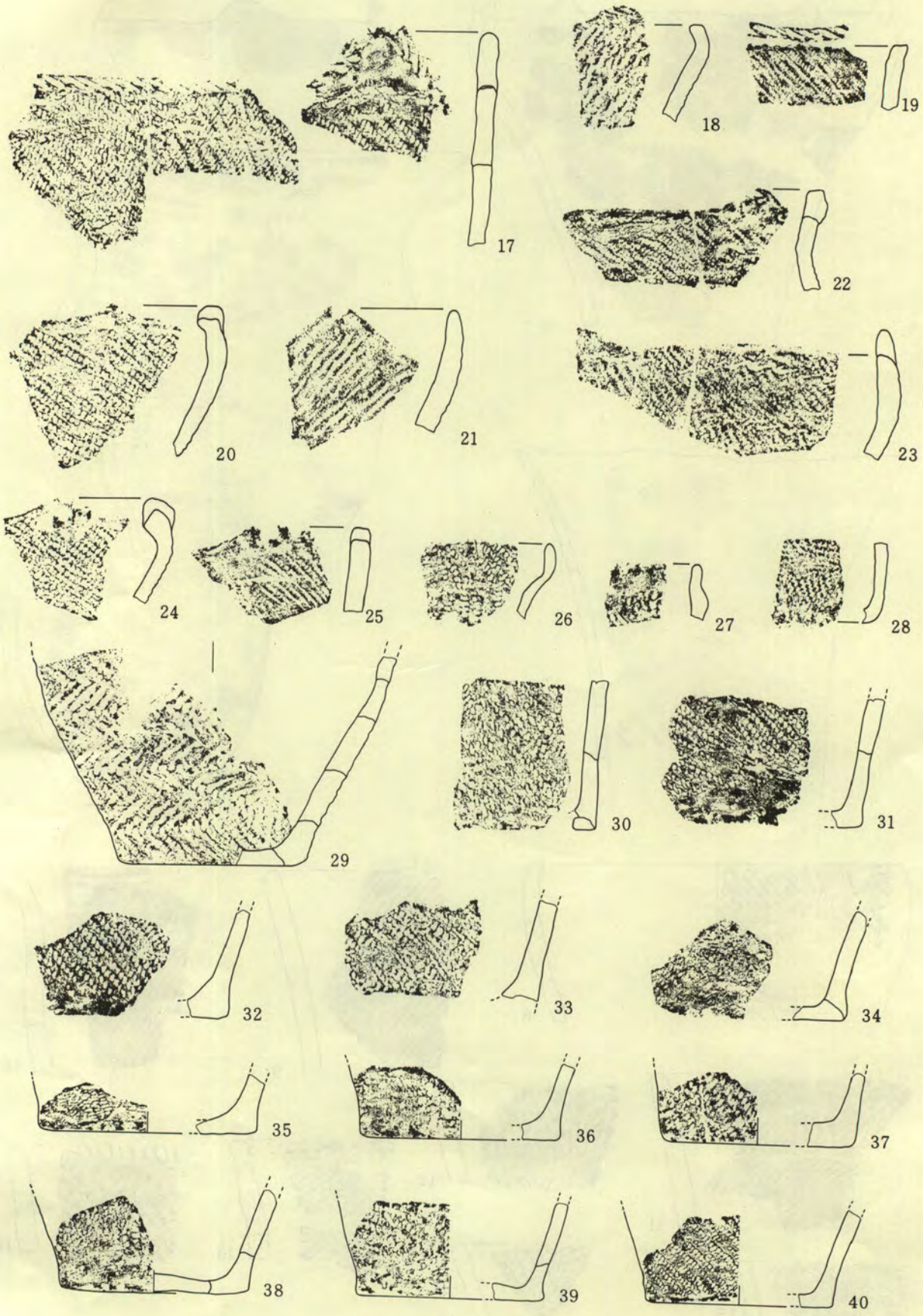
20～25は山形突起を付すものと波状口縁を呈する口縁部片。

26～28はミニチュア土器片。

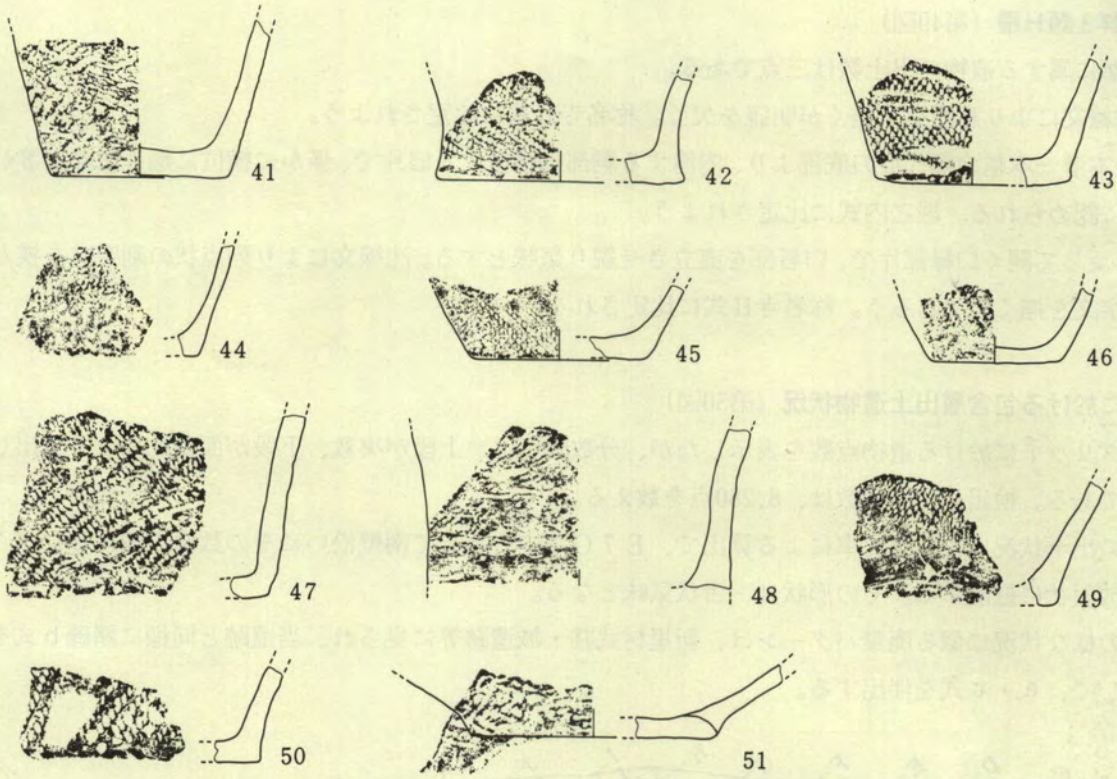
29～51は底部～胴部下半片で、51は浅鉢形土器の底部片であろう。



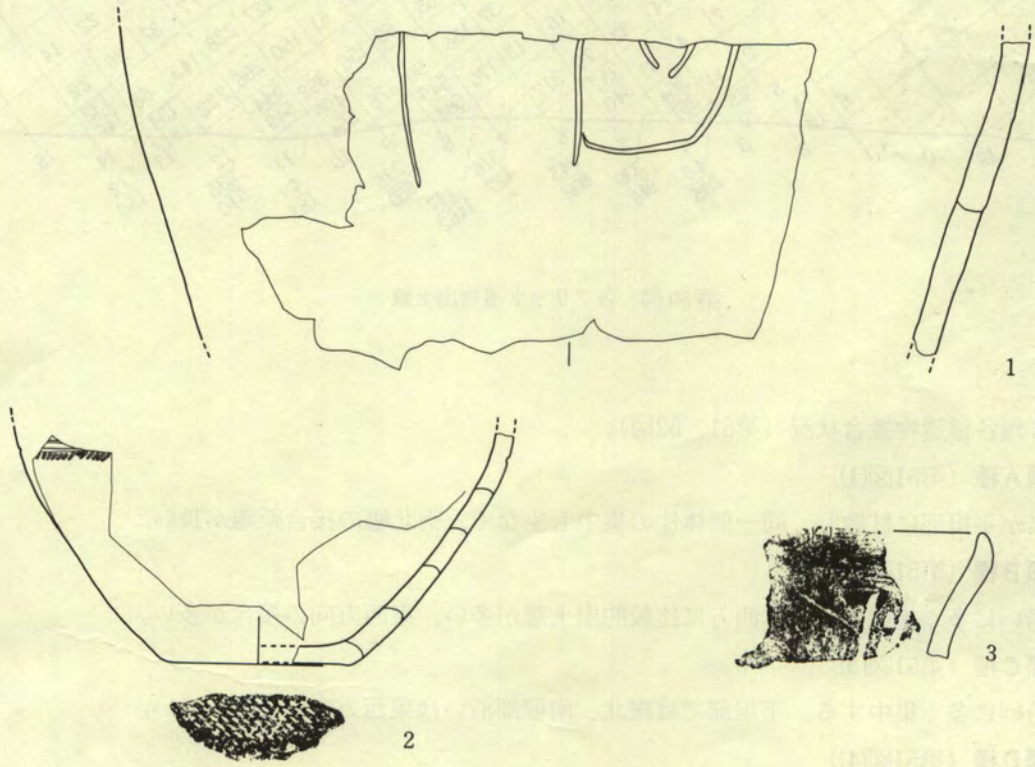
第46図　B群3類H種(1)



第47図　B群3類H種(2)



第48図　B群3類H種(3)



第49図　D群

D群3類H種（第49図）

本類に属する遺物の出土数は三点である。

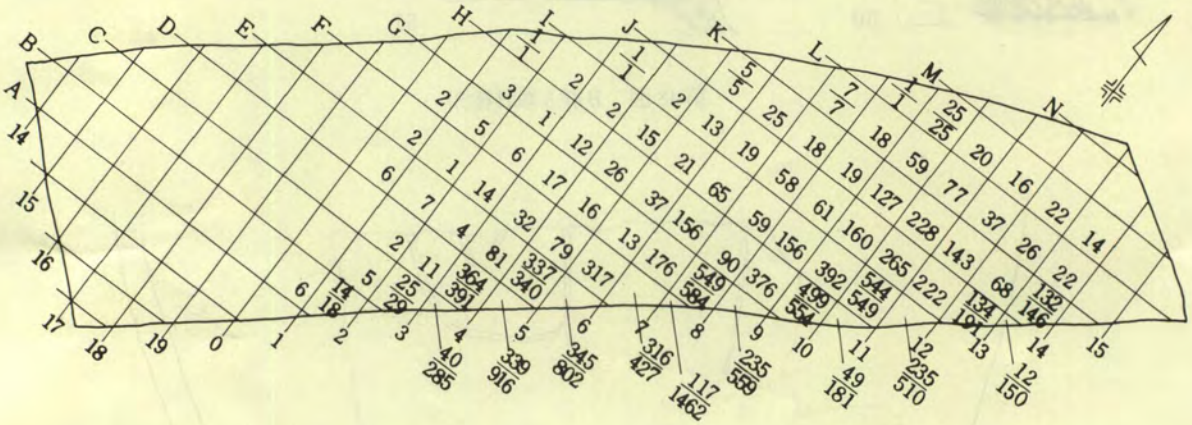
1. 沈線文により意匠文を描くが明確を欠く。称名寺II式に比定されよう。
2. 一本潜一本越の網代痕の底部より、内湾する胴部へ移行する破片で、僅かに横位に廻る沈線文等が胴部に認められる。堀之内式に比定されよう。
3. 外反して開く口縁部片で、口唇部を直立させ鋭り気味とする。沈線文により列点状の刺突文を挟んでJ字文を描くのであろう。称名寺II式に比定される。

E区に於ける包含層出土遺物状況（第50図）

各グリットに於ける遺物点数を表示したが、分数表示は、上段が実数、下段が面積比率より算出した数値である。検出した破片数は、8,280点を数える。

その出土状況は、面積比率による算出で、E7Gを中心として南壁沿いにその数値を減らしながら、ほぼ放射状に拡散する。その形状は、舌状気味となる。

この様な状況に似る廃棄パターンは、新里村武井・城遺跡等に見られ、当遺跡と同様に諸磯b式を主体として、a・c式を伴出する。



第50図　各グリット遺物出土数

E区B群3類各種遺物接合状況（第51、52図）

B群3類A種（第51図(1)）

その大半が平担部に拡散し、同一個体片の集中も少なく、南北幅の接合距離が長い。

B群3類B種（第51図(2)）

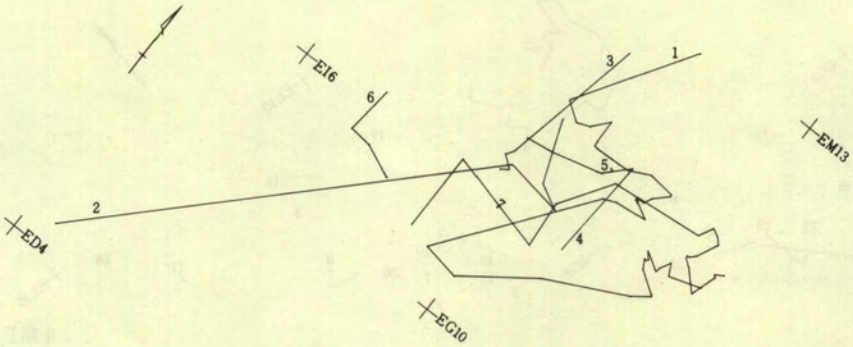
南壁部沿いに多く集中するが、西方に比較的出土量が多い。東西方向の接合が多い。

B群3類C種（第51図(3)）

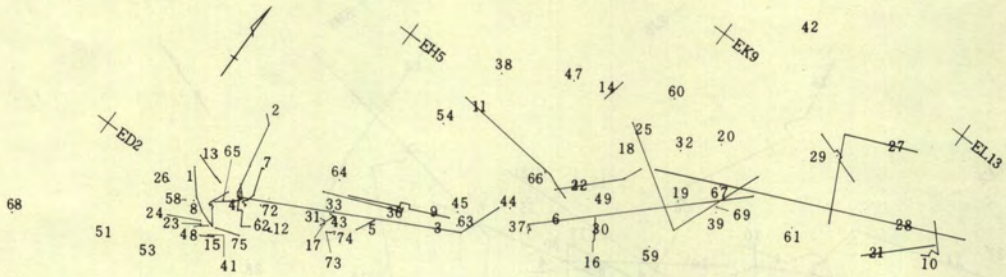
南壁部沿いに多く集中する。平坦部では南北、南壁部沿いは東西方向の接合が多い。

B群3類D種（第51図(4)）

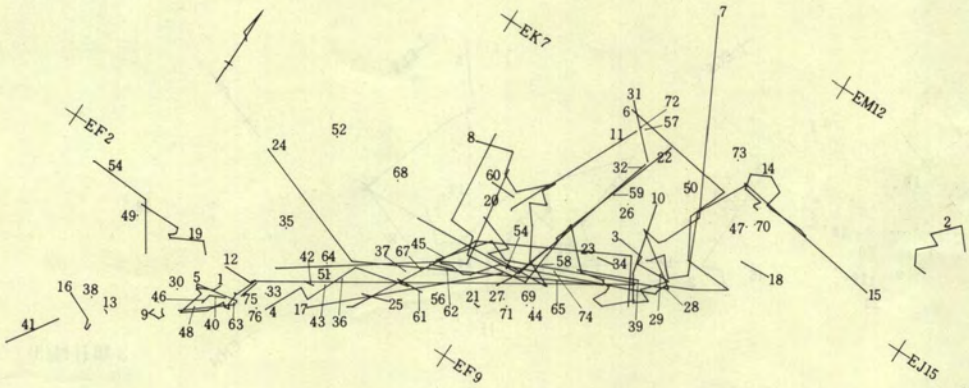
南壁部沿いに集中するが、拡散幅も広い。



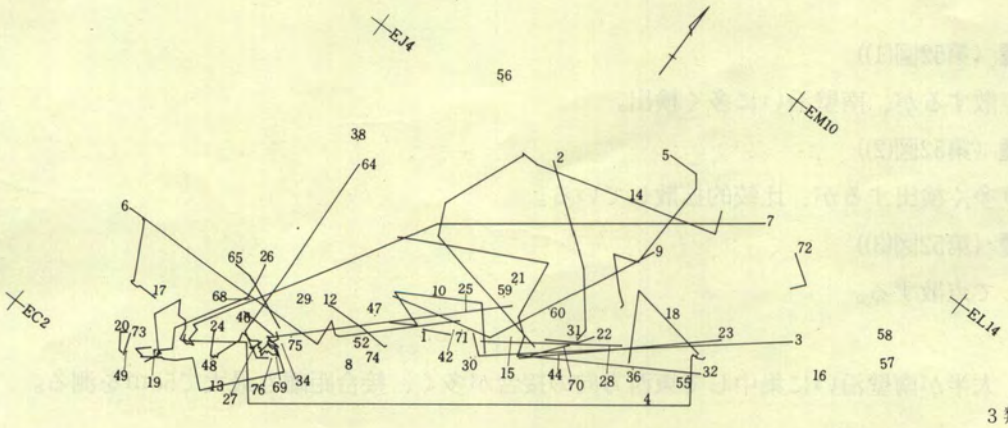
3類A種(1)



3類B種(2)

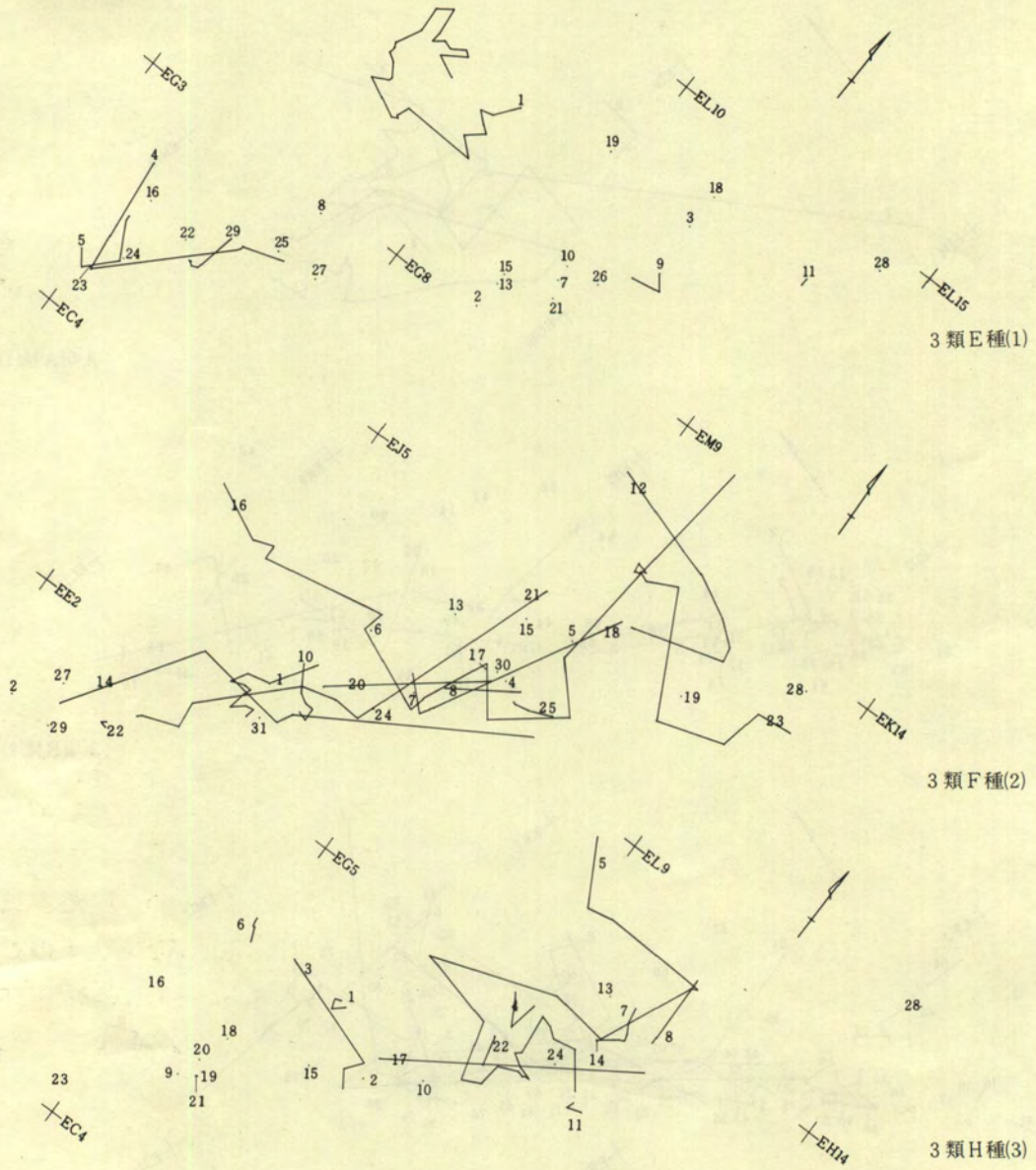


3類C種(3)



3類D種(4)

第51図　E区B群3類接合図(1)



第52図　E区B群3類接合図(2)

B群3類E種（第52図(1)）

1を除いて点散するが、南壁沿いに多く検出。

B群3類F種（第52図(2)）

南壁にやはり多く検出するが、比較的拡散している。

B群3類H種（第52図(3)）

全体に拡散して点散する。

以上の様に、大半が南壁沿いに集中して東西方向の接合が多く、接合距離も最大で50mを測る。